

沖繩市文化財調査報告書第二三集

心込成籠
動物世界

二〇〇〇年三月

沖繩市教育委員会

志道成記

動物世界

あいさつ

沖縄市教育委員会

教育長 小渡良一

このたび沖縄市文化財調査報告書第二三集『むかしばなし（動物昔話）』を発刊するにあたり、一言ごあいさつを申しあげます。

昔話は地域の風土の中で育まれ、遠い昔から先人達により代々語り継がれてきました。しかし、変化の激しい現代社会において、昔話やそれを伝えてきた方言を守り継承していくことは、次第に難しくなりつつあります。

こうしたことから本報告書では、話者の語りを忠実に収めるように配慮しました。また、沖縄各地からの移住者が多い沖縄市という地域的特色や、話者の語りの変遷といった部分にも着目した編集をこころがけました。

本報告書が、家庭や学校、ひいては生涯学習の様々な場面で広く活用され、昔話の継承に役立つことを期待いたします。

おわりに、今回の昔話調査に快くご協力下さった各字の話者ならびに関係者の皆様に対しまして、深く感謝申し上げます。

二〇〇〇年三月二日

凡 例

一、民話集の構成

① この民話集は、昭和五五年度から平成三年にかけて、沖縄市全字で調査聴取された民話と、わらべ歌調査、文化財調査で得た民話の中から、動物を主人公とする「動物昔話」を抽出し構成した。

② この民話集には、話者の重複や同類の話が頻出するが、内容を丁寧にみてゆくと、登場する動物の違いや、語り手自身の時間の経過の中での語りの違いも見受けられるので、貴重だと考え、あえて掲載した。

③ 平成五年度に沖縄市文化財啓発資料第二集「むかしばなし」を小学生向けに刊行したが、本年度は原資料をまとめた。

二、沖縄市の民話調査

① 沖縄市教育委員会では、沖縄国際大学の遠藤庄治教授に、調査の任をとっていただき、記録保存を図るため、昭和五五年の調査をかわきりに、昭和六〇年～六二年度は編集事務局の調査。そして、それら

の調査資料を基礎に、平成二年度に沖縄国際大学口承文芸研究会及び沖縄民話の会で「沖縄市口承文芸学術調査団」を結成し、沖縄市全域を予備調査、第一次本調査、第二次本調査、補足調査、さらに、平成三年度の補足調査まで及んだ。

② この民話集は、右の調査において聴取した話をもとに事務局で編集したものである

三、聴取話の翻字選定

① 「沖縄市の民話」を課題とする、平成二年度・平成三年度沖縄国際大学文学部国文学科の学生七名が沖縄市の民話を研究し、卒業論文として提出した。

○平成二年度 旧美里地区
上門博之・山城綾子・宜保 勝

○平成三年度 旧コザ地区
香村夏子・照屋京子・石川小百合・大川清子

その翻字話の中から、本文掲載話を選定した。これらの翻字話は、掲載話本文の分量としては、十分な分量でなかったため、翻字されない話で、語りの良い話を選定し、事務局で追加翻字をした。

② 翻字選定では、市内で聴取した「動物昔話」の話

凡 例

一、民話集の構成

① この民話集は、昭和五五年度から平成三年にかけて、沖縄市全字で調査聴取された民話と、わらべ歌調査、文化財調査で得た民話の中から、動物を主人公とする「動物昔話」を抽出し構成した。

② この民話集には、話者の重複や同類の話が頻出するが、内容を丁寧にみてゆくと、登場する動物の違いや、語り手自身の時間の経過の中での語りの違いも見受けられるので、貴重だと考え、あえて掲載した。

③ 平成五年度に沖縄市文化財啓発資料第二集「むかしばなし」を小学生向けに刊行したが、本年度は原資料をまとめた。

二、沖縄市の民話調査

① 沖縄市教育委員会では、沖縄国際大学の遠藤庄治教授に、調査の任をとっていただき、記録保存を図るため、昭和五五年の調査をかわきりに、昭和六〇年～六二年度は編集事務局の調査。そして、それら

の調査資料を基礎に、平成二年度に沖縄国際大学口承文芸研究会及び沖縄民話の会で「沖縄市口承文芸学術調査団」を結成し、沖縄市全域を予備調査、第一次本調査、第二次本調査、補足調査、さらに、平成三年度の補足調査まで及んだ。

② この民話集は、右の調査において聴取した話をもとに事務局で編集したものである

三、聴取話の翻字選定

① 「沖縄市の民話」を課題とする、平成二年度・平成三年度沖縄国際大学文学部国文学科の学生七名が沖縄市の民話を研究し、卒業論文として提出した。

○平成二年度 旧美里地区

上門博之・山城綾子・宜保 勝

○平成三年度 旧コザ地区

香村夏子・照屋京子・石川小百合・大川清子

その翻字話の中から、本文掲載話を選定した。これらの翻字話は、掲載話本文の分量としては、十分な分量でなかったため、翻字されていない話で、語りの良い話を選定し、事務局で追加翻字をした。

② 翻字選定では、市内で聴取した「動物昔話」の話

型を掲載するよう留意した。

③ 話者の語りを忠実に、文字にしたため、読みづらい点もあろうかと思いますが、あえて、語り手の抑揚のある話が再現できるようにつとめた。

ただし、口癖や場つなぎの「あのう」「このう」等は省いた。

④ 段落の設定及び、句読点の扱いは可能なかぎり話者の語りに即するように心掛けたが、語りに区切りがない場合は、翻字者の判断で、適宜句読点を打ち、話の展開にそって段落を設定した。

⑤ 語りの中の会話部分は、その始め部分で改行し、会話を示す「」を用いた。

四、本文の整備

① テープに収録された話者の話を語りのままに文字化した。が、繰り返しが多かったり、話の内容が前後したり、言葉の脱落によってストーリーが理解しにくくなっている場合や、話者の語りが明らかに誤っている場合は、その部分を整理し、「」で言葉を補った。

② 方言は、漢字、仮名まじり文とし、漢字の初出の

ところ、及び、同じ漢字でも音声の違うところにより仮名をつけた。

③ 共通語と方言が著しく混在している話については、方言の語りのあとで、「」に訳文を入れた。

④ 方言で頭切れの場合は、対訳で「」し、言葉を補った。

⑤ 話の途中で、話者が言葉の意味を説明している箇所は「」した。

五、本文について

① 方言の語りについては、上段に方言の翻字、下段に共通語訳として二段組とし、共通語のものについては一段組とした。

② 話の初めに題名、字名、話者名及び生年月日、出身地を記した。字名は調査時話者が所属していた行政区を記した。

話の後ろに、聴取年月日と調査者名、翻字者名を記し、収録テープのNOと収録面を記した。

③ 話者については、調査員が過去に調査し、記録しているため、話者の氏名、生年月日が不明なものもある。

六、本文の掲載順序

- ① 分類ごとに並べた。
- ② 同話型の話の配列は沖縄市の北側から字ごとに配列した。
- ③ 同一話者の同一話については、聴取年月日順に配列した。

七、注記について

- ① 地名、地域独特な意味を持つ語句、民俗語彙、注記が必要と思われる箇所については、掲載話の後ろにできるだけ注記した。

八、資料整理

沖縄国際大学口承文芸研究会

宜保勝・上門博之・山城綾子・香村夏子・照屋京子・石川小百合・大川清子・山内智子・辺土名初美

原稿作成及び編集

辺土名初美・仲本朝彦・宮城利旭・比嘉清和・宮城昭美・嘉陽律子・赤嶺ゆかり

むかしばなし(動物昔話)

題字 吉浜靖起

あいさつ

沖繩市教育委員会 教育長 小渡 良一

1

凡 例

2

本文目次

6

本 文

11

調査日誌と調査協力者

147

参考文献

154

おわりに

155

目次

1 蝙蝠の双心

- 1 登川 仲宗根盛雄……………11
2 山里 稻嶺 盛英……………12

2 蠅と雀

- 1 古謝 金城 眞良……………13

3 十二支由来

- 1 登川 仲宗根盛雄……………14
2 知花 島袋 タケ……………17
3 古謝 金城 眞良……………19
4 泡瀬第一 普久原 幸……………20
5 中の町 比嘉 貞信……………22
6 中の町 町田 宗勇……………25
7 諸見里 宮島 眞良……………27
8 山里 稻嶺 盛英……………27
9 山里 伊佐 安弘……………28

4 兎と亀

- 1 登川 平田 盛永……………29

5 猿蟹合戦

- 1 古謝 金城 眞良……………30

6 逃げ遅れた蟹

- 1 泡瀬第一 普久原 幸……………31

7 猿の生肝

- 1 知花 島袋 盛保……………32
2 吉原 松岡 俊吉……………35

- 3 泡瀬第一 普久原 幸……………37
4 室川 新城 安平……………39

8 蛙と牛

- 1 登川 仲宗根蒲助……………41

9 雲雀と生き水

1 宮 里 上根 ウサ 42

10 雀孝行

1 池 原 幸島 マツ 44
 2 池 原 盛島 五郎 46
 3 池 原 与那嶺朝英 48
 4 池 原 又吉 松八 49
 5 登 川 平田 盛永 49
 6 登 川 仲宗根トミ 51
 7 登 川 高良 カマ 52
 8 登 川 仲宗根チル 53
 9 登 川 仲宗根蒲助 54
 10 登 川 平田 嗣光 55
 11 登 川 仲宗根盛雄 56
 12 登 川 平田 フミ 57
 13 知 花 島袋 タケ 57
 14 知 花 栄野比トヨ 60
 15 宮 里 上根 ウサ 61
 16 宮 里 上根 ウサ 63

17 宮 里 上根 ウサ 65
 18 古 謝 島袋 義堅 67
 19 古 謝 島袋 義堅 68
 20 大 里 永山 ウシ 69
 21 高 原 島袋 カメ 71
 22 高 原 島袋 ヨシ 73
 23 比 屋 根 城間 文子 74
 24 越 来 仲宗根初子 76
 25 中 央 金城 初子 78
 26 嘉 間 良 安次嶺ツル 79
 27 住 吉 座間味マカト 80
 28 住 吉 德里 静 81
 29 安 慶 田 神里マカト 82
 30 安 慶 田 仲村渠シズ 84
 31 室 川 佐久田千代 85
 32 中 の 町 比嘉 貞信 86
 33 中 の 町 石川 富子 88
 34 中 の 町 町田 宗勇 90
 35 中 の 町 新崎カマド 91
 36 園 田 喜友名 春 92
 37 諸 見 里 宮島 真良 93

11

雨蛙不孝

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	39	38
胡屋島	室川新城	中央湧田	安慶田屋宜	越来高島	高原島袋	宮里上根	宮里上根	宮里上根	知花栄野比トヨ	知花島袋タケ	登川仲宗根フミ	登川仲宗根盛雄	登川仲宗根トミ	登川仲宗根カメ	登川仲宗根カナ	登川平田盛永	池原島袋	山里伊佐
千代	安平	トミ	カメ	邦子	サダ	ウサ	ウサ	ウサ	ウサ	タケ	フミ	盛雄	トミ	カメ	カナ	盛永	シズ	安弘
113	113	112	111	111	109	108	106	105	104	102	101	100	100	99	98	96	95	94

12

犬の足

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	22	21	20	19	18
諸見里	中の町	中の町	中の町	胡屋	胡屋	中央	嘉間良	住吉	泡瀬第一	泡瀬第一	知花	登川	池原	山里	山里	中の町	中の町	胡屋
宮島	山城	比嘉	比嘉	當真	當真	金城	普久原ウシ	浜比嘉ナヘ	普久原	普久原	宮里	平田	又吉	伊佐	伊佐	比嘉	山城	知念
真良	清輝	良信	貞信	アキ	アキ	初子	ウシ	幸	幸	幸	秀栄	盛永	松八	安弘	安弘	貞信	清輝	真章
133	131	131	127	126	125	125	124	123	123	122	121	120	120	119	118	116	114	114

13 年に何回
[15] 山里 伊佐 安弘……………133

[1] 知花 宮里 秀栄……………135
[2] 南桃園 山内 盛福……………136

14 猿の赤尻由来

[1] 高原 長峯 シズ……………137

15 蛙由来

[1] 高原 島袋 シズ……………138
[2] 高原 島袋 シズ……………139

16 猫の名の由来

[1] 高原 長峯 シズ……………140

17 もの言う蛙

[1] 泡瀬第一 普久原 幸……………141

18 おろかな口バ

[1] 泡瀬第一 普久原 幸……………143

19 酒の始まり

[1] 山内 内田 清栄……………144

20 牛に化けた古い竈

[1] 古謝 金城 眞良……………145

1 蝙蝠こうもりの双心ふたこころ

①

登川 仲宗根盛雄（明治四三年九月一五日生）登川

鳥類と獣が「どれどれば、誰の味方である」といって、勢力争いやつたから、そこに蝙蝠というものが仲介に出て、
「獣の方が、勢力が強い時には、一匹でも勝つ方がいいから」
と言って、

「私は毛も生えているし、子どもを育てるお乳もあるから、私はあなたがたの味方だから一緒にしてくれ」と頼んだら、

「ああ、そうだ。一人でも多ければ、多いほど勢力はあるから、あなたがたを自分の味方にしてやろう」と言った。また、そのうちに鳥の方が勢力が強くなったから、

「これではいけない」

と言って、また鳥の方に、

「私はあなたがたと一緒に飛ぶことができるから、あなたがたの味方だから一緒にしてくれ」と言ったらまた、鳥の方も、

「こちらが、勢力が強くなるから一緒にしてあげよう」と言った。

今度は、蝙蝠はいつも勢力の強い所の味方になっていたから、それで〔鳥と獣〕の両方から、

「これは、私の味方であった」と言えば、

「これは、私のものだった」

と言って、

「いつもこれは嘘ばかりついているから、これはもう独り者にしてしまえ」といつて仲間はずれにした。

「あんたは入り用ないから、一人自分の行きたい所に行け」

と言われたから、蝙蝠は行き所がなくなつて、とうとう夜だけしか出られなくなつたという。そつて昼はいつも寝て、夜だけ出るというのが蝙蝠になつたという、そういうふうな話。学校で教えていたよ。

昭和六〇年八月二日 辺土名初美・仲松庸尚聴取 宜保勝翻字 T 12 A 14

②

山里 稲嶺盛英（明治四三年二月一〇日生）山里

〔蝙蝠は〕哺乳類ですね。それに羽があつて飛ぶでしょ。それも、いえば、どつちに付くかという問題さあね。哺乳類に付くか、鳥、飛ぶ鳥の味方になるか。それが、両方の争いになつた場合に、蝙蝠は賢いから、勝ちそうなところに常に引つ付けていたとかいう話。

また、鳥が勝ちそうになつたら、鳥についてねえ、

「私は羽があるから鳥であるのに」

また、哺乳類が勝ちそうになつたら、

「私は、ちゃんと子どもも産むしね哺乳類であるから」

と云うて。あつち行つたりこつち行つたりしたい話。そういう話はある。

平成三年八月一七日 新垣良子・與那嶺昭郎聴取 石川小百合翻字 T 97 A 7

2 蠅と雀

①

古謝 金城眞良（明治四〇年七月一四日生）美里

蠅と倉の中を歩くクラー（雀）という鳥が談判してね、王様の前で最初に蠅が文句を言ったらしい。

「あのクラーというものは、王様の家を踏んで歩くから、王様に対して失礼になる」

と。するとクラーは、

「私は上から飛ぶので、何も関係しないが、蠅というのは、御飯にも付くし、踏むんではないですか」

と言うと「王様はとても怒って」、蠅を始末することにした。すると、

「許して下さい」

と蠅はこうして手をすり合せたんだって。今でも蠅が手をすり合わせるのは、

「許して下さい」

というお願いなんだって。

「私は、王様のご飯も踏むからね、今まで、踏んだことは悪いから許して下さい」

と、こうしてですね。

平成二年三月一二日 與座範秋聴取 宜保勝翻字 T 64 A 2

3 十二支由来

①

登川 仲宗根盛雄（明治四三年九月一五日生）登川

国の始まりよ、国の始まり、うん。国の始まりに、神様が、「動物は誰が一番最初に番付するか」と、「年号は誰からもっていくか」というような意味で、やったそうですよ。だから、そうやったら、第一、神様が、「こういうこと、布令ふれいがあるから、みんな集まれ」

と言って、やったら、この話を一番最初は誰にやったかといったら、虎に話したそうだ。虎に。

「あんたは勢力も強いから、第一に番付は誰からやるかと付けてゆくから、みんな集めてくれ」と頼んだそうですね。頼んだから、

「ああ、そうですか」

と、この頼み聞くものが、側で聞いたのが鼠、神様と一緒に虎と話しているもの。そうやったら、あの鼠は、

「これは番付は虎の方に相談したが、何んだ、牛は大きいから、これは何か利用して、牛は一番にしてあげよう」と言っただね、あんし（「そうして」、鼠は牛小屋に行つて、牛に、

「おい、牛よ、動物の番付があるから、あんた分からないから、明日はすぐ、早く神様の前に行くものが一番なるから、行こうではないか」

と言つたそうですよ。だから、牛も、

「ああ、そうか、そんなら行こう」

と言つて、鼠も一緒に行つたんでい。行つたら、鼠は小さいから、牛とついて行つたら、ちょっと小さくて一緒に行かれんからといって、牛の角にすがつてよ、牛は先頭に行つて神様の前に一番先なつて行つたから、牛は先なつたと思つたが、鼠は牛の角から一番先に降りて一番前になつてしまつた。

そうしたから神様は、

「誰が一番か」

と言ったら、

「私が一番先来て、牛は二番である」

と。「鼠が」そう言ったから、だー、牛はもう、先はやられたから、やもえないからよ、

「じゃあ、あんたは一番にしよう」

と。な、牛は二番だから、牛は二番にしよう」と。

今度は虎は相談したが、もう、ゆっくり来たから、あれは三番になった。そうやったから、あの番付が終わって、牛、虎とまた卵たまごといつて、こうしてもう、みんな並んで来たから、そういうふうにして、一番最後に来たのが猪いのだからよ、猪はなぜ、

「自分はいつでも、駆けても早いから、ゆっくり行っても一番先になろう」

と言つて、

「もう一寝ひとねしてから行つても大丈夫」

と言つて、あれは寝過ひかごしてしまつたから、「ウワーヌ ニンジュンネーシ〔豚ぶたが寝るみたいにして〕」というのが言葉に残つたと。人がもう、トウルバヤー〔ほんやり者〕なつたら、「ヤナヒヤー、ウワーヌ ニンジュンネーシ〔いやな奴、豚ぶたが寝るみたいにして〕」と言ふ。だから豚は一番後になつたと。

そういうふうにして、鼠は一番になつたが、それを聞いていたのが猫。猫が、

「〔鼠は〕自分の家でいつも一緒に育つていても、人と一緒に育つて、〔同じ〕家族であるのに、牛は連れて、私には言わないで、私は番に入れないから、貴様の奴は、いつまでも喰くい殺してやろう」

と言つたのが、猫の祟たたりといつて、鼠はもう一番猫が恐くなつたと。そういうふうで、猫はもう鼠を食い物にした裏切り者。だから鼠は悪賢あくけんいつて。また、「クービヌミーワ エンチュドー〔壁の中は鼠だよ〕」というのも、昔の人が、なんだ

か秘密会議したら、「クービヌミーワ エンチュドー（壁の中は鼠だよ）」という言葉は、聞き手はエンチュ（鼠）という（意味で、鼠）は悪賢いと。

そういうふうにして、番付が付いたというが、それを癩に障ったのが虎であるよ。

「神様は私と相談したが、誰が、こういうふうにやってくれたかというのを考えても分からないが、どうせ、鼠がやったんでしょ」

と言うて。神様は、

「あんたと相談したが、あんたは後になって、もう、やむをえない」

と。だから、一日、一日の子、牛、虎は、まあ仕方ないから、これは神様の言葉が、

「誰も鼠貞はできないからもう、牛は二番来ているから、牛は二番ではあるが、相談したのは虎だから、旧は、正月は、あんたから付けよう」

と言うて、正月はあのう、旧暦でやったら一月は虎の月。だが、新（新暦）になったら牛の月が正月になっている。だから、番付は神様のやったのは狂いはないわけ。みんな公平にやっである。ま、神様の言葉が嘘になったら、一番来たものも嘘になるから、子はもう、先来たからやむおえん。これが一番、子は。それで、日付の一番は、子から起こって、何でも子、牛、虎は先。だが、月になったら虎が一番になる。だが、牛は新暦になったから、牛は新暦の正月は牛の月。だから、何の月かと問うたら、日本は如月とか、睦月とか、弥生とか付けていくんでしょ。これが沖縄では月は、旧の一月は虎の月。新暦で言うたら牛だよ。こういうふうには番付はなっている。そういう意味で子、牛、虎の番付はこういうふうには付けられたという。なぜ子が一番に付けたかと言えば、やっぱしこれから、始まっているって。

この話は、昔から易をしている人から聞いた。あれはこんなもんに詳しいんですよ。こちらで易を知っている人は、ずっと昔、自分たちからはもう分からないがね、百五十ぐらいなる人だが、あの人が、そういう話をやっていたと、番付けの話を。そういうふうで、この易をやっているが、これは昔、沖縄の昔の番付けの話、こういうふうになっていたよという話をやっていたと。易者が言ったんですよ。

②

十二支えよ、イチムシぬうりする調びやてーるふーじ
てー。誰お一番、誰お二番、誰お三番でいち、くれー、
上々ぬ人ぬ、王様ぬどうやたがやーな、とにかく調
びやーがてー、一番、二番決みらりーんちよー、くぬー
動物どー、あんさーに、

「早くなー皆うまんかい並びよー、並びよー」

し、並びやくとうてー、なー牛えー、牛えーまぎーや
しえー、まぎー順に並らばちえーるばーどうやがやー。
なーちやーしがやらーとにかく、うりから始めーよー、
並びちえーしえーてー、牛、虎、かんにーかんにーし
並でいんじよーたんでい。寅、卯、辰、巳、申、酉、
戌、亥んーちやしえーやー。とーあんし、並でいんじ
よーでいるむん。

くぬ鼠 おーじこー、頭たくまーやるばー。鼠おー

たくまーやるばー。あんしやーにー、

「とー私ねーな、今どーな、いーばーどー」

知花 島袋タケ（大正七年九月一日生）知花

十二支はよ、動物の順番を決める調べだったようだね。
誰が一番、誰は二番、誰は三番と行って、これは、上々
の人が、王様がだったのかねえ、とにかく調べる人がね、
一番、二番を決めようと言ってね、この動物をよ、そう
して、

「早く、みんなここに並びなさい、並びなさい」

と行って、並びせたからね、もう牛は大きいでしょう、
大きい順に並びせたわけかねえ。もうどうしてか、とに
かく、これから始めてよ、並びせたのは、牛、虎とこん
なこなして並んでいったって。寅、卯、辰、巳、申、酉、
戌、亥といつてでしょう。ねえ、こんなふうに並んでい
っているというが。

この鼠はとっても、頭の良い、利口者だわけ。鼠は利
口者だわけ。そうして、

「はい、私はもう今着きましたよ」

と言ってね、たちまち、牛の前に飛び下りてね、牛の前

んでいやーによ、ちゅーちゃん牛ぬ前んかい飛ぬじふあやーによ、牛ぬ前んかい飛ぬじふあやーに、うぬ鼠おー前けーなやーに、あんさーにどう、鼠から始まるとんでいさ。鼠おー牛ぬ背中んかい居とーていよ、聞ちくどーてーるばーてーな。誰おー一番ないんでいち、しえーし、よー聞ちよーていさーに、いじやなてい番決みーんとうなたくとう、けー飛ぬじんじやーに、うぬ牛ぬ前んじけー居ちよー。あんさーにどう、鼠から始まるとんでい、いやりーたさ。あんし、子、牛、虎、兔、辰、巳んち、あんし、決みらつとーんり。くれーよ、動物調び、かん並ばち、あぬー、さくとうてー、あんしやんでい。あー、あぬー鼠おーじんぶなーなやーにや、牛ぬ背中からけつ飛ぬじんじやーに、前んじけー居やーに、

「とー、くりからる先えーやはやー」

んでいやーに、子から起りとんでいいやりーたさ。

に飛び出して、その鼠は前になって、そうして、鼠から始まっているというよ。鼠は牛の背中に居てね、聞き込んでいたわけだね。誰が一番なるというてやっているのを、よく聞いていて、いざというときになって、順番を決めるときになったから、飛び下りていって、その牛の前に座ったってね。それで、「十二支は」鼠から始まっているっていわれていたよ。そうして、子、丑、寅、卯、辰、巳といって、そうやって決められているって。これはね、動物調べということで並ばせたら、あのように並んだんだってさ。まあ、あの鼠は利口者だったからね、牛の背中から飛び降りて、牛の前に座って、

「さあ、これが一番先だねえ」

と言って、子から始まったといわれているよ。

③

古謝 金城眞良（明治四〇年七月一四日生）美里

ずっと昔ね、年寄りから話聞いたんだけど。

その〔十二支の〕名前付けるのは、どうしたらいいかといって王様から命令が出てね、そうしたら、一番先にこつちに
来るのが、一番最初のを付けると言っただけね。したら、鼠というものが牛の頭に隠れてね、その王様の前に来たときに、
〔牛の〕頭の方から飛んで前に飛んだからね、先なっているんでしよう、飛んだから。だから子が一番先なつて、牛は後
になつて。子、丑と。

牛は頭のこつちに瘤があるでしょう、鼠はそこに隠れておいて、王様の前行つたら、飛んで前に行つたから、それが初
めになつてから、子と言つて。そうやつて、子丑寅こうして出たつて。

この、子、丑つて来た順に順々に名前付けてね。それから、だんだんだんだん名前付けてね。したら、一つは抜がして
ね、その仕事のうれー〔分担を〕抜がしてあるから、そのウフードー神というのはね、誰がするかと。何相は誰が係、何相
は誰が係と、みんな分配して、これ係はやつたからね。したら今度おウフードー神一つだけは人が足らなくなつてね。フル
神と言つて、豚養つてる所はフルと言つてるんでしよう、昔はね。そこで、付けるものは誰もいなくなつて、
「そう、困つたなあ。人がいないから、なあ私がやろう」

と言つて、この王様が言つたもんだから、一番王様がウフードー神になつて。それで、一番大将やつたもんだから、ウ
フードー神と言つてね、子どもなんかマブヤー落すんとうか何とかというときは、そこで、念願して付けると。昔の話
はね。

注 ①フル神・・・フルとは、フルとも言い、豚の飼育小屋を兼ねた便所のこと。そこには最も権威のある神様がいて信じられて
おり、その神様のことを言う。

②マブヤー・・・魂のことで、マブイともいう。人体に宿るとされる靈魂。精神をつかさどる精気とされるため、強いショックや、
長期の病気などの際に身体から抜け出ると考えられている。魂が體から離れることを「マブイを落とす」といい、

その離れたマブイを元に戻すことを「マブイグミ」といって、フルヤーで祈りをすることもある。

平成二年三月二日 奥座範秋聴取 宜保勝翻字 T 64 A 1

④

泡瀬第一 普久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

会議があたんでいるいーえーさにやー。あんさーに、この、はーえーし行ちゆしが一番ないしがなー、ありやたんでい。決みーたんでい。あんぐとう、一番のー、鼠が、鼠が触りむんしーが歩ちやーに、

「イチムシ、むる集まりよー」

さーに、集またぐとう、猫んかい言やんたんでいー。自分ちやー追とーくとう。猫とー鼠とー敵やしえーやー。いつも、こうやって。あんさーに、触りむのーさくとうやー、あんし、

「うれー誰から、じーるーから先なすせーましがやー」

んちやぐとう、

「早くあまんかい着ちゆしから、ましなさやー」

んち。えどうん、牛からかんし行じやるはじどー。さくとうやー、子丑虎なとーたんでい。うぬ牛えー自分ぬ一番でい思たくとうやー、自分ぬ角ぬ上んかい、う

会議があつたつていうんでしよう。そうして、走つて行つて一番先に着いた者が一番といつて決めたつて。そうしたから、一番は、鼠がみんなに触れ回つて、

「動物、みんな集まりなさい」

と言つて、集まつたから、猫には言わなかつたつて。いつも自分を追いかけるから。猫と鼠は敵さあね、いつも、そうだつたから。そうやって、みんなに触れ回つてから、それから、

「これは誰から、どれから先にしたらいいかねえ」

と言つたから、

「早く向こうに着いた者から、先にしよう」

つて。たぶん、牛が先に行つたはずよ。だからね、子丑寅の順になつていたらしいさ。この牛は自分が一番と思つていたら、自分の角の上に、この鼠が座つていたそう。だ。そうして、向こうに行つたらね、その会議室に行つ

ぬ、鼠ねずみ小居こゐちよーたんでい。あんさー、あま行あまちやくとうやー、うぬ会議かいぎ室むろ行いじやくとうやー、しぐ飛とんじやーに、

「あー、私わたしねー一番」

でいたんでいー。あんさーに、うりが一番いちばんなたんでいー。あんさーに、子こから、鼠ねずみから。子丑しちゆう寅ちん卯ぼう。あんしから、触ふりーむのーうんぐとーししえーたんでいー、牛うしから。

あんさーま、

「早はやく行いちしゆしが一番や」

んでい。

これは例え話。だから鼠の人はみんな賢いやっしえー。

たらね、すぐに鼠が飛び降りて、

「ああ、私わたしが一番」

つて言いったつて。そうして、これが一番いちばんになつたつて。それで子こから始はまった、鼠ねずみから。十二支じふにしは。これは「鼠ねずみが」触ふれて回まるのを、このようにしてあつたつて、牛うしから。そうして、

「早はやく行いった者が一番ね」

と言いつて。

これは例え話。だから鼠年の人はみんな賢いさあ。

平成二年七月六日

山城綾子・崎山用彰・栗国実・通事美香聴取

宮城昭美翻字

T 83 A 5

⑤

あのう、いわゆる鼠が牛の背に乗ったということ
でね、順番が終わりになってね、それで、その恨みのため
にしょっちゅう鼠食っているという。これはみなさん聞
いているからね、みんなだいたい。これはね、どちらか
というと、戦後、小那覇ブーテン（舞天）先生が作った
んじゃないかな。小那覇ブーテン先生が、あちらこちら
でやっていたんだよね。ウコールの話と同むんやさ。ウ
コールの話聞いたことある？

あぬー、^③十二支、子、丑、寅や十二ぬイチムシさー
に作らつとーしが、うりんけー何んち猫や入ちえー
ねーんがやーやー。人間ぬ一番近くんかい居る猫や
入らん、人ぬ見ちん見だん竜とうか、うぬふーじーや入
つちよーしが、一番近さんかい居る猫が入つちえー
ねーんしえー、ひるまさつさーやー、何がやー。うぬ
くとうぬ話、私が聞ちやしえー、有名な嘉手納の小那
覇ブーテン先生。くぬ人が話じや、うぬ人が真似ま
でーしーゆーさんしが、できるだけ小那覇ブーテン先生
が、しみそーちやる話うぬ通い、し、んじやびらやー。
昔、くぬ十二支ぬイチムシ決みーんでいやーに、神

中の町 比嘉貞信（昭和二年四月二九日生）上地

いわゆる鼠が牛の背に乗って行ってたということ
でね、「十二支の」順番が終わりになってね、それで、
〔猫は〕その恨みのためにしょっちゅう鼠食っている
という話、これはみなさん聞いているからね、みんなだ
いたい（分かると思う）。これは、どちらかというと、戦
後、小那覇ブーテン（舞天）先生が作ったんじゃないか
な。小那覇ブーテン先生が、あちらこちらでやっていた
んだよね。香炉の話と同じものだよ。香炉の話は聞いた
ことあるか？

あのう、十二支、子丑寅は十二の動物で作られている
が、これに何で猫が入っていないのかねえねえ。人間の
一番近くに居る猫が入ってなくて、人が見たこともない
竜とか、そんなのは入っているが、一番近くにいる猫が
入っていないのは珍しいねえ、どうしてかねえ。その話
を私が聞いたのは、有名な嘉手納の小那覇ブーテン先生
から。この人の話のように、真似はできないが、できる
だけ小那覇ブーテン先生がなされた話を、その通りにし
てみましようね。

昔、この十二支の動物を決めるといって、神様が動物

様がイチムシぬ達集みやーに、

「とー、今からや、十二支決みーしが、いったー、はーえー勝負さーに、順番決みーくとう、皆集まり」

神様がイチムシぬあるつき集みやーに、あんさーに、皆まじゅーん並びてい、あんさーにすぐ、ちゅばちなかい、はーえーしみてーるふーじ。あんしやれー、直ぐなー、牛から馬から直ぐ、わんから、わんから、なー、いつペーぬはーえーやたるふーじ。

あんし、私達から考えーねー、いつペーにーさるふーじーぬ牛が、ちやーるばーがやらいっぺー早さぬ。また、私達が見ちえー、いつペー先ないぎさーぬ馬や、あんすか早こーねーんてーるふーじ。あんさーに、本当順番のー牛が一番、虎が二番、卯、兎、牛、虎、兎、うりから辰、ハブ、巳、あんさーに、うぬ後馬やてーるふーじ。あんさー、羊〔未〕、猿〔申〕、鳥〔酉〕、犬〔戌〕、猪〔亥〕、うっしやかんしーやてーるふーじ。あんし、次え猫やてーるふーじ。くぬヤマシシ〔猪〕ぬ後じーや、猫やてーるふーじ。あんし、とー、な、丑から、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、猫ちやたるふーじ。あんし、「うっさやさやー」んでい思たくとう、くぬ鼠ぬ知恵強さぬ、あんさーに、牛ぬ

を集めて、

「さあ、今から十二支決めるが、あなたたちに競走させて順番を決めるから、みんな集まれ」

神様が動物のいるだけみんな集めて、そうして、みんな一緒に並べて、いつせいに走らせたようだ。そうしたら、牛から馬からもう、我先にと懸命に走ったようだ。そうして、私たちが考えると、とっても遅いと思われ牛が、どういうわけかとても速くて、また、私たちが見ては、とっても先になりそうな馬は、そんなに速くなかったようだ。それで、本当の順番は牛が一番、虎

が二番、兎、牛虎兎、それから辰、ハブの巳、そうして、その後に馬だったようだ。そうして、羊〔未〕、猿〔申〕、鳥〔酉〕、犬〔戌〕、猪〔亥〕、それだけこのようになつたようだ。そして、次は猫だったようだ。この猪の後は猫だったようだ。そのようにもう、丑寅卯辰巳午未申酉戌亥猫といつてだったようだ。そうして、「これだけだね」と思っていたら、この鼠はたいへん知恵があつて、牛の角に乗っていたようだ。自分は歩かないで、牛の角に乗って、神様の前に行つたから、直ぐ角からポーンと前の方に飛んだ。もう、神様はそれは見てないんだから、

角んかい乗とてーるふーじ。自分や歩かんぐーとうー、牛ぬ角んかい乗やーなかい、神様ぬ前ちやくとう、直ぐ角ぬ前から、直ぐコンみかち前かい飛んじさぐとう。

だー、神様やうれー見ちえーねーんどーあくと、

「一番のー、くぬ鼠」

でいやーなかい。あんしえー鼠、子丑寅。あんせー猫や番んけー入らん。

「いやーやオミット！」

んでい言やつたくと、なー、うれー十二んち決まると、猫やいっぺーくさみち、あんさーに、

「かんそーる鼠なかい負きていねーらん。ワジワジーしならんくと、子孫ん、寄し言し、遺言し、な、鼠なかい騙さつとーくと、合点ならんぐと、いたー子孫ぬ達、生ちみととーま、後、いちぬ世までいん、くぬ鼠見じーねー喰殺しよー」

んでい。あんさーに、猫が鼠喰いるくとなたんでいー。此りが、子丑寅ぬ始まいんでい。あんさーに猫や入つちえーねーん。本猫猫やてーるふーじやし、入らんでい。鼠なかい騙さつたんでい。うぬ話から、猫や鼠喰いんでいる事までい発展そーる話。

「一番は、この鼠だ」

と言った。それで鼠が十二支に入った。そうしたら、猫は番に入らない。

「あんたは除外！」

と言われたから、もう、これは十二と決まっているから、猫はとつても怒って、そうして、

「このような鼠に負けてしまった。腹立たしくてたまらないから、子孫に教訓して、遺言して、もう鼠に騙されているから、合点いかなないから、おまえたちの子孫たちが、生きている限り、後の、いつの世までも、この鼠を見たら喰い殺しなさいよ」

と言った。それで、猫は鼠を喰うことになった。これが十二支の始まり。それで猫は入っていない。本猫は猫が「十二支に入るはず」だったようだが、入っていない。鼠に騙されて。この話から、猫は鼠を喰うということまで発展しているという話だ。

注 ①小那覇ブーテン（舞天）・・・小那覇全孝。戦後、嘉手納より石川へ移住。本職は歯医者だが、小那覇ブーテン（舞天）の芸名

で寸劇、漫談などを行う、琉球芸能の達人であった。その活動は戦後の打ち沈んだ人々に笑いとユーモアで生きる希望を与え、心を慰めたとのこと。また、演出・演技指導などもこなした人。以上の芸人だったといわれる。

②ウコールぬ話・・・「犬の足」の話のこと。

③十二支・・・子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二の名。昔、時刻や方角、また、十干と組み合わせる年や日をあらわした。

④嘉手納・・・沖縄本島中部の西海岸に面し、那覇から北へ二三キロの地点に位置する。戦後は総面積の八五パーセントが米軍に接収され、巨大な軍事基地が建設された。

平成二年八月二三日 宜保勝・宮平聴取 大川清子翻字 T 165 A 3

⑥

中の町 町田宗勇（大正六年七月二五日生）森根

犬と猫が敵であるのはどうしてかというとき、猫はね、眠んじやーなかい、遅りやーなかい。ある神様がね、

「今日はあの、あれを付けるから早くいらっしやい」と言っつね、

「私は足が早いからすぐ行ける」

と言っつて、あんし、眠とーてい、眠とーる間ねー、あまー、むる先なてい。さーい、あんさーくれー遅りていん、十二までいるあんていしえーや。十二支だから。十

犬と猫が敵であるのはどうしてかというとき、猫は眠ていて、遅れたからつて。ある神様がね、

「今日は動物の順番を付けるから早くいらっしやい」と言っつたらね、猫は、

「私は足が早いからすぐ行ける」

と言っつて、そうして、眠っていたから、眠っている間にみんなは先に行ってしまった。それで、猫は遅れて行っつてね。十二支は十二番目までしかないでしょう、十二支

二までいるあぐとう。うれー十三に行じえーるばーて。あまうてー門かどお閉しまやーなかい入いららん。寝坊ねぼうしてから間に合わなかつたさ、門は閉められて。

あの、鼠とね、牛と。鼠は先なっているさーね。どうしてか、あれ分かる？。鼠は知恵があるから牛の背中に乗って行って、そこでね、門に来たらね、飛び下りて先なつて、あんしから子こ丑うしと。本当は牛が一番だつたんですが、うれー、歩あちゆるえーか、うりんかい乗のやーなかい、うまんじ飛とんじゆしえーや。飛とんじゆんーさー先さないしえー。あれー、知恵し進すすでーるばーて。楽たのさーんかいあまんじ先さなてーるばーて。ううつ飛とんじやーんかい。

だから。これは十三番目に行ったわけね。そうしたら、向むかこうでは門が閉しまって入れない。猫は寝坊ねぼうしてから間に合わなかつたさ、門は閉められて。

鼠と牛とでは、鼠が先なっているさあね。それはどうして分かるか。あれは、鼠は知恵があるから牛の背中に乗って行ってね、そうして門に来たら飛び下りて先なつたからね。それで子こ・丑うしとなつた。本当は牛が一番だつたんですが、鼠は歩くよりは牛に乗って行って、そこで飛び降りているさあね。飛び降りたら先になるでしょう。猫は知恵で進すすんでいるわけね。楽たのして行って向むかこうで飛び降りて、一番先になつているわけね。

平成二年八月三日 加島三史・平田明子聴取 大川清子翻字 T 162 A 7

⑦

諸見里

宮島真良（大正四年一月一九日生）諸見里

〔十二支の順番を決めるので、動物を〕集めてくださいという意味だよ。牛が利口者リクナヒコだはずよ。また、牛が一番やったですよ、初まいはね、集まるのがて。だが、その上に、耳にといつたかね、どこか覚えてないがよ、鼠がおつたらしいよ。この王様の前行つたら、ピョンと飛び下りて、これが一番なつたらしいです。それで、子コ、鼠から牛に初まつたらしいですよ。初めーや、牛が一番行つたらしいよ。牛の背中に鼠が乗っておつたんじゃありませんか。これ、このある王様の前に行つたら、これは飛び下りるから、鼠が一番なつた。それから、子コから始まって、丑ウという話は、ちゃんとありますね。

平成二年八月一九日 平識美恵子・津嘉山朝昭・平良美夏・新城真恵聴取・香村夏子翻字 T105A7

⑧

山里

稲嶺盛英（明治四三年二月一〇日生）山里

本当は、牛がね、一番なることであつたらしいんだがね。これ私、大阪で聞いたんだがね。何で鼠が、干支カネの一番になつたかいうたらね。鼠はちようと、干支の順番を決める、言えば役所だね。役所の入り口に、鼠は牛の背中に乗って、で、その入り口に来たら、牛からは飛んで先に入つたからね、鼠は。それで、鼠は干支の一番になつたという話聞いたんだ。言えば、干支の順序を決める役所の入り口までは鼠が牛の背中に乗って行って、それで入り口なつたら飛んで、先入つたもんだからね、だから子コ、鼠が一番、牛が二番になつたというようだ。なんで虎が三番目なつたとかは、それはもう知らない。虎は分からんがね。また、なんで猫が入ってないかというのも、ちよつとこれは分からんさあねえ。

平成三年八月一七日 新垣良子・興那嶺昭郎聴取 石川小百合翻字 T197A6

⑨

山里 伊佐安弘（明治四一年六月八日生）白川

この、神様かみさまからでしようね、「集まれ」という指示があつて。で、やっぱり、十二支を作らんがためだったでしようね。ちようどそのときに、いつも猫が追いつく鼠ね、これはもう、猫を恐れて、牛の背中に乗ってね、集合したらいいですよ。あの集まる場所で集合して、牛の背中からすぐ、先に飛び下りたから、「一番は」子こになっておつた。鼠は子こでしよう。それで、鼠が一番最初、牛が二番なんだ。その話を、粗あら粗あら聞いたんです。うちはもう、お祖父さん、お祖母さんがそういう話をしよつたから、そう聞いた。

だから、十二支の中に猫入ってないのはね、鼠が猫を怖がるからだね。「鼠は」牛に乗って、先に「行つたから、十二支の初めは」子こなつたでしょ。で、それでちようど、十二支のいっばいなつておるから、猫は入らないと。その意味で、それを憎んでね、今でも猫は鼠を追い回すらしいという話を聞かされたんですよ。怨ばなしみ話聞いた。怨ばなしみを持つておる話。

平成二年八月二日 平識美恵子・津嘉山朝昭聴取 石川小百合翻字 T137A5

4 兔と亀

①

兔と亀とう谷底んかい、誰がが先ないらー競走さん
 でいしが。あれー亀や先なとーたんでいしが。兔え必
 じ道から、道小から降りてい行じしが、亀や、足も
 尻尾も、頭ん全部かん、くぬ中んかいちいっくみやー
 に、けー流りてい、けー渡りてい行じやくとう、亀や先
 なとーたんでい。あんさくとう、

「いやーや、あんし、難しいむんやつさー」

んでいしえー、難しい、六つ、ムツカクシームン〔六つ
 隠し者〕、尻尾と、頭、足が四つで、六つなるわけ。あ
 んさー、その難しーむんでいしえーうりから出じとーん
 でい。

登川 平田盛永（明治四一年六月六日生）登川

兔と亀が、誰が先に谷底に着くことができるか競走し
 たそうだ。そしたら、亀が勝ったということだがね。兔
 は必ずちゃんとした道から降りて行つたらしいが、亀は
 足も尻尾も頭もみんな、このように全部甲羅の中に押し
 込んで、滑り降りて行つたので、亀が先になつていたん
 だつて。そうしたもんだから、〔兔が〕

「あなたは難しい者だね」

と言つた。と、いうのは、ムツカクシームン〔六つ隠し
 者〕、尻尾と頭と足が四つで、六つになるわけ。亀がそ
 の六つを隠したこと難しいという言葉ができたとい
 う。

昭和六〇年八月二六日 辺土名初美聴取 宜保勝翻字 T 15 A 16

5 猿蟹合戦

①

柿の種え猿が持ちよるばーてーあれー。また、握り飯え蟹ぬ持ちよるばーてー。猿や理屈えー上なやーに、

「でいー、うぬ握り飯とう、くぬ柿ぬ種とう換ら」
 んでいちよ。換たくとう、柿え植たくとう、ないないしえーや。握り飯え、うち食でーくとう無らんなどーしえー。あんさくとう、うぬ、ないなどーしが、蟹のー登ゆーさん。うーじまでい、またさーらない。うんどーしえー、猿ぬうちゆ喰てい、青物お投ぎてい、蟹ぬ甲や、砕ちえーういし。今度お、うりが罰とうし、栗んでいしが出して来に、猿が火なつくみーねー、釜ぬ中んじちよーてい破裂し、火傷し、猿ぬ。あんしん、なーやまたうぬ、白んでいしが、また、天井から落ちていちやーに、首うすてい、猿いじみていーうんぐとうーさんでいさ。

うれー、私が一年生の時の本にあたんばー。だから、猿は理屈な者。

古謝 金城真良（明治四〇年七月一四日生）美里

柿の種は猿が持っているわけさ、柿の種は。また、握り飯は蟹が持っているわけさ。猿はずる賢いので、
 「ねえ、この握り飯と柿の種とを交換しないか」

と言つて換えた。柿は植えると実がなるでしょう。握り飯は食べてしまったのでなくなつてしまつているし。そうしたら、その柿は実をつけたのだが、蟹は木に登つて取ることができない。猿に頼むと猿は木のでっぺんまでさつさと登つて、熟したものは猿がさつさと食べてしまひ、まだ熟していない青いものは投げて、蟹の甲羅を砕いたりした。すると、猿がそのようなことをした罰として栗が出て来て、猿が火の中に栗を投げつけると、栗は窯の中ではじけて猿は火傷をした。それでも、さらに白がまた、天井から落ちて来て、首をおさえつけ猿をいじめた。そんなふうには猿を懲らしめたんだつてさ。

この話は私が一年生の時の本にのつていたので、それでこの話を知っているんだよ。だから猿はずる賢い。

6 逃げ遅れた蟹

①

泡瀬第一 普久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

鼠と蟹とね、とにかく何かあったらね、誰が早く逃げるかというあれ〔話〕でね、蟹は自分が早くできると言うし、また鼠は

「私が速くない〔私の方が速くできる〕」
というあれで、喧嘩したはずねえ。

それでね、鼠は馬が逃げてきたから、鼠はすぐ、石の石垣の穴に入ってしまったって、この蟹ぐわーね、穴掘るから、穴掘るまでに馬がきたから、馬に踏まれたって。だから、あれ〔蟹を〕鼠が見てね、

「シッターリガニグワー シッターリガニグワー〔いい気味だ、いい気味だ〕」
って言っていた。

ああ、こんな話あったねえ、昔は。

平成五年三月五日 宮城昭美聴取 宮城昭美翻字 T 95 B 1

7 猿の生肝

①

かんし、型かた小ぬこぬ入いち窪くぼどーしえー食かまりーしが、型かた小ぬこぬ入いらんしえー食かまらんでいぬ話はなえ聞きちえーんーだに。かんし窪くぼどーんよ。まじ、窪くぼむんぬんにー食かまりーしが居ういがすらー、大概たいがい私わたし親おやぬちやー時代じだいまでーどーうんな海うみけー行いじやい何なにさいするばーんでーやていん、また川かわぬ蟹かにやていん、蟹かにやていん、んな其その所ところあ窪くぼどーんよ。あんさーにうぬ話はなえ、蟹かにえ陸あづうていん、ゆー遊あそぶくとう、馬うまぬけー歩あちやーにでいる話はなんあいやすしが、また別の話はなん、あしえーんでいねー。

海うみぬ、龍宮りゆうきゆうぬ王様おうさまぬ病びやう気きさらーに、
「私わたしねーな、陸あづぬイいチムシぬ、生肝いぢじろ呉まりわる治いいしが、誰たがな、ちばていとらさんな」

んでいち。だーうれー海うみぬイいチムシぬ、陸あづんかい出いじーねー死しにーるすさにん。あんくとうならんしえー。ならんぐとう要求ようきうほーるばーどやいぎさんどー。

あんすくとう、蟹かにのーないんでいくとうなやーに、蟹かにえ陸あづからんないるすくとう。行いちやーにさくとう、

知花 島袋盛保（明治三七年一月二六日生）知花

このように、「蟹の背中に」型が入って窪んでいるのは食べられるが、型のないのは食べられないという話を聞いたことはないか。こんなふうに窪んでいるよ。まず、窪んでいないのにも食べられるのがあるのかどうか。だいたい私たちの親の時代までは、海などに行ったりする場合でも、また川の蟹でもほとんどみんな窪んでいるよ。それでこの話は、蟹は陸でよく遊ぶので、馬が蟹の背中の上を歩いたためにへこんでいるという話もあるが、また別の話もある。

海うみの、龍宮りゆうきゆうの王様おうさまが病びやう気きになられて
「私わたしはもう、陸あづの動物どうぶつの生肝いぢじろを食たべたら治いるのだが、だれか頑張がんぢやうつて取とつてきてくれないかなあ」

と言いわれた。それというのも、海の動物どうぶつが陸あづに出いれば死しぬでしょう。だからできないさあ。そのむつかしいことをお願いしているわけらしいよ。そうしたら、蟹かにができるということになった。蟹かには陸あづに上あがることもできるわけだからね。

猿や山うとーてい、桃むとーてい喰いてーぎさぐとう、
「美味さんなー」

んちやくとう、

「美味さん」

「あんさらー、私んけー食まさんなー」

でいちやくとう、

「おー」

んち、猿ぬ蟹んけー、桃お投ぎてい呉たくとう、

「陸ぬ桃お、あんし苦さる。ぬーが海ぬ桃お、美味さぬ

や、くつたとの話やあらんどー。なー、いやーが行じ

しむるむんやろー、大変な海ぬ果物んでいしえー、ぬー

やていん、あんし美味さんどー」

でいちやくとう、

「私連てい行き」

んち。行じ、蟹ぬ背負さーに行じよーるばーやさ。あん

さくとう、だーうれー、溺くわしーねー死にーねーな

生肝おあらんどー、背負さーに行じよーぎさん。

なーやがてい着ちゆんでいるばーに、

「いやーやなー、いえー、陸に桃ありば、さぎにあんと

う思むてい、騙さつてい、猿命でい切りる」

んでいち、側ぬイチムシぬあびたくとう、

それで、蟹が陸に行くくと、猿は山で桃をもちで食べて
いたから、

「おいしいねえ」

と聞くと、

「おいしい」

「そしたら、私にも食べさせてくれんか」

とお願いと、

「いいよ」

と、猿が蟹に桃を投げてあげたから、

「陸の桃はなんて苦いんだ。（それに比べて海の桃はお

いしくて）これとは話にもならないよ。もし、あなたが

行ってよいのならね、海の果物というものはどれをとっ

てもたいへんおいしいよ」と言ったので、「猿は」、

「私を連れて行って」

と言った。蟹がおんぶして行ったわけさ。これは、もう、

「猿を」溺れさせて死んでしまったら、生肝ではなくな

るから、おんぶして行ったわけさ。

もうすぐ「龍宮に」着くというときに、

「あんたはもう、おい、陸に桃があるなら海にもあると

思つて、騙された猿の命は切れてしまふ」

と、側にいた動物が言ったので、

「ぬーんち、あん言いが」
んでいちゃくとう、

「いやーな生肝取うらりーくとうや、いやー、今日までいどう生ちちよーるな。いやー死のーるないんどー」
でいちゃくとう、猿や巧まーまんでい、猿知恵んち、

「生肝ぬ入り用やれーや、いやー、きつさあん言れー、私えー持っち来たるむんぬ。私ねー、桃木なけー下ぎていや、いやー、生肝ぬ入り用やらー、あん取ていくーな」

んちやくとう、

「あんしえー、あんし」

んでいちゃくとう、またあまんじえー、陸ぬイチムシんでーぎさどー、

「内にある肝お外にあんとう思てい、戻てい来る蟹んちやーがないら」

んち、歌やさくとう、

「いやーぐとーる者お、嘘むにーしとう、私ねー連ちえーはやー」

んち、逃んぎたんでん、猿、ぐるはるあくとう、ひらからはーにるあんしけー窪どーんでい話。年寄ぬ話。

「どうして、そう言うのか」
と聞いたら、

「あんたはもう、生肝を取られるから、あんたは今日までしか生きていないよ。あなたは死なないといけないだよ」

と言ったので、猿は知恵があつて、猿知恵と言われるくらいなので、

「生肝が必要ならば、あんた、先にそう言えば私は持つて来たのに。私の生肝は桃の木に下げてきたので生肝が必要なら取つて来ようか」
と言つたら、

「それならそうしてくれ」

と言つた。
また、向こうに行つたら、陸の動物がというがね、

「内にある肝を外にあると思つて、戻つてくる蟹はどうなるのだろうか」
と歌つたつて。

「お前のような者は、嘘をついて私を連れて来たな」
と「猿が」言つて、「蟹は」逃げようとしても、猿は速

いので「蟹は」押しつぶされたから、このように「背中が」窪んでいるとい話。年寄りの話。

注 ①イチムシ・・・生き物。動物の意味。

昭和六〇年一〇月一三日 下田博美・辺土名初美聴取 山城綾子翻字 T 22 A 10

②

吉原 松岡俊吉（大正三年一月二〇日生）宮古

王様の娘が病氣して、これを治してくれる人があつたら娘を嫁にあげましよう、布令を発したわけだなあ。村の人々みんな集まっていたときに。

「私の娘に薬を持って来てくれる人に娘をあげましよう」

というような条件でね。そうしたら、もう、あっちこっちみんな東奔西走して、資料を集めて、話を聞いて、何がいいかと。

そうしたら、ある頭のいい人かなあ、これが曰く、

「この病はどういう病かというね、やっぱり、体内の怪我だろうなあ。この病には、猿の肝を取ってきて、これを蒸してあげれば治るんだという話を聞いたから、そうしなさい」

と。そうしたら、もう、猿もおらんでしょう向こうには。あの離れ島には猿はいるんだと。

「じゃあ、誰がどうしてあそこまで行くか、その猿を取りに」

と言うわけで、そこにこの猿の肝を取るといのが、これはまあ、人間が蛸に変わったか知れんけど、その蛸が、

「私が行ってきます」

と。

「猿は私が取ってきますよ」

と。そして、その蛸が、もう、結局は人間であつたはずだよ、物の言える。そして、それが、離れ島に猿の肝を取りに行

った。

そうして、上がって行ったらねえ、ちょうど、大きな木に猿が寝ているという。

「お猿さん、ちょっとあんた、向こうの王様の所に遊びに行かんか。王様が非常にたくさん御馳走作って、みなさんにあげるというので、私と一緒に行きませんか。私の背中に乗れば、私は泳ぐことができるから、そうしなさい」というので、猿は喜んで、

「じゃあ、行きましょう」

ということ、その猿が蝟におんぶというかねまた、背中に乗って「行った」。いよいよ、今度は島の方へたどり着くころだ。やがて着こうという時に、

「実はね猿さん、私は、王様の娘が病気で、これを治すにはどういう薬があるかというわけで、話を聞いたら、あなたの肝が一番上等だという話になって、実はあんたの肝を取るために連れて来たんだ」

と。またその猿も負けていないよ、

「ああそうでしたら、そんなら向こうで、そう言えばいいのに。どうして、今ここまで来てからそんなこと言うかと。」

「実は向こうに忘れて来たの、肝は。ああ、そりゃあ、向こうで話しておけばよかったのに、また肝心なものを忘れてきて大変だ」

と。結局また、

「じゃあ、取りに行こう」

と言って。猿をまた乗せて連れて行つたと。そつたら、蝟は、

「はい、はい」

と言って、登って行つたら、この猿は、

「このやろう、お前は私の肝を取ろうとするのか。よし、お前の肝を取ってみせる」

と、さんざん叩きつぶしてもう、クシヤクシヤになるまで、その蛸を叩きつぶした。そのために蛸はあんななっている。さんざん手も沢山出て、ああいうふうになったんだよ。あんまり叩かれたために骨もなくなつて、そういうふうニフニヤフニヤになつて、手もみんなこんなになつたと。まあ、これも面白い話さ。

平成二年三月二三日 平良真也聴取 宮城昭美翻字 T 71 B 5

③

猿ぬ話すたしが、猿ぬ。丁度、王様ぬ、

「猿ぬ生肝や、生肝取ちつち食でいんでー治ゆん」

でい言ちやくとう、うぬ猿ぬ生肝取いがんち行じやくとう、うぬ亀行らちやくとう、あまうとーい猿小や乗しやーに、

「でいかー、いい所小んかい連てい行か」

でい言に、連ていちやくとうや、うぬ猿小んかい、ちやがなー話さくとうや、

「いやーや、や、本当や、やー、いやー生肝取やーにや、うりすんちるやんどー」

んでいこの亀が言ちやくとう、

「あんしえーや、私ねーやー、うぬ生肝おや、私ねーあまに、木小んかいや、生肝お忘れていちよっーさー」

猿の話をしていたんだが。昔、王様がね、

「猿の生肝を取つてきて食べたら治る」

と言われたので、その猿の生肝を取りにと亀を行かせたら、向こうでは、猿を「亀の甲羅に」乗せて、

「さあ、いい所に連れて行こうね」

と言つて連れて来たんだがね、この猿に来ながら、話をしたらしいさ、

「本当はね、お前の生肝取つて〔王様に上げよう〕しているんだよ」

つて亀が言つたから、猿は、

「そんなこととは知らないから、私はその生肝をあそこ木に忘れてきているさあ」

そう、この猿は知恵があつたわけ。そうして、

この猿は知恵があつたわけ。あんさーに、
「生肝あまんかい忘れていちえつきさー。また取いが行きわ
るやさ」

と言つてね、取いが行じやくとう、あれー降りやーに、

「アカンベー」

しえーるばーてー、なー。なー、うぬ、殺さりーがち行
ちゆんなー。あんさーにさくとう、うぬ亀や戻ていち
やくとう、ぬーんていが、殺さりやーに、うぬヒバキ入
ちやんでいんどーやーんてい話あたんたん。

この勤めを果たしてこれなかつたわけでしょう。帰て
いちやくとう、そう言つていたとも言うしね。またね、
蛸んかい言ちやくとうや、あんさー、蛸おまた、白ん
かい、いちにーりやーに、骨え無んなどーん、ぬーぬん
でいうぬ話すしえーやー。これ何から聞いたかねー、
うぬふーじーぬ話え、くぬ話小つていうのは、こんな
のーだつたよ昔は。

「生肝忘れてきているさあ。また取りに行かないといけ
ない」

と言つてね。取りに行つたら、猿は〔亀の背中から〕降
りてから、

「アカンベー」

を亀にしたらしいさあ。だつて殺されに行かないさあね
え。それで、この亀は戻つて来たために、やつつけられ
て〔甲羅に〕にヒビが入つてしまつたんだという話があ
つたという。

亀は勤めを果たせなかつたわけでしょう。それで戻つ
たためにあのようになつたとも言うしね。またね、蛸が
言つたからね、そしたら蛸は白に入れ〔搦かれた〕たた
めに骨がなくなつたというふうな話もするしね。こんな
話何から聞いたかねえこんなたぐいの話は、こんなもの
であつたよ昔は。

4

室川 新城安平（大正二年二月二日生）今帰仁村

猿の生肝いくちまやな、これ知恵比ちえひべやな。知恵比べ。

龍宮城の王様が、魚の数は何千ゆうてあるが、それをみんな集めたわけ。そして知恵比べやな。海で生活しているので陸上りくじょうに上がるのは亀さんしかおらんさ。亀は陸で生まれて海に帰るから。で、亀さんが選ばれたわけさ。ま、知恵比べしんだな。

「お前は陸に行つて猿の生肝なまじまか、生きた肝臓取つてこい」

と言つたんでしようね、知恵比べ。で、この亀さん浜辺に上がつていつたら、浜の側でね猿が木に上つて、青い柿を取つて食べてたわけさ。

「こんな青い柿食べんと、龍宮城行けばね、もっと熟した柿もたくさんあるから行こう」と。

「そうは言つても私は泳げないのに」

と言つたらね、

「私の背中に乗りなさい。私が連れて行くから」
言つて。

「あ、そうかじゃあ、それなら乗せてくれ」

と、乗つて行つたわけさ。途中で亀さんが、

「お前、私に騙されたなあ」

「何でやー」

つて。

「お前、龍宮城に木ないのに、柿の木あつたためしないやんか。王様がや、龍宮城のお姫さんが、お前殺して肝臓取つて

食べなかつたら病氣治らんで言うから、お前今日までの命だなあ」と言うたらなあ。猿は逆に考えたんだなあ。

「ああ、それなら、私の肝臓は柿の木に忘れてあるから、じゃあ、もう一度、逆戻りして肝臓取ってこよう」と言うて、帰っていった。この猿は木に上ってから、

「馬鹿やろう。お前さつき私騙したから、今度私にお前騙されたのだ」

青い柿で背中叩かれたという話。ま、そんなこともあったかも知らん。作り話だろうな。

平成二年二月一四日 武鳴昭子・通事美香聴取 大川清子翻字 T 173 A 9

8 蛙と牛

①

昔ぬ童話。

子や産ちやくとうどー、ありが、卵から子ぬ、生まりたくとうどー、道から歩ちゆる牛にくんひらかさていよー。さくとう、残とーる子ぬ達がどー、

「だてーんそーるむんぬ、くんひらかち死なちよーん」
でい。あんさくとう、親やさくとう、

「くつび、あんな」
んでい。ふつくいてー、ふくらちえーしーしよー、さくとう、

「なーひん大さん」
でい。強く膨らちやくとうどー、破裂さーに、親まり死じよーていうらんやーぬ話どう、童話どう聞ちやる。

登川 仲宗根蒲助（明治三四年一〇月三日生）登川

昔の子ども話。

「蛙が」子どもを産んだから、卵から子どもが生まれたからね、道から歩いている牛に踏み潰されてしまつてよ。すると、残つた子どもたちが、

「とてつもない大きなものに潰され殺されてしまつた」
と。それで、親はどうしたかというと、

「これくらいあつたか」
と言つて、腹を膨らませ、どんどん膨らましていったからよ、そうしたら、

「もつと大きい」
と。それで、もつと大きく膨らましたからね、しまいは破裂してしまい、親まで死んでしまつたというふうな子ども話を聞いているんだよ。

昭和六〇年八月二六日

比嘉和男・崎原由美子・辺土名初美聴取 宜保勝翻字 T1A2

9 雲雀と生き水

①

① チンチマー小が神様にや、
「いやーやくぬ水飲でい若返えりよー」
んでいさくとう、

「うー」

んでいあーなかい、神様が水え置ちやくとう、水え置ちやくとう、粟、唐黍飯食ていきちから、水え飲むんでいち、其処あ置ちやーに行じやくとう、ちゅーちえーハブぬ来なかい、うぬ水え浴みていねえらな。あんさーにまた神様あ、

「いやーや浴みていー」

んでい

④ 「私粟、唐黍飯食むんでいいちやー、其処置ちえーた
くとう、ハブぬ浴みにとっていいねーやびらんむん」

「とー、馬鹿、ハブお浴みてーれー、しでい変いしがー、
いやーや人ぬうーし聞かんくとう、いやー足くんしみに
やーに、足小、小くなさやー」

んでいやーい、チンチマー、チンチンチンチンチンチン

宮里 上根ウサ（明治三一年一月五日生）与那城町

神様が雲雀にね

「お前は、この水を飲んで若返りなさいよ」
と若返りの水をくれたので

「はい」

と答え、神様が水を置いたから、「雲雀は」、粟、唐黍を食べてから、水を飲もうと思つて、そこに、水を置いたまま行くと、たちまち、ハブが来て、この水で浴びてしまった。そうしたら、また、神様が

「お前はこの水で浴びたか」

と尋ねたから、

「私は、粟、唐黍を食べようと思つて、そこに置いていたら、ハブが浴びてなくなつてしまいました」

「馬鹿だなあ、ハブが浴びてしまったなら、ハブは脱皮するが、お前は人の言うことを聞かないから、足を強く縛つて、足を小さくしてやろうな」

と言われて、雲雀はチンチンチンチンチンチンと鳴いて、それから、チンチナーという名前が付けられたつて、雲

でい言ち、うりからどう、チンチナーんでいぬ名前付ち

雀は。そして、また、ハブは脱皮するつて。

よーん。チンチマー小。あんさー、ハブおまたしでい
変ゆんでい。くのーやー、ハブおしでいーる筈どー。

注 ①チンチマー・・・方言でチンチナーとも言う。(和名：せっか)しかし、沖縄ではセツカを通称雲雀と呼んでいるので、ここ
は雲雀として語っている。

②ハブ・・・沖縄に生息する陸生毒蛇のうち、ハブ・ヒメハブ・サキシマハブの三種の総称。毒性は非常に強い。

③粟・・・粟のこと。または他の穀類も含むのか。

④トージミ・・・唐黍のこと。

⑤しでい変わる・・・すでる。脱皮すること。

⑥若返りの水・・・村の神聖な井戸から、元旦の朝、初めて汲む水のことをいう。沖縄では、この水をあびると若返るといふ信仰
が残っている。

平成二年七月六日 上門博之・武嶋昭子・宮城昭美・宮里信勇聴取 山城綾子翻字 T79 A7

10 雀孝行

① クラー（姉妹・アンマー）

昔、ある所にあつた親孝行のお話やしが。あのねえ、ゆぬ姉妹やていん、親戚達やていんどー、あんそーりーや、あぬー……。

「親ぬ大病気なてい、今なー、けー亡しがーたーやくとう、早くなー見舞しーが来」

① ンでい言ちさくとう、一人ぬ姉妹や、清ら装いし、ハイカラーし、行ちゆんでいち親ぬミーウトウイ見うーさんたんでいしが。

一人ぬ姉妹や、

「なー親ぬくとうでーむん。早くなー行じやーに、親ぬ顔あ見じゆしえーまし。私ぬーかきたまかきし、ちやーぬやな着物着ちん、早くなー親ぬ顔あ行じ見じぶさんどー」

ンでい、急じ行じえーるふーじ。行じやくとう、親あうつさし、

「あいな、いやー顔ぐわー見ちやるやー」

池原 幸島マツ（明治四二年一月二五日生）

昔、ある所にあつた親孝行のお話ですがね。同じ姉妹でも、親戚でもね、あんなことをする人はねえ……。「親が大病して、今にも死にそうだから早く見舞いにおいで」

と連絡すると、一人の姉妹はきれいに着飾って、ハイカラしてから行くといって親の死に目に間に合わなかつたそうだ。

ところがもう一人の姉妹は、

「親のことだもの、一刻も早く行って、親の顔を見た方がいい。私はどんなに見すばらしい着物であつても早く行って親の顔は見たいよう」

と急いで行ったらしい。すると親はとても喜んで、

「ああ、あなたの顔を見ることができたねえ。私はもう、今度の病気は治すことができそうにないから、母さんの言うことを遺言だと思って聞きなさいよ。あなたは親孝行者だから、親孝行だから」

と雀に言った。雀は布を織っていた途中であつたんだろ

「なー私ねーなー、くぬうていぬ病氣え治ゆーさんくとう、あぬー、アンマーが遺言でいしえーや、いやーんかい聞かすぐとう、聞ちくいり。な、いやーややー、親孝行者やくとう、親孝行やくとう」

「んち、うりんかい言ちさくとう。うれー総、布さーやてーんてーひー。あんさーに総掛きてい、総ままーひー、親ぬ前んかい行じえーるふーじー。行じやくとう、やっぱし、あぬークラーンでいしえーやー、総なような物、白い物掛きとーしえーやーひー。やくとう、あのまんまにして、あれは本当に、

「いやーや倉ぬ下なーでい、居て、米粒ね、米食でい暮らしよー」

「んでい親のー言ちやんでい。あん言ちやくとう、またあぬ、ハイカラーし、いつも綺麗な着物着けて来た者はなー、

「な、いやーや、親孝行あらんくとう、いやーや、清ら装いすんでいち、親ぬミーウティン見だんぐとう、いやーやなー、川なーでいーや、流りーる川なーでいーから、虫小取てい、虫小取やーに、ちやー、うぬ生活し暮らちいきよー」

「でいち言らつたぐとう、やっぱし、あれー、清ら着物着

うね。連絡がきたので、そのまま、総を掛けたまま駆けつけたので、雀の首のあたりには総をかけたように白いものがあるでしょう。そのままの姿で駆けつけてきたので、

「あなたは倉の辺りで、米粒を拾って食べて暮らしなさいねえ」

と言われたんだって。

また、ハイカラしてきれいな着物を着た者にはね、

「あなたはきれいに着飾るといって、親の死に目にも間に合わず親孝行じゃないから、川原辺りで虫を拾って食べて生活していきなさいね」

と言われた。だから、ほら、あれは青い羽根をして綺麗でしよう。だけど、寒い日だろうと、雨の降る日だろうと木がボサツとおい茂っている川原の辺りから、歩いてチュツチュ、チュツチュして羽根をふるわせて悲しそう顔をして、天を向いてはまたチュツチュ、チュツチュして暮らしているそうです。昔話はそれだけ知っています。

ち、青い羽根でしよう。だから、あれ着けておつても、寒い日にも、雨降りにも、やつぱし、川にね、木のすぐボサツと生えている川原な一から、歩いていって、そうして、チュツチュ、チュツチュして、羽根をこんなにかんなにして、チュツチュして、また、悲しそうな顔をして、天を向いたりして、また、こつちにチュツチュッ、チュツチュッ、チュツチュッして、あれは、あの暮らしているつて。だ、昔話はそれだけ知っています。

注 ①ハイカラ・・・おしやれ

② 総・・・総。機織りに使う紡いだ糸を巻いておく道具。

③ 総をかけたように白いもの・・・雀の首には白い輪があり、それをこの時の糸の跡だと言っている。

昭和五五年五月一八日 安里和子・仲松庸尚聴取 宮城昭美翻字 T4B2

② クラーとカンブヤー

な一で一じな親ぬ孝やて一るぐと一ん。クラーでいる鳥れやんど一、うぬ、クラーでいちよ一る。昔え米ん作ていや一百姓や、米ぬ喰いんでいちちや一倉からん歩ち、ま一からん歩ちゆたんよ一、クラーんち。うれ一何んりちクラーやがんでいね一、やな着物着ち、あれ一

池原 盛島五郎（明治三九年二月一〇日生）池原

もう、たいそう親孝行者であつたらしい、雀という鳥がだよ、雀という。昔は百姓は米も作っていたから、米を食べるといって、いつも倉の辺りや、いろんな所から歩いていたよ、雀は。その鳥がどうしてクラー（雀）と一うのかというね。みすほらしい着物を着て、あれは、

な、鳥ぬ一番服装や悪さしえーや、い。親ぬ孝しちや、な。どうくうりなや、鳥や孝行なやにや、まーからん親ぬ巢んかいちよーる、くーてい行じ、親ん物くいてい腹うくしみてい。あんさーに、孝行ん子なやに、

「いやーや、とうまていん雨ん濡でいらんきよー」

でいる。倉ぬ下から歩ちえーくとう、クラーんりちあらんがや。

また、だーなーちえー、①カンプヤーやよ、あれーどうく、今ぬ女わらばーたーがや、化粧しちよ、な。ハイカラびかーんさーにや、あまくまんけー歩ち、むる男びかーん搜めーあんべー。化粧さーに川ぬ端からちやー浴みてい清ら支度なたくとうや、

「うれー、親ぬ孝んしやーくとう、いやー、ふいーじーいり」

んでいち、川ぬ端んじ巢や作くていやー、うまんじ生活おそーるちむえーやーるーばー。うっさるやんどー、昔ぬ話や。

注 ①カンプヤー・・・翡翠のこと。ヒスイ科の鳥。体の上面は美しいコバルト色を呈する。雀より大きく、くちばしは太く長い。水面に突き出た棒や川岸の木の枝に垂直に止まって、小魚を見つけると水面に急降下し捕らえる。

鳥の中でも一番服装が悪いさあねえ。親の孝をしてね、もう、あんまりにも雀は親孝行者でね、どこにいても、親が巢にいる時には食べ物くわえて持って行き、腹一杯食べさせていた。このように孝行の子どもであったので、

「お前は、ここで雨に濡れないようにしなさい」と言われて、倉の下で暮らしていたからクラーと言われようになつたのではないかねえ。

また、もう一つの翡翠はね、あれは、あまりにも、今の女の子たちが、化粧してね、もう、ハイカラばかりしてね、あっちこちに行つて、男ばかりを捜しているように化粧をして、川の端でいつも浴びて、きれいな恰好していたからね、

「これは親の孝行もしないので、冷えなさい」といつて、川端で巢を作つてね、そこで暮らしているという意味であるわけ。それだけなんだよ。昔の話は。

昭和五五年五月一日 喜納弘子・岡田浩・新城悦子・島袋美奈子聴取 山内智子翻字 T3A6

③ クラーとカンジュヤ

〔親が病氣〕やくとう、親あ見舞いしーが来んりち、連絡んじやくとう、クラーやそーぬぎてい、

「なー、親ぬ病氣ぬんやれー」

んでいち、ふーじーし行じよーしが、また、うぬカンジュヤーんでいしえー、また、

「私ねー、清ら装いしる、着物ん着ちる行かりー」でいるふーじーしやくとう、

「いやー親不孝やくとう、なー、川端んじ、魚捕てい喰れー」

また、クラーや、クラーやまた

「いやーや親孝行者やくとう、屋敷内どう米拾てい喰り」

でいぬふーじーぬうりがあしが、あとさきがあんまり、簡単、はつきりしない。

池原 与那嶺朝英（明治三十九年七月二〇日生）池原

〔親が病氣〕だから、親を見舞いしに來なさいと連絡がきたので、雀はびっくりして、

「もう、親が病氣なら」

と言って、なりふりかまわずに行つたが、また、その翡翠という者は、

「私は美しく装つてから、着物もちゃんと着てからしか行けない」

というふうな感じだったので

「お前は親不孝者だから、もう、川端で魚を捕つて食べなさい」

また雀には、

「お前は親孝行者だから、屋敷内で米を拾つて食べなさいね」

というふうな簡単な話があるが、話の前後があんまりはつきりしない。

注

①カンジュヤー・・・カワセミのこと。沖縄各地の川辺に生息する留鳥で、春から夏にかけて川辺などによく見られる。水面に突き出た棒や川岸の木の枝に垂直に止まって、小魚を見つけると水面に急降下し捕らえる。

昭和五五年五月一八日 喜納弘子・岡田浩・新城悦子・島袋美奈子聴取 山内智子翻字 T3A4

④ クラー小

池原 又吉松八（明治三八年四月八日生）池原

きれくないでしよう、あのクラー小は。この毛は。古いでしよう、フクター〔ぼろ〕みたように。だから、自分はフクターはいて、親孝行やりたいという伝え話聞いているんですよ。それ、別にはあまりないです。

それから、ソーミナー小〔めじろ〕や、もう、家に入ったら、必ず一晩は外に、どこか、家より外に出て、一晩は向こうに泊まって、また、晩の五時後、家んかい戻てい来たるばー、ソーミナー小が入ったら。ソーミナー小はもう、あれは、あんまり良くないから、今あ家うていむる養なとーせーやーな、ソーミナーは。世変わいなやーに〔今は家で飼っているでしよう、めじろは。世の中も変わってしまつたから〕。

昭和五五年五月一日 喜納弘子・岡田浩・新城悦子・鳥袋美奈子聴取 山内智子翻字 T3A3

⑤ カンジュヤーとクラー（姉妹）

登川 平田盛永（明治四一年六月六日生）登川

雀と翡翠、うったー二人や女の子姉妹だつたつて。うりが親の病氣さくとう、

雀と翡翠の二人は、姉妹だつたつて。その親が病氣になつたから、

「なー、危篤状態やくとう、早くなー、来」
んでいちさくとう、すぐ、雀え、昔ぬ布織いし、総、
総は今の縦糸、うぬ総掛きとーる半ばやたんでいしが、
くぬ、

「もう、危篤状態だから、早く来なさい」
と言つたから、雀はすぐに、昔の布を織るときの総ね、
総は今の縦糸か、その総を掛けている途中だつたそうだが、この、

「危篤状態やくとう、早くなー、来」

「危篤状態だから、早く来なさい」

んでいち、通知来くとう、すぐ、総えー、首んかい掛

といつて通知が来たから、すぐ、総を首に掛けて、急い

きやーに、そーまりー、着物ん替らんぐとー、着ちよー
るまー、仕事する場合に、着ちよーるまー、親ん
前んかい行じ、さくとー、あんすかまでいぬ危篤おあら
んしが、

「な、いやーや、親ぬ孝ぬしじやくとー、いやーや、親
ぬ孝そーくとー、雨ぬ降ていん、晴りていん、くぬ倉ぬ
下なーりー、お米拾てい、食でい、暮らしよー」
んでい、お母さんがぬ、あぬ伝えさつとーるばーて。

だ、翡翠んでいせー、沖繩口しえーカンジュヤーでい
やりーたん。あれー川端んかい居んよ、きれいな小鳥
ですよ。それはまた、きれいに着物も替えて、化粧もし
て、親の前に行じえーくとー、なー、時間の一遅くな
とーるばーて。あん、うりが、行けーからーなー、危篤
状態、本當なー危篤状態なてい、

「いやーや、親不孝やくとー、でえーくとー、雨ぬ降い
にん、風ぬ吹きん、川ぬ水ぬみーから餌取てい、喰て
い暮らしよー」

んでい、親ぬ言ちきなやーに、翡翠や、川端うてい暮ら
ち、川から獲物お餌あ取てい喰いしが、雀え、ちやー
家ぬ下なーりー、米倉とーてい昔えーあてーくとー
や、

で、着物も着替えないで、着ているまま、仕事している
ときに着ていたまま、親の所に行ったら、そんなにまで
の危篤ではなかつたが、

「もう、あんたは親孝行だから、あんたは親孝行してい
るから、雨が降っても、晴れても、この倉の下から、お
米を拾って食べて暮らしなさいよ」

と、お母さんが言つたと、伝えられているわけ。

ほら、翡翠というのは、沖繩口ではカンジュヤーとい
うさあね。あれは川端に居るきれいな小鳥ですよ。それ
はまた、きれいな着物に着替えて、化粧もしてから、親
のところに行つたから、もう時間は遅くなっているわけ。
これが行つたときはもう、危篤状態、本當のもう危篤状
態なつていて、

「あんたは、親不孝だから、であるから、雨が降っても、
風が吹いても、川の水の中から餌を取って喰って暮らし
なさいよ」

と、親の言いつけだったので、翡翠は川端で暮らして、
川から獲物の餌を取って喰うが、雀はいつも家の下から、
米倉とーてい昔はあつたからね、

「その倉の下から、米や粟なんかを拾って食べて暮らし
なさいよ」

「うぬ倉ぬ下な一りー、米や、粟なんか、拾てい、食
でい暮らしよー。」

んでい。あんさーに、あんなとーん、うぬ伝えから。ク
ラーでいしえー、今ぬ雀てー。あれー、米粟拾てい喰い
しが、翡翠え、カンジュヤーんでいせー、川端うてい
暮らち、魚捕てい喰いん、うれー、親ぬ遺言やるばー。

⑥ クラー小とカンジュヤー

清ら装いや好かんしが、親ぬ孝やしわるないるんでい
ち、親孝行すしえークラー小や、やいびーたんでい。
カンジュヤーやまた、川端な一りー清ら着物小、水色
とうか、黄色とうか混ちよーる清ら着物小着ちよーる
カンジュヤーんち居いびーたんよーやー昔え。今ん
でーな一見ちえーんじやびらんしがてーうりん。いつ
ペー、清ら鳥小、あれー。カンジュヤーでい言びーた
しが。うれーまた、親孝行し、やな装いそーしやかねー
てー、親孝行さんたんでー私ねー、ちゃー清ら着物着ち、
清ら装いやましんでい言に。あんさーに、うれーな一

と言われて、そうして、そうなっているって、その伝え
から。クラーというのは、今の雀さ。あれは、米粟を拾
って喰うが、翡翠は、カンジュヤーというのは、川端で
暮らして、魚を取って喰う。これは、親の遺言だけ。

昭和六〇年八月二六日 辺土名初美聴取 宜保勝翻字 T 15 A 13

登川 仲宗根トミ（大正二年五月五日生）登川

美しく装うのはきらいだが、親孝行をしないとけな
いからといって、親孝行をするのは雀だったんだって。
翡翠はまた川端辺りから、美しい着物で水色とか、黄色
とか混ざっている美しい着物を着ている翡翠という鳥が
いましたよね、昔は。今ではもう、見ることもなくなっ
てしまいましたけどねえその鳥も。大変きれいな鳥です
よあれは、翡翠といっていましたね。その鳥はまた、親
の孝行をして、みすほらしい恰好でいるよりはね、親
孝行をしなくても私はいつも綺麗な着物を着て、美しく
装っていたほうがいいと言って。それで、その翡翠は親

親ぬん突き放さつとーぐとう、ちゃー、川ばたーなり、水ぬ上なーりー、清ら装いし歩ちよーしが。くぬクラ小や、親孝行やくとうんてい言ち、ちゃー家ぬ雨垂なーりー、倉んけーある物食でい。また、人ぬ落ちてい、親ぬ落ちちりー食り、ないんでいいち、あんし、親孝行そーるたみなかい、着物やな着物着ちよーてい、家ぬ内なーりー、雨垂なーりー、庭なーりー、ほーりとーる物食でい育だかりーるぐとうやんでい言んどーでい。うぬ話や、親からどう私ねー聞ちよーぐとう。

㊦ カンジユヤーとクラ

親ぬ寝じやびたくとうてー、親ぬ寝たくとうてー、
「えー、いがたー親あ寝とーくとうてー、いやー早くなー行じやーに見舞しわるやさに」
でい言ちやくとう、カンジユヤーが、
「あーあー、私ねー清ら着物織ていからる親見舞する。清ら着物着ちからる行ちゆる」
んり言ちや。

にも突き放されてしまったので、いつも川の側あたり、水の上あたりを、美しく装って暮らしているのだが。この雀は親孝行者であるということ、いつも家の軒下から、倉にある物を食べている。また、人間や、親のおこぼれを食べて生きていくことができるといって。そうやって親孝行をしているために、着物はほろの着物を着ているが家の中や、軒下、庭辺りに散らばっているおこぼれを食べて、生きることができるといふことらしいよと。この話は親から私は聞いたので。

昭和五五年五月一八日 大本敬子・西江美智子聴取 山内智子翻字 T1B1

登川 高良カマ（明治二四年一〇月五日生）具志川市

親が病気になったのでね、
「ねえ、私たちの親は病気に寝ているのでね、あなたも早く行って、見舞をしないといけないんじゃない」
と言うと、翡翠は、
「ああ、私は美しい着物を織ってから親の見舞には行くつもりだよ。美しい着物を着てから行くのよ」
と言ってね。また雀は、

また、クラーヤ、

「あーあー、私ねーフクター着ちよーていん親ぬくとーしわらないくとうやー、私ねー親ぬくとすせーまし」
んり言ちやくとう。うれー親ぬ孝ぬ子なていやー、あんしえーくとう。カンジユヤーや親不孝な子やくとう、

「川から歩ち、魚捕てい喰よー」

また、クラーヤ親ぬ孝ぬ子やくとう、

「あまくまぬ倉なりー糶食り、頑丈し」

でい言たんり。あんしやいびーたは。

昭和五五年五月一八日

富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩・安田啓子 山内智子翻字

T 2 A 3

⑧ クラーとコーカル

クラーヤ、親ぬ病ろーていから、あんねっし、やな着物着ちん、すぐそーまりーんち、あぬ親見じーが行ちゆしが。また、コーカル^①んでい言たんどー。うれー、また、川端^②なりーうり取てい喰てい、魚捕てい喰ていなー、

「清ら着物着ちる親見じーがん行ちゆる」

り言ちやくとう、あんさーに、

「ああ、私はぼろの着物を着ていても、親のことはしないといけない。私は親のことをするほうがいい」

と言つて、雀は親孝行の子だから、そうしたんだが。翡翠は親不孝な子なので、

「川辺で魚を捕つて食べなさい」

また、雀は親孝行の子もだから、

「あっちこっちの倉で糶を食べ、元気に暮らしなさい」

と言つたつて。そんな話でしたよ。

登川 仲宗根チル (明治三一年五月一〇日生) 登川

雀は親が寝込んでいふというので、あのように汚い着物を着ていても、すぐさま、親を見に行くのだが。また赤シヨウビンといつていたよ。その鳥は、また、川の側から魚を捕つて食べてねえ、

「美しい着物を着てから親を見に行く」

と言つたので、それで、

「お前は川の側で餌を取つて食べなさい。また、雀は倉の

「いやーや、川端から物お取てい喰わ。また、クラー
や倉ぬ下から米拾てい喰わ」

んりいちぬ話やたんりいるばーてー。

注 ①コーカル・・赤ショウウビンのこと。カワセミ科に属する鳥。体色は鮮やかな赤褐色である。琉球列島の奄美大島まで分布する。

昭和五五年五月一八日 富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩・安田啓子 山内智子翻字 T2A7

㊟ カンジュヤーとクラー

親ぬ孝すしやかにんどー、清ら着物着ちすせーましん
でい。あんしる川端んじあれー、カンジュヤー清らさ
たげーのー。

また、クラーやよー、クラーや、やな着物ん着ちん親
ぬ孝すせーましんり。あんし、あれー、家ぬ上、家ぬ内
に育ていしむんり。カンジュヤーやまたあねーあれーあ
らんな、反対なやーにる川端んじ育ちよーんり。

昭和五五年五月一八日 比嘉和男・崎原有美恵・辺土名美智代聴取 山内智子翻字 T1A1

下から米を拾って食べなさい」
という話であったというんだがね。

登川 仲宗根蒲助（明治三四年一〇月三日生）登川

親の孝行するよりもね、美しい着物を着ているほうが
いいんだと。だから、川端辺りにいる翡翠はきれいだし
よう。

また雀はね、雀はほろの着物を着ていても親の孝行を
するほうがいいと。それで、雀は屋根や家の内で暮らし
てもいいんだと。翡翠はまた、そうではなくて、雀と反
対なので川端で暮らしているんだと。

⑩ 雀とカンプヤー（兄弟）

登川 平田嗣光（大正六年五月五日生）登川

私たちが小さいとき、親たちから聞いた、聞かされた話だが、ま、たぶん親たちとしては、子どもたちに、孝行のあれ「教訓」を教え込もうという意味で、話されたとは思われるが。

ある所に、雀とカンプヤー^①、ま、これは兄弟だという意味あいで語っておるが、まあ、この、いつかの日（ある日）に親が、急病になって、そしてもう臨終まじかになったときに、来るようにという使いを受けたが、たぶんその方（カンプヤー）は、そういう親の所へ行くんだから、と言って、着物にとらわれて、色付けしたりして、着物を作って、着けて行つたために、とうとう親の臨終に間に合わず、なつたと。

しかし、雀の方は親のことだから、もう、そのままの姿で駆けつけて行って、やっと親の死に目に合うことができたので、そのときは、その親は、死なないうちさあね、死ぬ直前に、

「お前は、本当に孝行だ。そのままでもいい、親の死に目に合うように飛んできてくれたから、非常な孝行である」と。しかし、カンプヤーの方は、親の死に目に対してでも、自分の着飾りをするから、

「もう、お前は、これからあと、川に行つて、自分で餌を拾つて、取つて食べて、生きなさい」

と。しかし、雀の方は、親孝行だから、これは、米の飯が食べられるようにということ、お米のこぼれ、糶かきの落ちているのを与えられたために、今でもよく、稲の刈り取りや、その時期には雀が寄つてたかつて、餌を取りに雀が集まるのも、その理由だというようなことが、親孝行せよという意味あいを含めて、母たち、昔の人はそういうふうに、子どもたちに話しておつたということになるだろうな。

注 ①カンプヤー・・・翡翠のこと。

昭和六〇年九月三〇日 辺土名初美・真栄城栄子・宮城昭美聴取 宜保勝翻字 T 16 A 4

Ⅱ 翡翠とクラ―（兄弟）

登川 仲宗根盛雄（明治四三年九月一五日生）登川

昔はよ、翡翠かわせみもクラ―〔雀〕も兄弟であつたつて。だが、親が病氣して、もう危篤なつたが、あの翡翠かわせみは、親の病氣に
であるが、

「もう、着飾つて行かないとできない」

と言つて、着飾つて行くまでには、親はすでにこと切れていた。

そして、また、クラ―は、飾らないで先に行つて、着けたままの着物で駆け寄つて行つて、親のミーウトウイ〔臨終〕
に間に合つて行つたから、

「あんたは、もう良い子だから、いつも倉の下でお米を食べて暮らしなさい」
というが、翡翠かわせみの方は、

「あんたはもう、自分のハイカラばかり知っているから、あんたはもう川端に行つて、自分で魚を取つて喰いなさい」
と言つて、こういうふうになつたというような話はあつたんですよ。

これも、子どもの躰しんがらの話なんかのそれから始まつたんですよ。昔はこんなこともあつたと、鳥と人間とのそれを掛けて話やつたというような、そういうもんであるし。

昭和六〇年八月二二日 辺土名初美・仲松庸尚聴取 宮城昭美翻字 T 12 A 10

12 クラーとカンジュヤー

登川 平田フミ（明治三五年四月一〇日生）具志川市

クラーは、倉の下から歩くから親孝行者むんと言いつたがねえ。また、あのカンジュヤー（翡翠）というきれいな鳥はたくさんいたよ、川に行ったら。これも今は見たことないが、たくさんいたよ川行ったら。これがチムエー〔意味〕は分らないがね。カンジュヤーは、あれは親不孝者むんだから、
「あんたは川の側がわから歩いて、すだき〔育ち〕なさいねえ」と。

この法律だようでい〔この意味だそうだ〕。これは聞いたよ、覚えてる。

昭和五五年五月一八日 禰晴一郎・湧川紀子・金城あつ子・緑間直美聴取 山内智子翻字 T1A9

13 カンジュヤーとクラー小

知花 鳥袋タケ（大正七年九月一日生）知花

うれーよー、あぬー、カンジュヤーんちよ、カンジュヤーんち、じこー清ちよらさぬ鳥小ぬうたんよ。うれー、川端かわばたからよ、川かわからたつちヤーにや、魚小いめこんでー、かん、チッコイみかさーに喰くてーしーしふるカンジュヤーんでいち、尾びやファイター、ファイターし、飛とでい歩あちゆる鳥小とひこがうたんよ。くれー、なー、じこー清ちよらーてーなー。うまんでー、しぐなー赤小あかこ、青小あおこし、なー、尾小びこうりし。とー、うりとう、カンジュヤーとう、く

これはね、翡翠かほせみといつて、とつても美しい鳥がいたよ。あれは、川端からね、川の辺りで歩いて、魚などをついで、捕って食べたりしている翡翠といつて、尾を振り振りして飛び回っている鳥がいたわけさ。これはもう赤い色や青い色をした尾をしてね、とつても美しいさあ。その翡翠とこの雀の話なすを聞かされたわけさ、私たちは。
これはね、あの雀という鳥は、たいそうな親孝行者で、ある日のこと、化粧をして、もう、どこかに出かけよう

ぬクラ一小ぬ話聞かきりーたんよー私たや。

うれーよー、クラ一小んでゐる鳥えー、大変な親孝行者なてい、あんさーに、な、化粧小し、化粧小し、なー、別けーな、出じーんちやたんてい。あんししやくとう、

「親や今、今死にー目にかかていねーんくとう、早くなー来よー」

さくとう、うぬクラ一小んでいしえー、あぬ白なとーる所おや、其処までー化粧すんちやたしが、けー残さーにや、けー残さーにすぐ、「親ぬ、ミウテイーふし見ちくーんねーならん」でいやーに、慌ててい親ぬ、うり、見じーが行じよーるばー。様子見じーがなー行ちえーんてー。あんさーにどう、あぬ首ぬくつペー白やよーい残とーぎさんていぬ話やたるばー。

カンジュヤーでいしえー、また、反対に、逆にまた、「立派小装てい行かんねーならん」

んでいち、なー上から下までい全部立派小し行じやくとう、うにんとうーねー親あもーらんけーなてい、あんし、やたんていんどー。あんさーにあれー、親不孝者でい言やらーに、

「いやーややー、冬にん寒さガタガタさーにや、川

として準備をしていたんだって。そうしたからもう、

「親はもう、今にも死にそうだから、早く来なさいね」と言われたから、この雀という鳥の首の辺りが白くなっているのは、そこまで化粧するつもりであつたが、途中でやめてしまつてね、すぐ、「親の死に目に間に合わな」といけない」と言つて、慌てて親の所に様子見に行つたわけ。それで、あの雀の首に白い部分が少し残つてゐるとの話なんだけどね。

翡翠つていうのはまた、反対に、逆にまた、

「きれいに装つて行かないといけない」

つて言つて、もう上から下までみんな立派にして行つたから、その間には親は亡くなつてしまつていたというこゝとらしいんだ。それでも、あれは親不孝者つて言われ

て、
「お前はね、冬でも寒さでガタガタ震えながら、川端から歩きなさいね」

つて言われてね、あれは川からね、川端から飛び回つてゐるんだよという話があつたわけ。

雀はまた、

「お前はもう親孝行者だから、金持ちの人の家の下から歩いてね、そうして、米や麦なんか散らばつてゐるの

な―でい―歩きよ―」

でい言らつてゐる、あれ―川からや、川端な―り―歩ち
ちしやんでいち、話やあたるば―。

クラ―やまた、

「いや―やな―、親孝行者やくとう、ウエーキン人ぬ家
ぬ下な―でい―歩ちや―にて―、あんさ―に、あぬ米
小ん、麦小ん、ぬ―んちりと―しや―、うり拾つてい
喰や―に育ていいくわ―や―」

んでい、親ぬ言つていどうよ―、クラ―小やウエーキ
ん人ぬ家な―でい―や、あれ―家ぬ中んかい入つちや
んて―ん、ぬ―ん、あんくとう、何んあらんでい。あん
さ―に、倉ぬ下な―でい―や―、あぬ米小ん、粟小ん、
何や―くい―や―、穀物さ―ね、

「これ食べてね、暮していきなさい」

と言われたから、こんなやつてゐるつて。だから、ク
ラ―小場合は親孝行者、あぬカンジュヤ―という鳥は
親不孝者つて。

を拾つて食べて生活していきなさいね」

つて親が言われたのでね、雀は、金持ちの人の家の辺り
でよく見かけるでしょう。雀が家の中に入つても、何も
災いをもたらさないうつて。何でもないうつて。そうして、

「倉の下の辺りには米や粟などいろんな穀物があるから、
これを食べて暮らしていきなさい」

と言われたから、こんなやつてゐるつて。だから、雀
の場合は親孝行者、あの翡翠という鳥は、親不孝者つて。

昭和六一年七月九日 宮城昭美・宮里信勇聴取 上門博之翻字 T 26 A 3

14 クラーとカンジュヤー

クラー「雀」やいっペー親孝行やたんでい。あぬカンジュヤーんちうふえーや、川端なけーいっペー清らーが、青し。あれーまた親不孝者やたんでい。いっペーハイカラーンやい。あれーいっペーハイカラヤてい、な、親ぬ病氣ん見だん。

クラーやまた、なーあぬハイカラーンあらん。いっペー親孝行者なてい、あんさーに、

「いやーや、なーやー、くぬ総さーに、あぬ着物織てい着しーんちやひがー、親やなー病氣し、着物お織てー着しゆーさんくとう、此ぬ、総やていん、うりはちよーきーねー温ふあくとう、いやーやなー、着物織ていー間に合わんぐとう、くぬ総えーはちよーき」

んち、クラーやあんしるくつき真っ白らそーんでい。あれー、総はきらつとーるばーやんでい、クラーや。

カンジュヤーでいしえー、

「いやーや、なーやー、親不孝者やくとう、いやーや、川端なーりー、寒さおーいし」

んでいち、あんさーに、あれー川端なーりーうりやんでい。

知花 栄野比トヨ（大正五年七月一二日生）池原

雀は、とつても親孝行だつたつて。あの翡翠といつているでしょう、川端に、とつてもきれいなものが、青い色の「鳥が」。あれはまた親不孝者だつたつて。とつてもハイカラでもあるし。それで、翡翠はとつてもハイカラだつたので、もう親が病氣でも世話もしない。

雀はまた、もうハイカラでもない。とつても親孝行者で、それで、

「あんたはもうね、この総で、あの着物を織つて着せようと思つてゐるがね、親はもう病氣して、着物を織つて着せることができなから、この総でも掛けていたら温いから、あんたはもう、着物を織つては間に合わなから、この総を掛けておきなさい」

と言つて、雀はそれで「首は」真っ白くなつてゐるつて。あれは総を掛けてゐるからだつて、雀は。

翡翠というのは、

「あんたはもう、親不孝者だから、あんたは川端で寒くしなさい」

と言つて、そうして、あれは川端にゐるつて。

雀はねえ、昔は米倉、粟倉といつて、倉があつたから、

クラヤーヤー、昔えー米倉、粟倉んち、倉ぬあてー
くとう、

「いやーや倉ぬ下なーりー、米ぬ物食り、ふるいーり
よー」

んでいち、あんさーに、クラヤーよー其処んでーな
りー歩ちゆしえー、うぬたみやんでい。

15 ムム鳥小とターカンジュイ(姉妹・アンマー)

雀、クラヤー小。

「アンマー、わったーなーふどういーとーくとう、旅ん
でい儲きていきち、親孝行さーいー」

んでい言ち、行じやくとう、四、五日ないや、またアン
マーが病氣かかやーい、隣ん人ぬ達が手紙やらちやー

なかい、あんさーうつとー、また姉さんぬみーんかい行
ちやーい、

「アンマーや病氣かかとーんでいひ、家かいはらなー、
でいか、でいか家かい帰らでいか」

んちやくとう、

「あんたは倉の下から、米粒を食べて大きくなりなさ
い」

と言われて、それで、雀がそこら辺から歩いてるのは、
そのためだそうだ。

昭和六一年七月一〇日 宮里信勇・宮城昭美聴取 宮城昭美翻字 T 27 A 3

宮里 上根ウサ(明治三二年二月五日生)与那城町

雀、クラヤー小が、

「お母さん、私たちは、もう大きくなっているから、旅
に行つて儲けてきて、親孝行しようねえ」

と言つて、行つたが、四、五日すると、またお母さんが
病氣になつたと、隣の人たちが手紙を送つてきたので、

妹は、姉さんの所に行つて、
「お母さんが病氣だというから、家に行こう。さあ、さ
あ、家に帰ろう」

と言つたら、

「わかつた。だけど、あんな遠くに行くなら、きれいな

「えー、あがとうーきちからー、清ら着物ん着ちー、髪ぬん立派捌ち行ちゆくとう、いやー、先なとーけー」

んでい言やーい、うつとー行ちやーに、なー、親ぬミートウインさーなかい、また、しーじやー後から来ちえーや。しちやくとう、だー、ミートウイエーしーうーはな、「いやーや、親不孝ぬ子やくとうやー。うつとー人ぬ作いむじゆくい食でい、暮らしよー。いやーや、親不孝ぬ者やくとう、①クムイン端んかい行ちやー、うみしじ魚捕てい、夏ん冬ん喰ば」

いやーなかい、ちようどう、クムイン端なーりー腹小や赤真つ赤小ひち、②ターカンジュイ小どう、かんさー、かんさーひち、しゆく、魚捕つていくむーふあ。

雀んかいやユム鳥小んでい言うでんひやー、ハネル言葉。また、燕え、マッテラー小んでい。また、腹小や赤鳥や、ターカンジュイ。羽小んかんさーい、腹小や赤真つ赤小さーなかい、かんさーかんさーひち、魚捕ゆいんでい。

注 ①クムイ・・・自然の、あるいは人工的につくられた溜池。

の深くなっていることを言っているのか。

②ターカンジュイ・・・翡翠のこと。

着物を着て、髪もきれいに梳いてから行くので、あんた、先に行つておきなさい」

と言われたから、妹は行つて、もう、親の死に目に会つた。

また、姉は後から来た。だけど、ほら、死に目に会えなくてね、

「あんたは、親不孝な子だから。妹は人が作る農作物を食べて暮らしなさい。あんたは、親不孝者だから、池の側に行つて、夏も冬も自分で魚を捕つて喰いなさい」

と言われた。ちようど「今でも」、池の側辺りで、お腹が真つ赤になつている鳥で、ターカンジュイ小というのが、こんな、こんなして、魚捕つて食べているさあ。

雀にはユム鳥小と言うさあ、ハナレ〔宮城島〕の言葉では。また、燕にはマッテラーと言う。また、お腹の赤いターカンジュイという鳥は、羽をこんなして、お腹は真つ赤で、こんなこんなして魚を捕るつて。

規模は小さく、防火や芋洗い、家畜の水浴びに利用する。ここでは川

16 ユム鳥小とターカンジユイ（姉妹・アンマー）

宮里 上根ウサ（明治三二年二月五日生）与那城町

① ユム鳥小や、ハナリうてーユム鳥小んてい言しが、
雀。また、マッテラーや燕や。雀んでいうし
えー、クラー小、其処から飛でい歩ちゆる、ユム鳥小。
クラー小や親孝行者。

ユム鳥小や親孝行、いったー池ぬクムイから遊ぶぬ、
腹赤小、だーうりんかい何んでいえーが。腹赤鳩小、
池ぬクムイから魚捕つてい歩ちゆる、うりんかい何んで
いゆが。

ちよーどうゆぬ、カンジユエー雀やしがよ、二人雀や
しがよ、アンマーやな、年とてい、

「私達や、二人、あぬー姉さぬん妹ん二人、旅んでい
儲きてい来くとう、なーんも心配しんそーんなよー」
んでい、二人儲きーがんでい出たくとう、四、五日な
いーやまた、アンマーや病気かかやーに、けー隣ん人
ぬ、妹んかい手紙ぬ来んてー。あんさー、妹やま
た姉さんにーんかい行ちやーに、

ユム鳥は、あれは宮城島ではユム鳥小と言うよ、ユ
ム鳥と言うのは雀。また、マッテラーというのは燕ね。
それは燕。雀というのはクラー小、そこら辺から飛ん
で歩いているユム鳥のこと。雀は親孝行者。ユム鳥は親
孝行、あなたたちの池のクムイで遊んでいる腹の赤い鳥
これには何て言うか。腹の赤い鳥、池のクムイで魚捕つ
て歩いている、これには何て言うのか。

ちよーどこのカンジユも同じ雀だがよ、二人とも雀
〔姉妹〕だけどね、母親がもう年とて、

「私たちは、二人、あの姉さんも妹も、二人で、旅に出
て儲けて来るから、何も心配しないで下さいよ」

と言って、二人儲けに出た。また、四、五日したら、母
親が病気になったから、隣の人が、妹に手紙を出してい
るさ。そうしたら、妹は姉さんの所に行つて、

「お母さんが病気というから、さあ、家に帰ろう」
と言つたら、姉さんは、

「アンマーや病氣んじうんてーひや。でいか、家んかい帰らな」

でいちやくとう、姉さのー、

「んー。旅んかいくれー、髪ん捌ち、化粧んひち、清ら着物ん着りわるやくとう、いやーや先なてい行じよーけー」

んでいあーい、うぬ次女ぬクラ小や、先なてい行ちやー、親んメントウインひつちやん。

あんさーいまた、うぬ清ら姉さのー、行ちゆる間、アンマー、亡ち居らな。とー、アンマーがやー、

「いやーや親不孝ぬ者やくとうやー、いやーやクムインでい魚捕てい喰よー、ターカンジュイ。いやー、ターカンジュイ、田んじ魚捕てい、うみしり喰よー」

また妹や、あぬユム鳥小や、妹やまた、

「とー、いやーややー、人ぬ作いむじゆくい作ゆる、粟唐黍喰てい生ちきよー」

んでいあーに、うれーあぬ、うぬふーじー作くいむじゆくい喰しえー、うぬ道理んでい。

あんさー、ターカンジュイ、ターカンジュイんでい言んばー、うりんかい。ターカンジュイんでい言ふあ、うりんかえー。ターカンジュイや親不孝者。また、ク

「うん。旅するには、髪も梳いて、化粧もして、きれいな着物も着けないといけないから、あんたは先に行きなさい」

と言ったので、この次女の雀は先に行つて、親の死に目に間に合うことができた。

ところが、この美しい姉さんが行く間には、お母さんは亡くなつてしまつた。それで、お母さんがね、

「お前は親不孝者だからね、池で魚を捕つて食べなさいよ、ターカンジュイ。ターカンジュイ、お前は田で魚を取つて、それを食べなさいよ」

また妹には、あのユム鳥の妹には、

「さあ、あんたはね、人が作る農作物を食べなさい。粟や唐黍を食べて生きなさいよ」

と言つて、あのユム鳥が農作物を食べるのは、この道理つて。

それから、これにはターカンジュイ、ターカンジュイと言うわけ。このターカンジュイというのは親不孝者だわけ。また、雀は親孝行者。

ねえ、私も池味にいたわけだから、こんな話は、よく、私たちは、夕飯を食べたあとで、隣の家に行つて聞いたよ。今も、その人は池味にいるよ。

ラー小や親孝行者。

ぬー私ぬんハネル居い。私達、ゆい、夕飯食めし、隣んかい行ちゆたちえー。今、どーにんうんどー、池味ない。

注 ①ユム鳥・・・沖縄中南部方言では、かつて、雀を意味した。今でも、沖縄本島周辺の離島や奄美方言では、ユムドゥイ系が多い。
②池味・・・与那城町、宮城島の北部に位置する字。与那城町は沖縄本島中部の東海岸勝連半島に位置し、宮城島はその北東にある島。古くは高離島と呼ばれた。

平成二年三月二日 豊岡早苗・宮城昭美聴取 山城綾子翻字 T47B3

17 雀とターカンジュー（姉妹・アンマー）

うぬー、雀んでい言いしえー（親孝行者）、ターカンジューやあれー不孝ぬ者。うれ、雀からなとーる。

雀が二人居くとう、

「アンマー、なー私達や大人なとーくとう、旅んでい儲きてい来に、儲きていアンマー孝行さびーくとう、行ちやびらいー」

んでい行ちやーに。さくとう、一週間ないーねー、アンマーが病気なやーに、けー隣ん人ぬ世話さーに、手紙ぬ来に、あんさー、うぬー、うつとー（妹）また、

宮里 上根ウサ（明治三一年一二月五日生）与那城町

雀というのは親孝行者、ターカンジューは不孝な者。これは雀からなっている。

雀が二人いたから、

「お母さん、もう、私たちは大人なっているから、旅に行つて儲けてきて、儲けてお母さん孝行しますから、行きましようね」

と言って、旅に出た。そして、一週間したら、お母さんが病気になって、隣近所の人が世話をしてくれて、手紙が来たので、その妹はまた、

「でーじなとーんむんなー」

「んでい、姉さんぬひーんかい行ちやーに、

「姉さん、アンマーや病氣んでいいうんでー。でいか、
でいか、家かい早く帰らな」

んちやぐとう、

「いー、いー。あがとー旅からーや、髪ん捌ち、清

ら着物ん着りわるないくとう、いやー、先なとーけー」

んでい言ち、うつとー先なてい行じやくとう、親ぬミー
トウイ見ちやーに。

また、装いたていてい、しーじやー、来くとう、

「いやーや親不孝ぬ者や。うつとーや、人ぬ作ゆる

米、粟、トーンチン作てい、拾つてい食みよー。い

やーや、親不孝ぬ者やくとう、池からや、うみしらー魚

捕つてい喰よー」

ターカンジュえー、腹小赤まーに、^①頭小被とーしえー。

とーうりから親不孝ぬ者、ターカンジューんじうるーや、
親不孝ぬ者。

注

①頭小被とーしえー・・・カワセミは河川や池沼辺に住む、全長一七センチくらいの小形の鳥で、頭と翼はやや緑色味をおび、身体の上は美しいコバルト色、腹部は赤色を呈する。頭部は琉球王の冠に似ている。繁殖時期は三月から七月頃で、川の土手や崖などに一メートルくらいのトンネルを掘って巣を作る。沖縄各地に生息する留鳥。水面に突き出した棒や川岸の木の枝に垂直に止まって、小魚を見つけると水中にダイビングして餌を捕らえる。

「たいへんなことになってしまったねえ」

と言つて、姉さんの所に行つて、

「姉さん、お母さんは病氣だというよう。さあ、さあ、
お家に早く帰ろうよ」

と言つたら、

「うん、うん。あんなに遠い旅だからね、髪も梳いて、

きれいな着物も着ないといけないから、あんたは、先に
行きなさい」

と言つた。妹は先に行つたから、親の臨終に立ち会つた。

また、きれいに装つて姉が行つたら、

「あんたは親不孝者だ。妹は、人が作つてある米、粟、

唐黍を拾つて食べなさい。あんたは親不孝者だから、池

からね自分で魚を捕つて喰いなさい」

ターカンジューのお腹は赤くつて、頭にも被っているさ

あ。だから、それからターカンジューというのは親不孝
者と言われている。

18 ターカンジュヤーとクラー

カンジュヤーは、普通語では翡翠。あれがよ、話えー、大概んな、うんぐとぅーやる筈やつさー。ある親孝行、不孝者ぬ話やぬばてーうれー。

「親ぬ病氣そーくとう、重体やくとう」つち、いえいさくとう、えーでいん、まじゅーのー居らんとーるばーるやきに。いえいさくとう、クラーんでいしえー、

「はー、親ぬ重体やれーなー、生ちちよーいにてい話んないる、行きわるやる」

んち、着ちよーぬまーまー、フクターんぬーん着ちはちよーるばてー。

また、この翡翠んでいしえー、ターカンジュヤーんでいしえー、あぬー、清ら装いし、着物んぬーん清ら装いし、行ちゆんとぅー親あけー亡ちねーん。あんしから、クラーや、あぬー、

「いやーや親孝行者やくとう、倉うてい暮らち、あぬ、シジぬ達が作てい米ぬ米食でい、楽に生活をし」

古謝 島袋義堅（大正三年一二月一日生）具志川市

カンジュヤーは、共通語では翡翠という。あれの話は、たいがいみんなこんなはず。ある親孝行と、不孝者の話だわけね、これは。

「親が病氣だから、重体だから」と連絡したら、つまり、一緒には住んでいなかたわけでしょうね。連絡したら、雀というのは、

「あれまあ、親が重体だったらもう、生きている間にしか話はできないから行かないといけない」

と言って、着の身着のまま、ほろを着て行つたわけよ。

また、この翡翠というのは、「方言で」ターカンジュヤーというのは、もう、きれいな格好して、着物なんかもきれいに装って、行くまでには、親は亡くなつてしまつた。

それで、雀は、

「あんたは親孝行者だから、倉で暮らしてね、人間が作つてある米を食べて、楽に生活しなさい」

倉育ちすんでいるるばー。えーでいん、あいがないねー、人間ぬ作とーし、まじゅーんし落ていし、散らかちそーしや、食でい暮らしんでいる意味えーやんてー。楽にし。また、翡翠んでいしえー、ターカンジュヤーんでいしえー、

「いやーや、親不孝者やくとう、暑さん苦りさんや、寒さいにん、川んじひやー物おー捕てい喰えー。食ていーしかきー」

んでいち、あんしし、ターカンジュヤーやちやー、田うてい、冬ん夏ん、あんし暮らちよーんでいぬ話。うんな話やな、大体や似ちよーん。

と言われて、倉で生活しているというわけね。つまり、言うなれば、人間が作ってある作物、積んである物から落ちて散らかっているのを食べて暮らしなさいという意味だろうね。楽にしなさいって。

また、翡翠というのは、ターカンジュヤーというのは、「あんたは親不孝者だから、暑くて苦しいときも、寒いときにも、川でいつも食べ物も捕って喰いなさい、食べなさい」

と言われて、そうして、ターカンジュヤーはいつも、田んぼで、冬も夏も、あんなして暮らしているという話。こんな話はもう、だいたい似ている。

平成二年七月六日 照屋京子・平敷美恵子聴取 宮城昭美翻字 T 85 A 4

19 クラー小とターカンジュヤー

古謝 島袋義堅（大正三年二月一日生）具志川市

「雀は孝行者だから、倉で暮らして、育て」と言われて、それからクラーと言ったんじゃないんですか。

その話ですすね、昔よ、クラ小とすね、ターカンジュヤーは知っていますか。あれは、普通語で何と言いますかね。ずつとききれいな鳥ですがね。翡翠は上がって行つて魚を見て捕る奴よ。その親が病気で、危篤で、「連絡が」きたもんですからね、このターカンジュヤーは、「親が死んだら」と言つて、きれいな姿して、上手に化粧もして行つたもんだから、

間に合わなかったわけ。

それから、クラーというのは、「あ、これ大変だ」と言って、着の身着のまま、フクター小着こぢやーに間に合ったわけ。それで、クラーが親おやのあれをして、やったもんだから、

「お前は孝行者だから、人の倉で育って、生活していきなさい」

って、クラーは言われているわけですよ。それは神が言いつけたわけですよ。それは分からんがね。

それからターカンジュヤーは

「お前は不孝者だから、毎日、暑さ寒さ、川に行って生活しなさい」

と言われて、川かわなーしー、チョッ、チョッ、チョッして、魚捕って食べている。

平成二年三月一二日 宜保勝聴取 宮城昭美翻字 T 63 A 3

⑳ 雀とターカンジュヤー（お母さん）

大里 永山ウシ（明治三七年七月一五日生）高原

「親がねえ、もう危篤だから、あんた方早くおいで」

って言ったって。雀にも、何と言うか、きれいな鳥がいるでしょう、昔はターカンジュヤーと言いよったねえ。ああいうふうな、鳥の話だけどね。

「お母さんがね、あなたの親が危篤だから早くきなさい」

言ったらね、

「はい」

と言ってね、雀はね、

「親の危篤だったらね、すぐ行こう。ぼろぼろ着物着ていてもねえ」

また、あの青い鳥はね、

「親が危篤だったら、私、今から糸繫いでね、きれいな着物を着けて行くからね」
 っ。

そうしたら雀はね、あの親の危篤だったら死に目に合わんといけなからね、どんなほろ着着けていてもね、タオルを首に掛けて、そのまま行つたらしいですよ、親の所に。雀は首にタオル掛けたまま。あの雀の首は白いタオルが付いているでしょう、白い毛が。あの伝説でね、雀は、

「親の危篤だったらね、きれいな着物を作る必要はないから、それよりは私早く行つて、親の死に目にあう」と言つて行つたらしいですよ、雀はよ。そつたら、

「あなたは親孝行者だからね、あなたは瓦葺きで、瓦屋の雨垂〔軒〕に巣を作つてね、そうして、エーキ〔金持ち〕の米を食べてね、成長しなさい」

と、親の遺言だつたつて。それでね、雀は今でもね、首だけは全部白いでしよう、これはそのタオルを付けてね、親の死に目にあつたからつて、そういうて聞いたことがある。

だから、青い鳥はね、着物作つて着けて行くまでは親の死に目に合わんわけさあ。だから、親の遺言はないわけさあ。親不孝と、親孝行というのがあるでしょう。雀は親孝行者だからね、

「もう、あなたは瓦葺の雨垂〔軒〕に巣を作つてね、あの瓦屋の、エーキ〔金持ち〕の米を食べて成長しなさいねえ」と親が言つたらしい。ほいでね、その雀がこの家に入つてもね、何でもないらしいよね、雀は。

ただ、あの青い鳥が入つてきたらね、浜下りしてね、厄払いうて浜下りしよつたわけよ。この青い鳥が家に入つてきたらね、厄だからいうてね、家族全部家から出てよ、家も閉めて、浜に出て浜下りしよつた、青い鳥が入つたらね。雀は入つてきてても何でもないらしいです。青い鳥は親不孝な者だからね、青い鳥が家の中に入つたら厄だからね、こつちに居たらないへんだつて。この鳥はね、「あなたはこつちは厄があるからね、こつちに居たらないへんだからね、こつちに避難しなさい」という合図であるというふうな話聞いたんですよ。この青い鳥がこつちに入つたら、こつちは厄だからね、あ

んた方は余所よすに避難しなさいって。家族で浜に出てよ、今はテントもあるけど、昔はテントもなくてっね、こうくって、せんとうばりみたようにして、あそこの浜でね、三日ぐらい向こうで寝泊まりしよったんですよね。浜でもご飯は炊かれるんですからね。

注 ① 浜下り・・・災厄を払いのけるために海に下りて禊ぎをすることをいう。沖縄では、小鳥類が部屋に飛び込んで来て、位牌に留まったりすることを極度に忌む風習がある。

平成二年三月一日 平良真也聴取 宮城昭美翻字 T 46 B 1

㉑ カンジュヤーとクラー

高原 島袋カメ（明治四一年一〇月一九日生）高原

カンジュヤーは清ちやうら装すがいなヤーに親孝行うやこいさん。さくとう、クラーやまた、いつペー親孝行うやこいなヤーに、

「いやーや倉くらぬ下しもんじ、米物食めいぶんかりし、よー」

んち、カンジュヤーや、

「いやーや川かわんじうてい育すだていよー」

ち、あんしるカーラコッコイや付つきらったんでい。アタビーが鳴なくだろう、「カーラコッコイ、カーラコッコイ」して。こんなやつたつて。カンジュヤー親孝行うやこいあらん、さんたんでい。あんすくとう、

「川かわんじ、いやーや住すまりよー」

んでい。だー、川かわんじ住すまてい、あんさーに、うぬか

翡翠は、いつも着飾ちやくしやくつてばかりいて親孝行うやこいはしない。

そして、雀はまた、とつても親孝行うやこいだったから、

「あんたは倉くらの下したで、米粒めいりゅうを食べて暮くらしなさいね」

と言いわれたが、翡翠は

「あんたは川かわにいて育すだちなさいよ」

と言いわれて、それでカーラコッコイと名付なられたつて。

蛙かは「カーラコッコイ、カーラコッコイ」して鳴なくだろ

う。こんなだつたつて。翡翠は親孝行うやこいではない、しなか

つたつて。それで、

「川かわで、あんたは住すみなさいよ」

つて。それで、翡翠は川かわで住すんで、また雀は

ンジュヤーや川んじ住までい、またクラヤー、

「倉ぬ下んじ、いやーや、米物食みよー」

んち、親孝行しえーんち、あんしやたんでいる話。

カンジュヤーはね、清ら装いーなてい、親孝行はんたんでいー。あんさくとう、

「いやーや、クラヤーや倉ぬ下んじ居てい、米物食でい、

親孝行しえーん」

でいち。また、カンジュヤーや、親孝行さんくとう、

川んかい住まーたんでい。さくとう、うりから「カー

ラコッコイ、カーラコッコイ」すしえー、うぬたみんで

い。あぬカーラコッコイんち鳴ちゆしがうしえー、あり

やさ。

カンジュヤーは、いっぺーきれいさー。クラヤーは小さ

い鳥だから家にも入るさー。だから、あれは親孝行そー

くとう、

「いやーや倉ぬ下んじ、米物食でい、親孝行しえー」

んち、功もーきはってーるばー。

「あんたは、倉の下で米粒を食べなさいよう」

と言われたって、親孝行したから。そんなだつたてい
う話。

翡翠はね、いつも着飾る者だったので親孝行はしな
つたつて。それで、

「雀は親孝行したから、倉の下に居て、米粒を食べな
さい」

つて。

また、翡翠は親孝行しないから、川に住んだつて。そ
れで、そのときから「カーラコッコイ、カーラコッコ

イ」と言うのは、そのためつて。あのカーラコッコイと

いつて鳴くのがいるでしょう、あれさあ。

翡翠は、とつてもきれいさあ。雀は小さい鳥だから家

にも入るさあ。あれは親孝行しているから、

「あんたは倉の下で米粒を食べなさい」

と親孝行しているからといつて、褒美をもらっているわ

け。

平成二年三月一日 山城綾子聴取 宮城昭美翻字 T44A7

22 クラーとカンジュヤー

あのね、クラーの親が病氣したからね、カンジュヤーとクラーと二人呼んだから、クラーは急いで来て、カンジュヤーは、

「私ねー清ら着物お着ちからる、親ぬ面会しーが行ちゆる」

んり言ちやくとう、カンジュヤーが行ちゆんとうーねー親は亡くなつて。そうして、クラーは親ぬ孝したといつてね、

「米倉から、あんたは米を食べなさい」

といつて、親に遺言されて、カンジュヤーというものはね、

「川の端の魚小、雨に濡りてい、あんたは親ぬ孝しないから、あんたは悪い所から歩きなさい」

と言つてね、こんなにされたという話だけれど。

高原 鳥袋ヨシ（明治四四年三月一〇日生）高原

あのね、雀の親が病氣したからね、翡翠と雀と二人呼んだから、雀は急いで来て、翡翠は、

「私は、きれいな着物を着けてから親の面会しに行く」といったので、翡翠が行くまでには親は亡くなった。そうして、雀は親の孝行をしたといつてね、

「米倉から、あんたは米を食べなさい」

と親に遺言された。翡翠は、

「川端の魚などを雨に濡れて（捕つて暮らしなさいね）」

あんたは親孝行はしないから、あんたは悪い所から歩きなさい」

と言われてね、こんなふうになつてしまったという話だけれど。

平成二年三月一日 山城綾子聴取 宮城昭美翻字 T 44 A 8

23 クラーとカンジュヤー

これはね、聞いていると思いますが、親たちからいつも、この話聞かされよったんですよ、両親から。

クラーや、

「親ぬ病氣やくとう来」

んち連絡ぬんじやくとう、連絡ぬ子ぬめんかいんじやくとう、クラーや、

「親ぬ病氣やれ」

でいやーに、昔えー着物作って着けよったから、クラーや緯うちえーる布、しぐ、うぬまま引つかきてい、糸ぬまま引つかきてい、親ぬ面会かい行じやくとう、親あ元氣やたんでい。あんし、病氣しな一だ亡さん。

また、カンジュヤーや、親ぬ病氣んさくとう、

「私ねー織てる布おしこーてーん布おー、作やーに着ちからどう行ちゆる」

んちさくとう、カンジュヤーや、しぐ、グワラ、グワラ、布おー、機織りで布お織つてい、縫てい着ちちゆるえーかー、親あ、な一、けー亡そーたんでい。あんさくとう、親ぬ遺言ぬ、クラーんかいや、

「いやーや、親孝行者やくとう、米倉うてい、米、エー

比屋根 城間文字（大正七年一月七日生）具志川市

この話は聞いていると思いますがね。親たちからいつも、この話を聞かされよったんですよ、両親から。

雀は、

「親が病氣だから来なさい」

といって連絡が子どもの所に来たから、雀は、

「親が病氣だったら」

と言って、昔は自分で着物を作って着けていたから、雀は緯（よこ糸）を置いてある布を、すぐ、そのまま引つかけて、糸のまま引つかけて、親の面会に行つたから、親は元氣だつた。まだ、病氣で亡くなつていなかつた。

また、翡翠は、親が病氣と聞いて、

「私は、織っている布は、準備してある布は作って着けてから行く」

と言って、翡翠は、すぐ、ガラ、ガラと機織りで布を織つて、着物を縫つて着て来るまでには、親はもう亡くなつていた。それで、親の遺言で、雀には、

「あなたは親孝行者だから、金持ちの米倉の下で島米飯を食べて、あなたは大きくなりなさいよ」

キん人ぬ米倉ぬ下うとーてい、島米飯喰でい、いやーやふどういーりよー」

んち、親からぬ遺言が。

また、カンジュヤーんかいや、

「いやーや親不孝な者やくとう、海うとーてい、海クジーンクエーし、いやーや食みよー」

んでいち、親譲りの言葉があつたから、あんなにして、海の浜辺りで、上等の着物着けて、あれしているでしよう。親譲りの言葉があるつて。親孝行すしえー、クラーや親孝行、あまー（カンジュヤーは）親不孝んち。あんさーに親譲りぬ言葉ぬ残とーるばーよー。あんさーに、あんぐとうし、浜なーでいー海クジーンクエー。今はそうでないでしよう、昔は海あつちやーやウミクジーンクエーつて言よつた。土地もなにもかもない祖先が、子どもだちが、海クジーンクエーでい言たるばーてー昔えー。あんさぐとう、カンジュヤーんかい、

「いやー、海クジーンクエーし食みよー」

んでいやーに、あんし浜なーでいー、清ら装いし、カンジュヤーや浜なーでいー、海なーでいー歩つちよーるばー。これは、親の言葉が、遺言があつたつて。そしてあの暮らししているつて。いつも親から聞かされよつた。

といつて、親からの遺言があつた。

また、翡翠には、

「あんたは親不孝者だから、海で、漁をして食べなさい」

といつて、親の遺言の言葉があつたから、あんなふうにして、海の浜辺で上等の着物を着けているでしよう。親譲りの言葉があるつて。雀は親孝行、翡翠は親不孝つて、それで、親の遺言の言葉が残っているわけよ。それで、あのように浜辺で餌をさがして食べている。今はそうでないが、昔は漁師には海クジーンクエー（海ほじくり食い）と言いよつた。畑のない人たちや、子どもたちに、海クジーンクエーと言いよつたわけ、昔は。それで、翡翠に、

「あんたは、海で餌をさがして食べなさいよ」

と言われて、それで翡翠はきれいな着物を着て海辺から歩いていくわけ。これは、親の遺言の言葉があつたつて。そしてあのような暮らしをしているつて。いつも親から聞かされよつた。昔は親孝行、いつも親孝行と言いよつたもんだから、今と反対に。今はそうでないが。

昔は親孝行、いつも親孝行と言ったもんだから、今と
 反対に。今はそうでないが。

注 ①海クジリングゲー・・・直訳すれば、「海ほじくり食い」だが、ここでは、海で餌を捕って生活することを意味している。

平成二年三月一三日 上門千賀子聴取 宮城昭美翻字 T 68 A 1

24 クラーとカンジュヤー

越来 仲宗根初子（明治三十九年一月二九日生）越来

何というかねえ、クラーは、着けるのは汚いのを着けているけどね、人間から見たら悪い着物さあ。また、あのカンジュヤー「翡翠」といつてね、きれいな服を着けているけど、あれは、青いのも、黄色いのも、赤いのも、ちゃんときれいになっているから、あれカンジュヤーというわけさ。またクラー「雀」というのは、親孝行ではあるけど、見たらあまり毛は上等でないさ。だ、これ沖縄口で言ったら、「クラーはフクター着ちよーていん（雀はボロを着ていても）、親孝行、カンジュヤーは、きれいな着物着けていても親不孝」と言われているさ。

これはね、なんでこんな言われているかと言ったら、カンジュヤーというのはね、

「水汲でい来ーわ。お水を汲んでおいで」

と言ったらね、潮、海の潮汲んで担いで来るし、また、クラーはね、

「水汲でい来ーよー〔水を汲んできなさい〕」

でい言ねー、水汲でい来、親ぬ孝し、あんさーに（と言ったら、水を汲んで来て、親の孝して、そうして）、この親がね、言えば人間と例えばよ、

「いやーややー、親孝行やくとう（あんたは親孝行だから）、米ぬ上から米食べて生活していきなさい。また、あんた（カンジュヤー）は親不孝だからね、川のね、川端あつちで、寒い時でも川端に住んで、自分で魚捕って食べて生活しな

さい」

と言つてね。これは人間と例えたら、クラーは汚い服を着けても、親孝行と言われて、いつもあの稲マジン、《稲マジン》といつて米刈りてきて、こんなして、みんな「稲を積んで置いた物に」、稲マジンって言いよつたさ、昔は《これの上からいつも歩いてよ。人間が食べる御飯食べて生活する。》

また、カンジュューヤーというのは、どんな寒いときでもよ、川端から、落ちては、水の中から魚捕つて食べてね、あんなして生活するから、こんな話よく、親たちから聞いているさ。例えばさあ、お母さんがよ、何というかなあ、仕事いーちけー「言いつけ」するわけさあ、

「あんた、今日は忙しいから、お水を汲んでおいで」

といいつけたから、もう、このカンジュューヤーは悪い人だから、悪い人間だから、例えばよう、海の潮を担いで来るわけさあ。わざとってー「わざつとさ」、親に対して反抗して。親が言うのはもう真面目に聞かないわけさあ、むる「みんな」反対して。

また、このクラーは、親の手伝いもよくして、親がいうこともよく聞いて、「お水も手伝いしてちようだい」と言つたら、お水も汲んで来るし、「今日はまた、潮が入り用だから」、豆腐するとき潮使いよつたから昔は、潮は担いで来るし、こんなしてもう親孝行だから、あんたは、例えばお金持ちの、お金持ちにしか、この米倉はなかつたから、

「ウェーキん人ぬ米ぬ上から歩つち、いやーや、親孝行だから生活していきなさい（雀は親孝行だから金持ちの米倉の上から歩いて米粒を食べて、生活しなさい）」

また、このカンジュューヤーというのは、

「あんたは、親不孝者だからね、寒いときでも、もうガタガタ震えても、あんたはあの川端で生活していきなさい」と言つてね、昔の人は、そう伝えられていたつて。これはよく聞かされていました。

注 ①フクター・・・ぼろ。裂をつぎはぎして仕立てた着物。

平成二年八月二日 新垣孝幸・謝敷勝美・新垣登季子・知念美佳子・喜瀬智美聰取 香村夏子翻字 T 133 B 1

25 カンジュヤーとクラーク小（お父さん）

中央 金城初子（大正五年二月二四日生）石川市

あのね、カンジュヤー〔翡翠〕とクラーク小〔雀〕、二人あのう、膝染めるといって、着物作る膝染めるといって、遠い所に飛んで行って、半ばごろ行っているときに、また、

「あなたのお父さんはもう、病気が強くなっているから早く来なさい。あなた方二人来なさい」
 って、呼びに来ているわけ。したら、カンジュヤーという鳥はね、

「せっかくこつちまで来ているのに、私は戻らん」

と言って。クラーク小という鳥はまた、雀である。いつも、〔家の〕二階からも飛んで歩く、鳥小がいるさ。あのクラークは、戻って行かなければ、親たちどうなるか分からんから、私はじゃあ、お家行こうね」

と言うて、二人別れたわけ。別れたからカンジュヤーという鳥は、もう膝染めてきてあるから、きれいな洋服着けているわけさあ。羽よ、とてもきれいよ、青々として。

そのクラーク小という鳥は、あれは膝、この首に巻いたのが、強く見たら首に、何か印があるよ。こんな巻いた毛なっているけどね、白くしているような、あれが見えるよう。あの親孝行の鳥は染めてないから、膝首に巻いたまま。また、親不孝の鳥は、染めてきているからもう、きれいな洋服着けているわけさ。そうしたから、あれ親孝行しているから、神様がね、

「あなたはね、いつもあの食べ物がいい食べ物、もし稲刈る所に、〔稲の中にもよく来るよ、あの鳥は。稲刈るいうて、マジン作るでしょ。今、マジン作ってないかねえ。昔は、お家の周囲に、稲倉といって作りよった〕この稲倉の下、周囲から遊びなさい。また、瓦葺の家の上から歩くでしょう。あんな所から、下から歩かないであんな所から歩きなさいねえ」と言うて、神様に教えられて、あれはもう、いい所、ずっと歩いているけど、カンジュヤーという鳥は、親不孝な者だから、

「あなたはいつも、あのジャカジャカしている、水の所で暮らさない」

と言うて。それで、カンジュヤーは水のある所にお家も作って、寝泊まりしている。

「親がこれはもう、親の言うことも聞かないから、雨蛙と一緒だから、反対で言わなければ分かん」と言つて、

「地面の下で暮らしなさい」

と言うたらしい。それで、いつも湿気かかっている所から歩いていくわけ、カンジュヤーは。

「クラー小はまた、いつもいい所から、人が見え、倉の見える所から歩きなさい」

と言つて、いつもあんな所から飛んで歩く。クラーとカンジュヤーは兄弟違う。もしかしたら、兄弟だったかね。倉の下から遊ぶからクラーになったかね。このことははっきり分からんけど。

注 ① 膝・・・ 総に掛ける前の一束にした糸。膝を染色した後、総に掛ける。

平成三年五月二三日 宮城昭美・香村夏子・謝敷勝美・石川小百合・大川清子・照屋京子聴取 石川小百合翻字 T 189 A 3

26 クラーと翡翠（兄弟）

嘉間良

安次嶺ツル（大正六年一〇月八日生）北谷町

これは、赤や青してね、とつてもきれいな鳥だったけど、今頃はね、見たことないさあ。戦前はね、戦が始まる前まではいたよう、川の所に、鳥よ。あの鳥とね、クラー（雀）、あの雀よ。雀は、こっち（首）には白いのがあるさあね。

昔の伝え話だけど、雀は、あれ（翡翠）とね、本当は兄弟だったつて。で、この雀はとつても親孝行の鳥でね、また、この翡翠は、親不孝者だったつて。そうしたらね、親が死ぬときの遺言でね、

「私が死んだ後はやー、クラー小あんたは、人の家の雨垂（軒）なりー、家に入ってね、物を取って食べなさい。また、あなた（翡翠）はね、親不孝者だから、きれいな着物を着せるから、川に行つてね、ミミズを取つて暮らしなさい」つて。だから、親不孝者だからね、も、遊んで暮らしているから。遊ぶ人はやっぱしあの、昔でも今でも、上等な着物つ

けて歩き回るさあね。この伝えだと思うさ。うん、うん。

「翡翠は」親不孝者だから、あなたはね、いつもきれいなふうして、遊び回るから、あなたは、川に行つてミミズ取つて食べなさい。また、雀はね、親孝行するからね、人のお家から物を取つて食べなさい」

といつて、この伝えでね、雀はこつち「首」に袋さげられていた。親に袋を、白い袋をさげられてね、あれ「翡翠」はまた、きれいな着物を着せられたといつて、伝えあつたんですよ。うん、これだけさ。

注 ①翡翠・・カワセミ科の川辺にすむ小形の鳥。

平成二年八月二三日 新垣孝幸・有銘和江聴取 照屋京子翻字 T 148 A 1

⑦ カンジユヤーとクラー鳥小

親が今死ぬといつて、

「目つぶらんうちに早く来」

んでいちやくとう、装や大概どうやる、総掛きーたんでい、総はちやーに、親ぬミーウトウイ見じゅんち、そーぬぎてい、総、着物作る総はち行じやくとう、うぬ親ぬ言い分ぬ、

「いやーや、親ぬ孝ぬ子やくとう、ちやー倉ぬ下から米拾てい喰よー」

でいちやたんでいしが。

カンジュヤーや、カンジュヤーんでいしえーいっぺー

住吉 座間味マカト（明治四一年三月五日生）白川

親がもうすぐ死ぬからといつて、

「目つぶらんうちに早く来なさい」

と言われたから、「雀は」身なりはどうでもよいといつて、機織りの総を掛けているところだったので、その総を掛けたまま、親の死に目に間に合うようにと、慌てて、着物を作る総を掛けたまま行つたから、その親の言い分は、

「あなたは親孝行な子だから、いつも倉の下から米を拾つて食べなさいよ」

と言つたそうだが。

清ら鳥小やたしがてー、うれーまた、

「清ら装いしる親ぬミーウトウイ見じーが行ちゆる」

んちやくとうよー、

「いやーや、夏か冬か川なーでいー魚捕てい喰よー。

いやー親ぬ不孝ん子やくとう」

んでいち、うぬ話やたんでい。

あんさーに、クラー鳥小や、かーげー悪つさしが、

カンジュヤーでいしえー、清らさしえーやー。うぬ、意味えーやん。

翡翠は、翡翠というのは、とつても美しい鳥だったが

ね、これはまた、

「きれいに装ってから親の死に目に会いに行く」

と言ったからね、

「あんたは、夏も冬も川端で魚を捕って食べなさいよ。

あんたは親不孝な子だから」

と言ったという話だったって。

それで、雀という鳥は姿は悪いが、翡翠という鳥は美

しいさあね。その意味あいからきているんだって。

平成二年八月二日 石川小百合・仲里香・謝敷勝美聴取 宮城昭美翻字 T157B1

28 クラーとカンジュヤー（お母さん）

住吉 德里 静（明治四四年三月五日生）安慶田

クラー（雀）はよ、親の亡くなる前によ、お母さんが病気だからと言って呼んだけどよ、自分の着物を作るといってや
っているけどよ、間に合わないで、親が病気、もう死にそうになったからよ、昔、機織るのに縋（か）というものがあって、そ
れを肩に掛けて行ったらよ、この人は親の死に目に間に合っているわけさあねえ。しているけど、カンジュヤー（翡
翠）はよ、カンジュヤーは親が亡くなるといつてもよ、自分の機あるさあねえ、立派な織物作ってから着けて行くとい
つてよ、その間には親は亡くなったからよ、亡くなる時の遺言でよ、親の遺言で、（雀は）

「あなたは親に孝してよ、こんな親の亡くなるのも見ているから、倉の側なーでいー（倉の側から）、米を拾って食べ
て生きなさいねえ」

カンジューヤーは親不孝なっているからねえ、

「川かわからよ、自分で餌捕って食べて歩きなさい」

と言って遺言しているわけさあねえ。

だけど、クラーは親孝行で、親のあれに間に合わないから、昔の機織る時のむすを掛けてからに行って、親の亡くなるのは見ているさあねえ。だからよう、あれは倉の前、側から歩いて、あれは首に何かこんなにしてはいているような形しているさあねえ、少し白くしているさあ。あれはむすと言うんだ。

カンジューヤーは見えないからよ、親不孝なっているからよ、

「いやー、川かわなーでいー、うり食かでい、捕とって食かでいきいきい（あんたは、川端から餌を捕って食べていきなさい）」

でいち、あれー遺言ゆいごん付つきらつとーん（という遺言だったって）。だからクラーは親孝行、カンジューヤーは親不孝という、昔の人の話は。それは分からないけどよ、これは、昔の年寄りたちから話聞いたんだよ。

平成二年八月二日 山城綾子・大川清子聴取 宮城昭美翻字 T156 B4

29 クラーとカンジューヤー

クラーはクラー、「カンジューヤーやカンジューヤー」わかつているよ。あぬよー、親おやがいつべー病やどーたんでいー。親おやが病やどーたくとう、カンジューヤーや、海ぬ物魚うみぬものいしんぬーん海から捕とってい喰くいしえーやー。カンジューヤーや海鳥うみとりやんどー。

クラーやよ、親おやぬ病やだくとう、うれーいつべーしぐ、

安慶田 神里マカト（明治四五年八月一日生）胡屋

雀は雀、〔翡翠は翡翠〕つて別ですよ。翡翠かみせきはね、海うみの物、魚なんか海から捕とって食べるさあね。翡翠は海鳥だからね。

雀はね、親が病んだから、とっても急いで、会いに行つて。着物も、汚よごい着物きものを着て、親孝行するために、親が亡くなりそうなきに行つて、親に会うことができた

やすく、家ぬ倉、家ぬ内んかい入つち来ゆるしえーや。
うんぐとうーし、喰いたんでい。

くぬクラーとうカンジューヤーや兄弟やあらんさに。

似らんしえーや。似らんしが、兄弟るやたがやー、

ぬーがやら、分からんしが。うれー、分からんさー。

平成二年二月十五日

崎山用彰・諸喜田綾子・宮城昭美聴取 照屋京子翻字 T 180 A 1

30 カンジューヤーとクラー

安慶田

仲村渠シズ（明治四二年七月一三日生）照屋

カンジューヤー〔翡翠〕はね、親不孝であつたつて。昔、親が病氣して、今日にでも亡くなるいう時に、着物ないから、作つてから行くまでには、お母さんはもう亡くなつたつて。

そして、あのクラー〔雀〕いうのはね、〔着物を〕作らんで、縋を首に掛けて行つたから、こつち〔首〕に白いのがあるつて。それで、

「あんたはね、親孝行だから、倉の米食べなさい」

言われたつて。また、カンジューヤーは、

「親不孝だから、川の魚捕つて食べなさい」

言われたつて。こんな話よ。

平成二年八月二〇日

照屋京子・有銘和江・岸本かおり聴取 宮城昭美翻字 T 119 A 2

ありしーが行じやーに。着物ん、やな着物小着やーに、親ぬ孝しーがんち行じやーに、親ぬけー亡しがたーそーんでいち行じやーなかい、うりそーるばーてー。あんすくとう、またうぬ、カンジュヤーやまたよ、清ら装いしな、すぐ、いっぺー清ら装いさーなかい、親ぬ端かい行じ、さくとうや、親あけー亡ち、ありさくとう、

「ぬーがいやーや、今でいーから来る」
んちやくとう、

「な、私ねーなー着物ん着ち、来んどー」

んちやくとうてー、

「ぬーが、親ぬ亡しーにん、必じ清ら装いし来る」

んち、叱ったんでい。あんさーなかい、ちやー、うり、うりやるばーてー。

あんさーになー、クラーやまた、あんさーにすぐ、

「いやーややー、いやーや、何処んかいん行かんぐとう、家ぬ上から物ん取てい食みよー」

んでいち、親なかい言やってい。またうぬカンジューヤーや、

「いやーや、親ぬ不孝者やくとうやー、海んかい行じ魚捕てい喰わ」

でいたんでい。あんさーい、うんにんからな、クラー

わけさ。

そしたら、またこの翡翠はまたね、きれいに装って、もう、とつても着飾ってから、親のところに行つたからね、親はもう亡くなつていていた。それで、

「なんでお前は、今ごろから来るか」

と言つたら、

「いや、私はもう着物を着替えてから来たんだよ」

と言つたからね、

「なんで、親が亡くなる時にも、必ず、きれいに装つて来るか」

と言つて叱られたつて。それで、いつもこうなんだつて。

そして、雀はまた、すぐ、

「お前はね、お前は何処にも行かないで、家の上から物を取つて食べなさいよ」

と、親に言われてさ。親に言われて。

また、この翡翠は、

「お前は、親不孝者だからね、海に行つて、魚を捕つて食べなさい」

と言われたつて。それで、そのときからも、雀は、すぐ、家の倉、家の中に入つて来るさあね。こんなして、食べよつたつて。

やすく、家ぬ倉、家ぬ内んかい入つち来ゆるしえーや。
うんぐとーし、喰いたんでい。

くぬクラーとうカンジューヤーや兄弟やあらんさに。

似らんしえーや。似らんしが、兄弟るやたがやー、

ぬーがやら、分からんしが。うれー、分からんさー。

平成二年二月二五日

崎山用彰・諸喜田綾子・宮城昭美聴取

照屋京子翻字

T 180 A 1

30 カンジューヤーとクラー

安慶田

仲村渠シズ（明治四二年七月一三日生）照屋

カンジューヤー〔翡翠〕はね、親不孝であつたつて。昔、親が病氣して、今日にでも亡くなるいう時に、着物ないから、作つてから行くまでには、お母さんはもう亡くなつたつて。

そして、あのクラー〔雀〕いうのはね、〔着物を〕作らんで、総を首に掛けて行つたから、こつち〔首〕に白いのがあるつて。それで、

「あんたはね、親孝行だから、倉の米食べなさい」

言われたつて。また、カンジューヤーは、

「親不孝だから、川の魚捕つて食べなさい」

言われたつて。こんな話よ。

平成二年八月二〇日

照屋京子・有銘和江・岸本かおり聴取

宮城昭美翻字

T 119 A 2

この雀と翡翠は兄弟ではないでしょう。似ないさあね。
似ないけど、兄弟だったのか、何なのか分からないが。
これは、分からないなあ。

③ クラー小とカンジュヤー（お母さん）

室川 佐久田千代（大正七年八月二五日生）倉敷

クラー小〔雀〕はね、あれはあんまりきれくないさあね。また、あのカンジュヤーは翡翠ひすいというさあね。翡翠はきれいさあねえ。あれはハイカラーで、カーギー〔美人〕と言うより、清らちやう装まい〔きれいな格好〕やるわけさあ。あれはいつも、きれいな着物を着ているさ。だから、

「お母さんが病気だから、すぐ来てくれ」

と言つてもよ、来なかつたつて。そうつて、あのクラー小はね、一番来てなあ、こんなしてお母さんのお手伝いもなにもしてあげてから、お母さん亡くなつたけどね。死ぬ前に遺言いごんするさあね。だからね、その話から、クラー小に、

「あんたは親孝行だからね、エーキん人の、お金沢山ある家は瓦屋根造つてね、倉にいっぱい米も積んでね、ある中はやっぱし散れるでしょう。取つたり入れたりする時、お米が沢山散れるでしょう、これを拾つて食べなさいね」

つて。そつてね、カンジュヤーは遅く来ているわけさあね。だからあれにはね、

「あんたもう親不孝だからね、いつもきれいな着物着けているから、餌はね、自分であつちこつち、雨の降る日も、風の日も川の所から拾つて食べていきなさいね」

つて、親の遺言いごんで、あれはずつと川端から飛んでいるつて。クラー小はいつも家の周辺から飛ぶさあねえ。

平成二年二月一四日 上門千賀子・石川小百合・新垣孝幸聴取 宮城昭美翻字 T 172 A 3

32 クラーとカンジューヤー（兄弟）

中の町 比嘉貞信（昭和二年四月二十九日生）上地

クラーの話というのは聞いたことある。本にも出てはいるよね、これね。僕らはこう聞いたわけよ。上地での話よ。クラーというのは雀だよな。カンジューヤーというのは翡翠なんだよな、今のね。クラーとカンジューヤーの話。どういうことかというのと、昔々、クラーとカンジューヤーは兄弟だったって。方言でやろうか。

昔、クラーとうカンジューヤーや兄弟やたんでい。あんし、互に、いっぺー、親ぬ前から離れてい別んかい暮らちよーたんでい。親が年取いみそーやーに、病氣しみそーち、

「なー今日、明日、けー亡しがたーなとーくとう、来とーうらし」

と。来てくれと、いえいがあつたつて。いえいというのは連絡ね。あんされー、うぬクラーや、

「アキサミヨー、でーじなとーん」

でい、すぐ、仕事んうつちやんぎやーなかい、すぐ走えーし戻たんでい。あんさぐとう、親ぬけー亡さんまーる間に合てい、ミーウトウイする前うてい、親会てい、あんし、生ち別りし、其処うとーてい、立派孝行ん

クラーの話というのは聞いたことある。これは本にも出ているよね。僕らはこう聞いたわけよ。上地での話よ。クラーというのは雀だよな。カンジューヤーというのは、今の翡翠だよな。クラーとカンジューヤーの話は、どうい話かというのと、昔々、クラーとカンジューヤーは兄弟だったつてよ。方言で話そうね。

昔、雀と翡翠は兄弟だったつて。そして、互いに、親の所から離れて別の所で暮らしていたつて。親が年とられて、病氣なさつて、

「もう今日、明日にも亡くなりそうになつていから、来てくれ」

つて、来てくれという連絡があつたつて。そうしたから、この雀は、

「あれまあもう、たいへんだ」

と言つて、すぐ、仕事もうつちやつて、すぐに走つて戻つたつて。それで、親が亡くなる前に間に合つて、臨終の前に親に会つて、そうして、生き別れをして、そこでちゃんと孝行もしたが。

翡翠は、

そーしが。

カンジューヤーや、

「なー、いかな親子やたんでーまん、家庭ぬ分かれーからー、いひえーありやるんでいヤーに、あんしえー、あんやらーなー、いひえー、しぐんちえー行かんむん」

ち、家かい行ちヤーに、しこーいむこーい、清ら装いぐわーし、着物替たいぬーさいし、あんし行じやんでい。

うんにんとーねー、親ぬ死に目んかい会らん、間に合らんたんでい。親が、

「クラーや孝行ん子、いやーや孝行やくとーやー、今からー、雨風んけー濡りらんぐとー、家ぬ側なーしー、米倉ぬ落ていくくぶー食まーに、暮らち行きよー」

でい。あんさぐとー、クラーや今ちきてい、家ぬ周囲、軒下んかい暮らち。あんさーに、人、人間ぬ食むる物、あやかーてい食でいんじ、いっペー、安楽に暮らちよーん。

うぬカンジューヤーや、親不孝者なてい、親ぬ死に目んかい会いーさん。親不孝なたるたみなない、雨降り風降い、雨んかい濡でいてい、川ぬ側なーしー、魚小捕つてい暮らしんじ、あわりそーん。あんすくとーそーい

「もう、いくら親子といつても、家を出たら、少しはなんだよ。と言つて、親が病氣といつても、これはすぐにといつては行けないから」

と言つて、家に行つて、いろいろ準備して、きれいな格好して、着物を着替えたりなんかしてから行つたつて。そうするうちには、親の死に目に会えないで、間に合わなかつたつて。

そうしたら、親が、

「雀は親孝行な子、あんたは孝行だからね、今からは、雨風に濡れないように、家の側から、米倉から落ちた米粒を食べて、暮らして行きなさいよう」

と言つた。それで、雀は今でも、家の周りの軒下で暮らして、そうして、人間が食べる物をあやかーて食べていって、とつても安楽に暮らしている。

翡翠は親不孝者で、親の死に目にも会えない。親不孝者だったために、雨降り風吹きにも雨に濡れて川で魚を捕つて暮らして、苦勞している。だから、いい子にしなさいよ。これが、雀と翡翠の、いわゆる教育の民話でね、僕はすばらしいもんだと思つている。

りよ。これがね、クラーとカンジュヤーのね、いわゆる教育の民話でね、僕はすばらしいもんだと思ってる。

平成二年八月二三日 宜保勝・宮平聴取 宮城昭美翻字 T 165 A 2

33 クラー小とカーラカンジュヤー

中の町 石川富子（大正一一年一月三〇日生）読谷村

雀と翡翠は話があるでしょう。あれはね、幸いに、親にもよく聞かされているし、また、学校でもね、小学校のときに劇をやったからね、学芸会に。よく覚えてるのよね、これは。うん。だからあれが、まあ、教訓みたいだね、親がよく、「親不孝したらね、こういうことになるんだよう」ちって言われてね。

私たちが劇でやったのは、雀が集ってね、子どもたちより早く起きて竹藪でチュン、チュン、チュンして遊んでいるときに、

「〔雀のお母さんが〕病気で亡くなったから、すぐ帰って来い」

ちって、それで、結局言うわけさあね。雀さんは、慌ててすぐそのまんま飛んで行ったわけよね。そんな着替える間がないから、すぐ出て行くんだけど。もう着の身着のまままで。

そして今度は翡翠ね、沖繩語であればカーラカンジュヤーって言うのよ。もう、今だにきれいでしょ。このカーラカンジュヤーは、

「さあ、支度しよう」

言うて、きれいに着替えて、それでお洒落していく間に、もう親の送りも済んでいたっていうわけさあ。それで、そこに神様が出てきてね、

「二人とも、よく来た」

ちつて。そこに並ならばして。それで、

「その来た心がけに、褒美をあげよう」

ちつて、二人に言うわけさあね。そうしたら、

「ありがとうございます」

して、カーラカンジュヤーはすぐ飛び出してきて、手て出すわけさあね。そうしたら、神様に手叩かれてね。

「雀のチュン、チュン聞きなさい。親の不幸にすぐ駆けつけたのはね、とつてもいい心掛けだつて。だからね、あんまりあげるものは上等ではないけどね、その気持ちだけはね、とつても見上げたものだから、これを上げる」

ちつて、それで、地味な着物を上げるわけさあね。したら、翡翠には、

「あんたはもう、着るもんからして派手でね、親不孝した上に、親が死んだいうても、すぐは来てくれないし、こんなしてお洒落しているから、あんたには派手な着物あげる」

したら、

「ありがとうございます」

つて。二人をまた、そこに並ならばしてね、雀には、

「あんたは親孝行だから、一生困らんようにね、倉の軒端のきばでね、巢を作つて、それで、お米なんか食べてね、一生楽に暮らしなさい」

ちつて。それで、翡翠には、

「あんたは親に不孝する上にね、何も知らないから、あの川端居かわばたぐいとてね、餌をあさつて、一生苦勞して暮らしなさい」ちつて、それで今だにほら、もう色もきれいだしね。だからカンジュヤーいうのは、たてがみさあね、あれのことを言うと思うよ、カーラカンジュヤーというのは。あの、クラくらー小ことカーラカンジュヤーつて。

そんな話もう何べんも聞かされたけどね、年寄りには。うん。だから親を大事にしないと、自分がそういう目に合うからね、どんなことでもね、常識外れのことしたらいかんちつてね。まだ、五つ六つぐらいのとき、この話よく聞かされた

ね。そして、学校行ってから、結局はそれを学芸会でやるようになって、「ああ、この話はよく聞いたよ」して、だからね、

「この話とはとっても大事だから、また、やることもね、みんな真面目に、一生懸命練習しなさい」
 って、先生に言われた覚えがあるんだけどねえ。この話はよく聞いている。うん、こういうのはね。だから、あんまり私も、長いことこっちにいなかったからさあ。おばあちゃんが忙しいから、たまーにしかこんな話、今みたいに電気点いているわけじゃないしねえ、夕方なったらすぐ夕飯食べて、寝るだけでしょう。だから、そんなにはもう、うちの親はまた厳しかったからねえ、夜遅くまで起きていたらバチ、バチだから。(笑い)

平成二年八月三日 通事美香・宮里英樹聴取 大川清子翻字 T164A1

34 クラーとカンジュヤー

中の町 町田宗勇（大正六年七月二五日生）森根

クラーというのは雀ね、カンジュヤーというのは翡翠^{かわせみ}。あんな話もあったんだけどね。でも、ちょっとだけしか覚えてない。よう、教訓は、人間はね、カンジュヤーというのは、翡翠は、非常にきれいさあね。うん、模様がきれいさあね。

それからまた、雀は、もう言えば着物に對したらぼろぼろでしょう。しかし、雀は、米を食べるね米粒食べるね。それから、カンジュヤーは、魚捕って喰うでしょ。それで、親不孝か、孝行か、それは分からないけどね、その親がもう亡くなるまで、早く来てくれと言ったらね、雀の方は、

「親^{おや}ぬミーウトウイすていから、早く^い行きわるやさにか^い家^いかい〔親が亡くなるんだしたら、早く行かないといけないんじゃないか家に〕」

んでいやーなかい（と言って）、もう、機織っておったがね、機織っておったが、親の亡くなるっていうて、これは早く行ったわけさあね。これ〔布〕作らんで。あんとう、ぼろぼろなっているさあね。〔それでぼろを着ているさあねえ〕

だが、翡翠はね、同じ機織っていたが、

「ああ、うれー、とうじみていからどう、うり着ちり行ちゆるでいやーに。（いや、この着物を織って仕上げから、これを着けて行く）。それ着てしか行けない」

と言って、それで、あれを織り上げてね、もう、着物を作って着て行ったら、亡くなったって。もう、その前に亡くなってしまう。それで、その遺言がね、遺言が、雀には、

「君はね、もう親孝行したからね、いつも倉の下に居てね、倉の下に居て、お米を食べなさい」

と言われて、それから、カンジュヤーにはね、翡翠にはね、

「君はもう、親のあれ〔臨終〕も見ないからね、君は、川端なーでいー歩てもー、魚捕って喰わいー〔川端で暮らしてもう、魚を捕って喰いなさいね〕」

んでい〔って〕。こういう話もありました。これはもう親不孝者になっておるわけさ。親のもう最期のその、死ぬ間際のあれを、死ぬときには、最期のお水といってあげるさあな。それができなかつたと、カンジューは。また、あの雀はやつたって。

平成二年八月三日 加島三史・平田明子聴取 大川清子翻字 T 162 A 1

35 雀ときれいな鳥

中の町 新崎カマド（明治四二年三年一五日生）北谷町

雀の話ねえ。また、もう一つの鳥は、川の上で遊んでいるわけさあ。きれいな鳥は、青くしてとってもきれいな鳥は、青くしてとってもきれいな鳥は、青くしたり、赤くしたり、きれいな鳥がいるわけ。こっちの雀はもう、きれくはないけど、いつもお家の前で遊んでいるでしょう。だから〔この雀が〕、

「親が今、死にそうになっているけど、お前は行かないかあ」

と言って、このきれいな鳥に言うたわけ。そうしたら、

「うちはまだ着物を仕立てているから、この着物を仕立ててから私は行きます」

と言って。また、今度はこの雀は、

「私は着物は着けなくともいい。このままでいいから、親の死ぬのを見るのが当たり前」

と言って行ったから、親の遺言が、

「お前は屋根の下の倉でお米を拾^{ひろ}って食べなさい。また、あのきれいな鳥は、川からずんで〔自分で〕魚を取って食べなさい」

と言って遺言^{いぐん}だそうだ。これは、うちのお父さんから聞いたさ。

平成二年八月三日 粟国実・久保田聡子聴取 宮城昭美翻字 T 160 A 5

36 クラーとカンジュヤー（お母さん）

園田 喜友名 春（大正八年九月五日生）嘉良川

クラーやよ、うまんかい印^{しるし}小ぬあしえーやー。白いのがあるさあ。

クラーんかいや雀りる言んな。あれーあぬ、親^{うや}ぬ印^{しるし}んでい、白^{しろ}小^こや。〔雀はね、ここに小さい印があるでしょう。白

いがあるさあ。クラーには雀と言うのか。あれは親〔孝行〕の印^{しるし}って。〔雀の首のところにある〕白^{しろ}いものは〕

カンジュヤーや川から、いつも川の中から歩^あちゅしえーやー。ありんよ、〔翡翠はいつも川の中から歩くさあね。あれもね〕

「今、お母さんが、死ぬから、もう、重体だから早く帰っておいで」

んち言ちやくとうてー〔と云ったからね〕、クラーは、カンジュヤーと畑して、嫁さんになって外に出ているがね。だ、

クラーは、そのまま、蓑^{かぶ}着^ぎけまま、自分の自宅^{かみ}に行^いって

「お母さんの今死ぬところ見る」

言うて走って行くけど、カンジュヤーは自分の家で、もう、きれいな着物着けて行くって、そつてもう遅くなっているでしょ。だからあの、クラーは、その養着けたまま行つてからに、

「あんたはね、偉いから、親孝行だから、いつも人の米作る家で、米を拾つて食べて」
遅く来たカンジュヤーは、

「あんたはもう親の不孝だから、いつももう、川の中で自分で何かも拾つて食べて」

言うて、あれは親の不孝だから、一日あんなして、川の中で、寒いときもあつちに行き、こつちに来して。クラーはもう、寒い時にも人の家うちに巢も作つて、ぬくぬくして、人が作った米を拾つて食べるって。あれは親の孝行って、この白い印は付いているって。こつちの羽は養つて。畑からすぐ急いで来たから。養着けまま親の所に行つたから、あれは親の孝行って。それだけしか分からない

平成二年八月一九日 通事美香・萩堂剛聰取 石川小百合翻字 T110A6

37 カンジュヤーとクラー（姉妹）

諸見里 宮島真良（大正四年一月九日生）諸見里

カンジュヤー（翡翠）というのは川辺におつたきれいな鳥だったよ。あれとよ、クラー（雀）はずうつと昔は姉妹きょうだいだったらしいですよ。ただ、おじー、おばーたちの話聞いたけどね。

ある親がよ、お母さんか、父さんかは分からんけどよ、病気といった時に姉妹二人とも呼んだらしいですよ。呼んだらね、このクラーというのはすぐそのまま走つて行つて、親の看護をやつてね、親の孝行やつたらしいですよ。だけど、このカンジュヤーというのはね、まあ、今でいう化粧したりしてね、遅れて来たらしいよ。その間には親が亡くなつてしまつて。親の遺言と言いますかねえ、

「あなたはもう、いい子どもだから」

と言つて。クララーは今、あまりきれいな鳥じゃないでしょう、雀は。でも、

「あなたはもう、人間の米倉辺りから歩いておいしいの食べなさい」

といういわれがあつてこうなつたらしいですよ。

ところが、あのカンジュヤーというのはね、

「あなたは立派な着物着けてや、カーラバタ〔川端〕さあ、川辺によサビサビー〔寒々〕としてあつちで暮らしなさい」という、こんな話も聞いたことあるねえ。うちが子どもの時だからねえ。誰からといつて覚えてないけどよ、ずっと昔、うちが若いときに、年寄りたちがこんな話するのを聞いた。クララーとカンジュヤーというのは昔は姉妹きょうだいやつたらしいですよ。それが、一人は親孝行しないで、一人はそのまま走つていつて親孝行したらしいですよ。その関係でクララーはあんまりきれいな鳥でないさあね。それでこれは人間の所に行つて米倉歩いてお米食べて暮らしなさいと言われてこんななつているつて。これは作り話もくしほなしだよ。

平成二年八月一九日 平識美恵子・新城真恵・津嘉山朝昭・平良美夏聴取 香村夏子翻字 T105A5

38 クララーとカンジュヤー

山里 伊佐安弘（明治四一年六月八日生）白川

クララー〔雀〕とカンジュヤー〔翡翠〕との話。カンジュヤーというのは、川原で歩いている鳥ですね。これは、まあ、言えは、

「親の方が病気だから、来い」

と言われても、クララーくわら小は、

「白い総かまをはいてでも、親のことはやらないといかない」

と言って、真先に、親孝行しに行つたらしいんだが。あの翡翠の方はね、非常に着飾つて行かなければいけないということとで、着飾つて、青、青、白というふうな模様を付けた着物を着けて、親のミールトウイ〔臨終〕に行つたらしいんだ。それから、

「いやーや、親ぬ孝ぬ者やくとう、とうーち倉ぬ梯上てい、米食でい育きよー〔お前は親孝行者だから、いつも倉の梯上つて、米を食べて育ちなさい〕」。

翡翠の方は、

「いやーや、親不孝な者やくとう、とうーち、あぬカークムイきじやーち食みよー〔お前は親不孝な者だから、川をあさつて餌を取つて食べなさいよ〕」

と言われたと。昔話。それで、あのカーラカンジュヤー〔翡翠〕は川の中からしょつちゅう歩いてるんだ。で、クラー小は、家ぬ倉なーりー〔雀は家の倉の辺りから〕飛んで歩いてる。それに、クラー小は、染めてない縷をはいたから、首の周りだけは白くしてる。

平成二年八月二一日 平識美恵子・津嘉山朝昭聴取 石川小百合翻字 T 137 A 6

39 雀は嘉利

池原 島袋シズ（明治四一年一二月二〇日生）具志川市

伝えて私たちは聞いていたけど、年寄りからは。クラー〔雀〕がたくさん集まったら、やっぱし、その家庭がたいへん幸福になるということをおっしゃっていたもんだから、それが、はつきり、うちも分らないけど、クラーがいたら、みんな喜んでいたんですよ。また、食べ物があるからね、お米なんか作つて、これを食べるためにたくさん集まつて来たわけ。今は、お米なんか作らないでしょう。だから、あんまりないさあね、クラーというのも。クラーというのは、たいへんカリー〔縁起がいい〕な鳥で、雀であるということであつたんですよ、昔は。

昭和五五年五月一八日 池村弘子・玉城弘美・仲宗根フキエ聴取 山内智子翻字 T 4 A 1

11 雨蛙不孝

① 雨蛙（カーク、カーク）

雨蛙、雨蛙分かる。雨降がたないねー、カーク、カークちゅって鳴くの、あれ雨蛙。え、あれはまた親の言うこと全く聞かない。な、横着なもんだで。

「今日や海んじ、潮汲でい来よー」

「今日や海んじ、潮汲でい来よー」

「水えー無んくとう、雨水汲でい来よー」

「親不孝にそーてーるふーじやしが、うりが親ぬな一年とついでい亡しがたななくとう、「くりんかい、やるぐうとう言ねー、ちやーがすらー分からんくとう」んでい言やーに、親あ

「私が死にーねー川端んじ送りよー」

「あんしーねー、あんしーねー、川端あらん所んじ送いくとうんちやてーるばーてー親のー」。

「あんやしが親あ、あんしーえー考げーらん、くりがー私言しえー反対にどう聞ちゅくとう、川端んじ送りよーんでい言りわるるんでい言やーに、

登川 平田盛永（明治四一年六月六日生）登川

雨蛙、雨蛙って分かる。雨が降りそうになるとカークカークって鳴いているもの。あれを雨蛙というんだが。あの雨蛙はまた、親の言うことは全く聞かない横着者でね、親が、

「今日は海に行つて潮を汲んで来なさい」

「今日は海に行つて潮を汲んで来なさい」

「水が無いので雨水を汲んで来なさい」

「水が無いので雨水を汲んで来なさい」と言つと、反対に海の潮、潮水を汲んで来たりして、親の言いつけを聞かない親不孝の者であつたらしいんだ。ところがその親不孝者が、親が年をとり死にそうになつたとき「この子に、私の思いをそのまま告げると、どんなことをしでかすか分からない」と思つて、親は、

「私が死んだら川の側で葬つてね」

「私が死んだら川の側で葬つてね」と言われた。そう言つておくと、川の側ではない所に葬るはずだからと親は考えて言つたわけね。

それで、親はこの時も「子どもが」素直に聞くとは思えないから、いつものように私が言うこととは反対のこ

と言って、真先に、親孝行しに行つたらしいんだが。あの翡翠の方はね、非常に着飾って行かなければいけないということとで、着飾って、青、青、白というふうな模様を付けた着物を着けて、親のミールトウイ〔臨終〕に行つたらしいんだ。それから、

「いやーや、親ぬ孝ぬ者やくとう、とうーち倉ぬ梯上てい、米食でい育きよー〔お前は親孝行者だから、いつも倉の梯上って、米を食べて育ちなさい〕」。

翡翠の方は、

「いやーや、親不孝な者やくとう、とうーち、あぬカークムイきじやーち食みよー〔お前は親不孝な者だから、川をあさって餌を取って食べなさいよ〕」

と言われたと。昔話。それで、あのカーラカンジュヤー〔翡翠〕は川の中からしよつちゆう歩いてるんだ。で、クラー小は、家ぬ倉なーりー〔雀は家の倉の辺りから〕飛んで歩いてる。それに、クラー小は、染めてない縹をはいたから、首の周りだけは白くしてる。

平成二年八月二一日 平識美恵子・津嘉山朝昭聴取 石川小百合翻字 T 137 A 6

39 雀は嘉利

池原 島袋シズ（明治四一年一二月二〇日生）具志川市

伝えて私たちは聞いていたけど、年寄りからは。クラー〔雀〕がたくさん集まったら、やつぱし、その家庭がたいへん幸福になるということをおっしゃっていたもんだから、それが、はつきり、うちも分らないけど、クラーがいたら、みんな喜んでいたんですよ。また、食べ物があるからね、お米なんか作って、これを食べるためにたくさん集まって来たわけ。今は、お米なんか作らないでしょう。だから、あんまりないさあね、クラーというのも。クラーというのは、たいへんカリー〔縁起がいい〕な鳥で、雀であるということであつたんですよ、昔は。

昭和五五年五月一八日 池村弘子・玉城弘美・仲宗根フキエ聴取 山内智子翻字 T 4 A 1

11 雨蛙不孝

① 雨蛙（カーク、カーク）

雨蛙、雨蛙分かる。雨降がたないねー、カーク、カークちゅって鳴くの、あれ雨蛙。え、あれはまた親の言うこと全く聞かない。な、横着なもんだで。

「今日や海んじ、潮汲でい来よー」

んでい言ねー反対に雨水汲でい来、うりから

「水えー無んくとう、雨水汲でい来よー」

んでい言ねー反対にまた、海ぬ潮、潮水汲でい来しーしー、親不孝にそーてーるふーじやし、うりが親ぬな一年とうてい亡しがたななくとう、「くりんかい、やるぐうとう言ねー、ちやーがすらー分からんくとう」んでい言やーに、親あ

「私が死にーねー川端んじ送りよー」

んでい。あんしーねー、あん言いねー、川端あらん所んじ送いくとうんちやてーるばーてー親のー。

あんやし親あ、あんしえー考げーらん、くりがー私言しえー反対にどう聞ちゆくとう、川端んじ送りよーんでい言りわるるんでい言やーに、

登川 平田盛永（明治四一年六月六日生）登川

雨蛙、雨蛙って分かる。雨が降りそうになるとカーク、カークって鳴いているもの。あれを雨蛙というんだが。あの雨蛙はまた、親の言うことは全く聞かない横着者でね、親が、

「今日は海に行つて潮を汲んで来なさい」

と言いつけると、反対に雨水を汲んで来る。また、

「水が無いので雨水を汲んで来なさい」

と言つと、反対に海の潮、潮水を汲んで来たりして、親の言いつけを聞かない親不孝の者であつたらしいんだ。ところがその親不孝者が、親が年をとり死にそうになつたとき、「この子に、私の思いをそのまま告げると、どんなことをしでかすか分からない」と思つて、親は、

「私が死んだら川の側で葬つてね」

と言われた。そう言つておくと、川の側ではない所に葬るはずだからと親は考えて言つたわけね。

それで、親はこの時も「子どもが」素直に聞くとは思えないから、いつものように私が言うこととは反対のこ

「川端んじ送りよー」

んでいちやくとう、うぬ親不孝者お、

「今んとうーや、親ぬ言しん反對し、親ぬ言しどく

とーしえーねーんくとう、今ねー、親ぬ言らつてーる

通い、川端んじど送りわるやる」

んでいち、あんさーに、川端んじ、送ていさるために、

雨降いがたないねー、

「私親あ水ぬけー流さらのーあがやー」

でいち、心配しカーク、カークし鳴ちゆんでい。うぬ

話ん聞ちやる。

としかしないはずだから「川の側に葬りなさいね」と言
わなければならぬと思つて、

「川の側で葬りなさいね」

と言ひ残した。すると、その親不孝者は、

「今までは親の言いつけに反對のことばかりして、親に

言われたことを素直に聞かなかつたので、この時ばかり

は親の言われた通りに、川の側で葬つてあげよう」

と思つてその通りにした。そうして川の側で葬つたため、

雨が降りそうになると、

「私の親は川の水で流されなかなあ」

と心配してカーク、カークと鳴くんだよという話も聞い

た。

注 ①カーク、カーク・・・雨蛙の鳴き声。

②「潮を汲んでおいで」・・・海の潮は、主に豆腐を作るときに、

豆腐を固まらせる凝固剤として使用していた。

昭和六〇年八月二六日 辺土名初美聴取 宜保勝翻字 T15 A 14

② (ガークガーク)

くふあはてーるばーてー、あんしるー、
「いやーやけー死ぬる場合や、川端んじ送ていとうら
しよー」

りやーに。親ぬ言へー聞かんなやーに、子んけーやな口
やるばーてー。

「私がけー死ぬる場合や、川端んじ送りよー」

んり言やつたぐとう、

「おー」

んり言やーに、けー死じえーちく、「私たー親あーうぬ
さ、うりやてーい。生ちちめーる間け、ちよん、うぬ
肝ひがしふあんでーるむん。今やな、けー亡はつとー
くとう、うりー川端んじ送い」やたんり。

あんしえーちく、雨ぬ降てーちく、「私たー親あけー
流りはやー」し鳴ちゆちんどーりる話や聞かはつてー
たん。うぬガークガークや、あんでーちんどーり。あん
すくとう、親ぬ物うぬ言りひえー、むる、人ぬむのーあ
らんでいんどー、わらばーたー。うぬふーじーるーやっ
ちんどーでい。雨降いがたーないねーうぬガークガーク
ガークーし、「私親あけー流りはやー」し鳴ちゆてーち

登川 仲宗根カナ(明治三〇年二月三日生) 登川

〔親子の〕仲が悪かったんだろうね、だから、
「お前は、私が死んだら川の側に葬むつてちよーだい
ね」

と言われて。親の言うことを聞かないので、子どもに悪
い乱暴な言葉をはいているわけさあ。

「私が死んだら川の側に葬むつてちよーだいね」

と言われたから、

「わかった」

といつて。親が亡くなったので、「私の親は生きている
時にあのように言っていたし、生きている間は、満足さ
せることができなかつたから、今はもう、亡くなってし
まつたから、言われた通りに川の側で葬ろう」と葬った。

そうしたら、雨が降ると「私たちの親は流されてしま
うねえ」と鳴くんだよという話は聞かされていた。その
ガークガークして鳴くのは、そういう意味があるんだよ
って。だから、親が言われることは、人ごとの話ではな
いんだよ、子どもたちよ。そのようなことがあったから
なんだよって。雨が降りそうになると、ガークガーク
ガークーと「私の親は流されてしまうねえ」といって鳴

んでーでい、いる話どう聞かはってーたんどー。

昭和五五年五月一八日

富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩・安田啓子

山内智子翻字

T2A6

くんだってよ、という話を聞かされていたんだよ。

③ (カーラコッコ)ー

昔、親不孝の子がいてね、その子が、親の言いつけを聞かないで反対ばかりして。親が「あっち行きなさいの」、こっちに来て、「こっち来なさいの」あっちに行つて、親と反対した子であつたからね。

もう、その親が死ぬ時にはね「川端んじ送りよー」でいち、言ちきーねー陸んじ送いんねー考えやーに、あんさーに

「川端んじ送りよー」

でいちゃくとう、うにーや、本当ぬ心いじやー、川端んじ送やーに、うにーから、カーラコッコでい鳴くんり。くつさぬ話聞ちよーびーさー。あんすくとう「親ぬいやぎーゆー聞きよー」んち。

登川 仲宗根カメ (明治四二年六月二三日生) 登川

反対ばかりしていた。親が「あっち行きなさい」というと、こっちに来て「こっち来なさい」というとあっちに行つて。親に反対する子であつたからね。

もう、その親が死ぬ時にはね、「川端で葬りなさいね」と言いつけると陸で葬ってくれるだろうと考えて、それで、

「川端で葬りなさいね」

と言うと、その時は素直な心で聞き止めて、川の側に葬つたので、その時からカーラコッコと鳴くんだつて。それだけの話を聞いているんですよ。だから「親のいうことはよく聞きなさいね」と。

昭和五五年五月一八日 遠藤庄治・大城直樹・幸喜愛 山内智子翻字 T1B6

④

昔親ぬけー亡ちやくとう、墓あなー川端んじしか送らん、川端んじる送てーくとう、大雨ぬ降てい水ぬ出じーねーな、うぬ墓ぬ流りーねー親ん流さりーんり言やーにる、うり心配するあんしん……。

昔、親が亡くなったので、墓はもう川端でしか葬れなくて、川端で葬っているが、大雨が降って、川の水が氾濫したら、その墓が流されてしまうと親も一緒に流されてしまうといつて、そのことを心配して、あのように〔鳴いているって〕。

昭和五五年五月一八日 大本敬子・西江美智子聴取 山内智子翻字 T1B3

⑤ アマガカー

登川 仲宗根盛雄（明治四三年九月一五日生）登川

① アマガカーね、アマガカー分かいんでしよう。雨が降りがたに鳴く蛙、あれはもう親不孝で、親の言うもの全部反対で言葉を返しよったつと。そしたから親は、「これは自分の言いつけに、もう何でも反対で言うから、これには、反対に言うたら真面目に言うでしよう」と思ってね、

「もし、私が死んだときには、川端に行つて葬りなさい」と思ってね。そうやったら、親がそう言えば立派な所に、葬るんでしようと思つて、親は、そう言うたつて。

そしたから、そのアマガカーはね、これは、「私は親のいるときは、不孝したから、死んでからでも孝行やろう」

と言つて、親の言うとおりに、よく守つて、川端に親を葬つたつて。そうやったから、大雨が降つたら、親の棺も一緒に流れてしまつて、もう、親が流れてしまつて、なくなつたから、もう苦しんで、雨降りには、またも親が、流れはしない

かと言つて鳴くつて。昔の子どもは、親の言うものは、逆に考える人もいるし、また、死んでから親の孝行をやりたいと思つても、死んでからは、親孝行にはならないという。これは、生きている時の孝行しか孝行にはなれないという、こんなしつけの話だったんですよね。

注 ①アマガカー・・・蛙のこと

昭和六〇年八月二日 辺土名初美・仲松庸尚聴取 宜保勝翻字 T12 A11

⑥ カーラコッコ

登川 仲宗根フミ (明治四二年七月一〇日生) 登川

あれは、親不孝者で、親の言うことを、普段は聞かない。これは反対者だから、もし、これに、どっかのいいところに私を埋めなさいと言つたら、悪いとこに持つて行くからと思つて、それで、

「私が死んだら、川端に埋めなさい」と言つたので、これは、

「今までは、親のことを聞かなかつたから、今度は聞いてあげる」

と言つて、川端に、親の死体を持つて行つて埋めたので、「親が今までの反対のことを、私に言い聞かせてあつたんだね」と思つて、それから気づいて、雨降りになつたらもう、

「私は、これまでも親不孝になるかねえ」

と言つて、あれは、雨降りそうになつたら親のことを思つて鳴くそうだという、そういう意味の話だったよ。

また、カーラコッコ チビトウガイ

イヤーガ ナチネー アミフユンドー

ナーカイアイネー アミハリユン という歌もあつたよ。

昭和六〇年八月二六日 仲松庸尚聴取 宜保勝翻字 T13 B3

㊦ アマガク（ガクガク）

アマガクぬガクガクすしえーや、鳴ちゆしえーや、雨降いがたないねー、ガク、ガク、ガク、鳴ちゆしえーや、とーうりがむのーうりやるばーてー。

アマガクんでいるむのー、アタビチャーなかい似ちよーるーむぬ、うぬ、アマガクんでいしえーやーな、でーじな、反対、反対がんでーるば。まとうむね、まとうむねーむる聞かんや、親ぬ、ぬーしく、

「水汲でいくよー」

んでいーねー、あらん物、あらん物取つちちえーしーしーしな、むる反対、反対しなくぬアマガクやてーるふーじ。人ぬ言しえー聞かんでーるばーてー。あんさーに、どうくな反対がんさくとう、うぬ親やよー、なーかんねーる童えな、くれーな、親ぬ物言しん聞かん、あんしよーるむん、にーかやや、にーかー私が亡しーねー、亡しーねー反対に言ろわるや、くりがー上等ぬ所んけーな、し、とーうらするむん、でい言やーに、あんさーに、

「とー私が死にーねーや、川端ぬや、川端ぬ穴んけー埋みりよー」

知花 鳥袋タケ（大正七年九月一日生）知花

雨蛙がガクガクするでしょう、鳴くでしょう。雨が降りそうになるとガク、ガク、ガクと鳴くでしょう、それにはこんな話があるわけさ。

雨蛙というものは蛙に似ていて、その雨蛙というものはね、もう、たいへんな反対、反対のことばかりする者であつたわけ。まともには、まともには何も聞かないで、親が、

「水を汲んできなさい」

と言いつけても、違うのを、全く違う物を持って来たりして、すべて反対、反対のことばかりをその雨蛙はしていたようだ。人の言うことは素直に聞かなかつたわけさあ。それで、あまりにも反対のことばかりするので親はね、もう、こんな子どもはもう、親の言うことも聞かないで、こんな奴は私の死後、私が死んだあと、死んだら反対のことを言っておかないと、この子が私を上等の所に葬ってくれないだろうと思って、それで、

「ねえ、私が死んだらね、川端のね、川端の穴に埋めなさい」

と言われたらしいさ。そうしたら、その時から子どもの

でい言やっついていよー。あんすぐとう、うにーから肝お
けー治やーにや、とーな、親やあん言らりてーひん。
な、んまんけー送らわどうないさやー、んでい言やーに、
川端ぬ所んけーうぬ親や埋みてーるふーじ。

あんさくとうな、雨ぬ降てい大水ぬなー出じーねー、
「私達親やな、けー流らさつてーさやー、な、今時
分の、な、けー流らさつてーさやー」

んでい言やーにどう、雨降いがたないねーガク、ガクし
鳴ちゆんでい。ガーク、ガークし。うぬアマガクん
でいしえー、うんぐとうぬ、やたんどーでいち話あ
たるばー。あんしる人ぬ言し聞かんしえーや、「アマガ
クとーゆぬむん」でい言らりーたんよー。昔ん人おあ
ん言いたさ。

「いやーや、アマガクでーひん」でい言やりーたんよ。
あんしやんだりーたさ。

気持ちは治つてさ、親はあのように言われていたから、
もうそこに葬らないといけないねえと、川端の所に親を
葬つたらしいさ。そうしたら、雨が降って大水になると、
「私たちの親はもう流されてしまったんだらうねえ、今
ごろはもう、流されてしまったんだらうねえ」
と言って、雨が降りそうになるとガク、ガクと鳴くんだ
つて。ガーク、ガークと。そのアマガクというのは、
こんなだったよといって話があったわけ。だから、人の
言うことを聞かない人のことを「アマガクと同じだね」
と言われていたよ。昔の人は、そのように例えていたさ。
「あなたはアマガクだ」と言われていたよ。そんな言わ
れよつたさ。

昭和六一年七月九日 宮里信勇・宮城昭美聴取 宮城昭美翻字 T 26 A 8

⑧ アマガコー（カークカーク）

でーじな、反対者やたんでいへーや、反対。あれー
 なー何やていんむる反対んけーすたんでいアマガコー。
 な、何やていん言ちきーるうつきーむる反対んけーさー
 に、あんさーになー、今度おなー、親が病氣さくとう、
 くれーなー反対んけー言らんねーやーならんむんでいち、
 「いやーや私がやー、くぬ病みうてい亡しーねー、川
 端んじ送りよーやー」
 んでい言ちやくとう。あんしーねーなー、かーま上ぬ毛
 んじ送いがふらーんち
 「川端んじ送りよー」
 んでい言ちやくとう、
 「おー」
 んでいち川端んけー送たくとう。なー、雨降いがたな
 いねー、「あいえなー、わったースー、アンマーや、
 なー、川端んじどういつちめーひがなー大水出じー
 ねーなーけーちかいはやー」、でい思やーに、うにーか
 ら雨降いがたないねーカークカークしあびーたんでい。
 うぬアマガコー、でーじな、うり、反対やたんでいよー。
 むる反対んかいどうふたんでい。

知花 栄野比トヨ（大正五年七月一二日生）池原

たいそう反対のことばかりする者であつたていうさ
 あねえ、反対者。あれはもう、何をするにしてもみんな
 反対のことばかりしていたんだってアマガクは。もう、
 なんでも言いつけられるものはすべて反対のことばかり
 して、そしてもう、今度はもう、親が病氣になった時に、
 これにはもう反対のことを言わないといけないと、
 「あなたは私ガね、この病氣で死んでしまつたら川端で
 葬つてちようだいね」
 と言つた。そう言うたらずうつと上の原っぱで葬つてく
 れるだろうからと思つて、
 「川端で葬りなさいね」
 と言つと、
 「はい」
 と言つて、川端に葬つたそうだ。そうしたら、もう雨が
 降りそうになると「ああ、どうしよう、私たちのお父さ
 んやお母さんはもう川端に葬つてあるから、大水が出た
 ら水びたしになつてしまふねえ」と思つて、その時から、
 雨が降りそうになるとカークカークして鳴いていたつて。
 そのアマガクはたいへん反対者だつたてよ。全部反対ば

かりしよったつて。

昭和六一年七月十日 宮里信勇・宮城昭美聴取 宮城昭美翻字 T 27 A 9

㊦ アマガクガークー（カークーカークー・アンマー） 宮里 上根ウサ（明治三一年二月五日生）与那城町

女ぬ親とう居てー。あんさーに、うぬ男ん子あなー、

アンマーや豆腐さーやちが、

「えー、いやー潮汲でい来よー」

でい言ねー、水汲でいちつち、むる反対なてい。また、

「水汲でい来」

んでいえー、潮汲でいちつち、「はあー、くぬひやーや、

私が亡ちえーからー、陸ぬ墓んかい葬式しんでい言ねー、

クムインかいどう葬式えしゆるむぬん」でい思やーい、

反対やくとう。あんさーい、くりうつてーなー、反対

えーなてーねーぬ。「しゅーや、お母や、くりうてーな

らんくとう、いやー、亡さわ、ちようどうクムインでい、

陸んかい」ちけーちゅーや反対なていし、

「クムインかい葬式えし、よー」

んちやぐとう、反対なやーい、クムインかい葬式えさー

にや、あんさーアンマー流りていねーぬばー。あんさー、

アマガクガークーや、うりが雨降らんでいしーねーカー

〔息子が〕母親と息子が一緒に住んでいた。その息子のお母さんは豆腐作りをするので〔息子に〕、

「ねえ、お前、潮水を汲んで来なさい」

と言うと、水を汲んで来て、みんな反対なことばかりを

していた。また、

「水を汲んで来なさい」

と言うと、潮を汲んでくるので「まったく、こいつは私

が死んだら、陸の墓に葬りなさいと言うと、池に葬るだ

ろう」と思った。（いつも）反対のことばかりしていた

から。ところが、今度ばかりは、反対のことはしなかつ

た。「お母さんが、今度ばかりはもう治りそうもないか

ら、私が死んだら、池と言えは、陸の方に葬ってくれ

だろーうから」と思って、

「池に葬りなさいね」

と言ったら、思いとは反対に言われた通りに池に葬った

からね、お母さんは流されてしまったわけ。それで、ア

クーカークー鳴ちゆしえー「はあー雨降る。私アンマーや流りてい行ちゆさやー」んでい言ちぬクークークーや鳴ちゆんどーでい。

うぬ話え、うれー誰からん聞かんむん。私達揃てい、話会どうちゆるむん。島ういや、夕飯食でいから、けー隣かい行じやーに。あんさーうれー、親子男ん子居るうったーからさーに、あぬ、アタビーがや雨降らんちんじ鳴ちゆしえー「雨降らんちやー、私親あ流りーさやー」でい、うぬ事さーい、カーク、カーク鳴ちゆんでい。

注 ①島・・村里・部落のこと。ここでは、話者の出身地である与那城村宮城島池味のこと。

平成二年三月一日 豊岡早苗・宮城昭美聴取 宮城昭美翻字 T47B6

10 アタコー（カーウ、カーウ・アンマー）

男ん子とう、女ぬ親とう居しが、女ぬ親あ豆腐さーやてい、

「潮汲でい来」

でー、水汲でいきつち、「くぬひやーや、あとー私が亡へーからー、陸んかいそーりーんでい言や、クムインか

マガクガークーが、雨が降りそうになるとカーククークーと鳴くのは、「ああ、雨が降る。私のお母さんは流されていくんだね」といつて、カーククークーと鳴いているんだよと。

この話は誰からも聞いてないよ。私たちは、皆揃って話会をするんだけど。島にいる時は、夕飯を食べてから隣近所に行つてね。そして、この話は、親子、男の子が居たという話から、蛙が雨降りそうときに鳴くのは「雨が降っている。私の親は流されてしまふねえ」と、その心配でカーク、カークと鳴くんだった。

宮里 上根ウサ（明治三二年一二月五日生）与那城町

男の子と母親がいるが、お母さんは豆腐作りをする人で、

「潮を汲んできなさい」

と言うと水を汲んで来るので、「こいつは、私が死んだら、陸に葬りなさいと言うと池に流して、また池に葬り

い流らちゆくとう、またクムインかいそーりんてい言
やー陸んかい置くとう、むる反対どうやくとう」、あ
んさーに

「とー、今日やならんくとうや」

クムインていえーからーまた、陸んかい置ちゆでい思
やーなかい、潮汲てい来んでー水どう汲ていちゆーく
う、あんさーに、な、うぬ子んかいな、クムイン
ていえー陸んかい置ちゆん考えーさーに、

「とー私のクムインかい置きよー亡はば」

んじやなーかー。あんさーうりん、反対やならんぐーと
うーうぬ子あアンマアヤクムインぬ端んかい置ちやくと
う、雨なかい流らあ、ふたぐとう、流らさつていねーら
ん。あんさー、うぬ子んでいうる者おな、

「私アンマアヤ、やー、陸んかい置ちよーけーやたるむ
ん。なクムインてい言たくとう、クムインかい置ち
やーに、側なかい置ちやーい流らさつてい」

雨ぬ降れー「私アンマアヤ流りーさやー、カーウ、
カーウ、カーウ」んでい。雨ぬ降らんでいちやアタコー
鳴ちゆんどー。

注 ①アタコー・・・蛙のこと。

なさいと言えれば陸に葬つて、すべて反対のことばかりす
るだろうから」と思つて、

「もう、今日で死んでしまふからね」

と。池と言えればまた陸に葬ると思つて。潮を汲んできな
さいと言えれば水を汲んでくるので、それで、もう、その
子どもに池といえれば陸に葬つてくれるだろうと考えて、

「ねえ、私が死んだら池に葬りなさいね」

と言つた。だけど、その時は反対はできないので、その
子どもは、お母さんを池の側に葬つたから、雨で流され
てしまった。そうしたもんだから、その子どもという者
は

「私のお母さんは陸に葬ればよかつたのに。もう池に葬
りなさいと言つたから、池の側に葬つたら流されてしま
つた」

それで、雨が降ると、「私のお母さんは流されてしま
うね、カーウ、カーウ、カーウ」と鳴くんだつて。雨が
降りそうになると蛙は鳴くんだよ。

11 (アンマー)

豆腐さー、親あ。親子あんさーに、

「とーいやーやや、潮汲でい来よー」

んてい言ねー

「うー」

んてい言やーに水汲でいちっち、

「とーいやーやや、水汲でい来わー」

んていえー、また潮汲でいちっち。

「はー、くぬひやーがーなー、あとー私ぬん死にーねー

海んかい、クムインかいどう流すらー分からんくとう」

んてい、反対言葉言やーにや、クムインてい言ねー陸ん

かい置ちゅーや。あんさーな自分ぬ親ん正直反対言葉言

やーに、

「私ぬん死にーねークムイぬ端んかい置きよー」

んてい言ちやくとう、

「うー」

んてい言やーなかい、なー陸んかい置かんぐーとうー、

クムイぬ端んかい置ちゅーに。雨ぬ降たぐとうアンマー

流りていねーらな。あんさー雨降いなれーな、

「私アンマーや、やー、雨降いしが」

宮里 上根ウサ (明治三二年二月五日生) 与那城町

豆腐作りをしている親子がいたつて。そうして、

「さあ、あんたは潮を汲んで来なさいね」

と言うと、

「はい」

と言って、水を汲んで来る。

「さあ、あんたは水を汲んで来なさいね」

と言うと、また潮を汲んで来る。

「ああ、こいつは私が死ぬと海や池に流すかも知れな

い」

と、反対の言葉を言つてね。池と言うと陸に葬ってくれ

るだろうと思ひ、そうして、親は本当の気持ちとは反対

の言葉を言つて、

「私が死んだら池の側に葬つてね」

と言つたら、

「はい」

と答えて、もう、陸には葬らないで、池の側に葬つた。

雨が降つたら、お母さんが流されてしまったので、それ

で、雨が降ると、

「私のお母さんはねえ、雨が降ると流されてしまうよ」

んでいち鳴ちゆんでい。

と言って鳴くんだって。

平成二年七月六日 宮城昭美・宮里信勇・上門博之・武鳴昭子聴取 宮城昭美翻字 T 79 A 15

12 カーラコッコイ（カーラクツクイ・お母）

高原 島袋サダ（明治三六年九月五日生）高原

蛙はね、お母思やーなていや。お母思やーなてい、あんすくとう、あぬカーラコッコイよ、川ぬ側なーりー、^①アタビー、カーラクツクイ、カーラクツクイ、鳴ちゆしえーや。あれはね、何やがんでいーねーや、あれはね、「私達親や、川端に送てーしが、雨ぬ降いねー流さ^②りーさやー。カーラクツクイ、カーラクツクイ」
んちやー、あんし、うにカーラコッコイでいしえーや、うぬ時からよ、あぬ川ぬ側なーりーカーラコッコイちあびーんでい。

嘘物言さーなてい、親が死ぬ時には、平生は山に行きなさいと言つたら海に行くし、海に行きなさいと言つたら山に行くし、そう言つて嘘ついたらから、「私が死ぬときは、川端に置きなさいね」
でい言ちやくとう、その時には誠になつて、川端に置いたら、

蛙はね、お母さん思いでね。だからね、あのカーラコッコイさ、川の側辺りから、蛙がカーラクツクイ、カーラクツクイって鳴いているでしょう。あれはどうしてかと言うとね、あれはね、
「私たちの親は川端に葬つてあるが、雨が降ると流されてしまふねえ。カーラクツクイ、カーラクツクイ」
と鳴いてね、それで、カーラコッコイというのはね、その時から、川の側辺りからカーラコッコイと鳴くんだつて。

嘘つきだったから、平生は山に行きなさいと言つたら海に行くし、海に行きなさいと言つたら山に行つて、いつも嘘ついていたから、親が死ぬときには、
「私が死んだら、川端に葬りなさいね」
と言つたので、その時には素直になつて、川端に葬つたから、「雨が降ると親が流されると言つて鳴いたので」

「カーラコッコイが鳴くときに、また雨降るよー」
 って言よったのは。

この道理は始めは蛙が嘘つきだったからね、山に行きなさいと言う時には、海に行くし、海に行きなさいと言ったら山に行くし、したら、私が死ぬ時にはくれー反対みだから、

「川の側に置きなさい」

と言ったら、その時に誠になって、川端に置いたら、

「もう、私の親あむち流えらさんがやー」

と言って、カーラコッコイ、カーラコッコイって言って、鳴くと言って。昔の人はカーラコッコイが鳴くときに、「また雨降るね」と言よったさ。その意味だよ。

注 ①アタビー・・・蛙、またはおけらのこと。

②カーラクツクイ・・・蛙の鳴き声。

「カーラコッコイが鳴くとまた雨降るよう」
 って言いよった。

その話の始めは、蛙が嘘つきだったからね、山に行きなさいと言うと海に行くし、海に行きなさいと言ったら、山に行つて、こいつは反対のことばかりするので、私が死ぬ時には

「川の側に葬りなさい」

と言ったら、その時は素直になって、川端に葬ったので、「もう、私の親は川の水で流がされてしまわないかねえ」

と言って、カーラコッコイ、カーラコッコイと鳴くんだつて。昔の人は「カーラコッコイが鳴くときには、また雨が降るね」と言いよったさ。その意味だよ。

平成二年七月六日 平良真也・大川清子・豊岡早苗・与那嶺昭郎・富平恵智子聴取 宜保勝翻字 T 84 A 3

13 蛙（カークカーク・お母さん）

越来 高島邦子（大正二年八月一六日生）名護市

蛙はね、親不孝でね、この子どもはねあんまり親孝行でなく、親といつても反対物言いしよったって。親がこう言うたら、この子どもはまた親に反対物言いしてね、反対に言葉使って。そう、こうしたからね、だからこの親がね「あんたは孝行者じゃないからね、私が死んだら墓は浜辺に造りなさい」と。潮のくる所に造りなさいって。あっちで。

蛙はカークカークして鳴くでしょう、蛙は親不孝者といつて、この子どもがねえ、お母さんが言う言葉をね反対にみんな使ってしまったよ、このお母さんは、とつても、もう、悔しかったんでしよう。だから、いつも喧嘩でなかったかねえ。そしたら、

「あんたは親不孝者だから私が死んだら浜辺、潮の満つ所、あっちに私を埋めてちょうだい」と言うたさあ。あっちに墓造ってきてちょうだいと言ったらね、この蛙はいつでもね、カークカークして、この潮、内方でね鳴きよったって。それが、この子どもなつてないかねえ。子どもはもう、心配して、お母さんあっちに埋めただけどもう、いつでも、心配しているんじゃないかねえ。

平成二年八月二日 照屋京子・有銘和江聴取 宮城昭美翻字 T 132 B 2

14 （カークカーク・お父さん、お母さん）

安慶田 屋宜カメ（明治四一年一月一〇日生）安慶田

あぬー昔さ、お父さんとお母さんが亡くなったが、お墓が、なかったかねーどんなか分からんけど、川の側んじ、またうぬお母さんもお父さんも、此処んじ葬ったく

あのを昔さ、お父さんとお母さんが亡くなったが、お墓がなかったのか、どんなか分からんけど、川の側で、そのお母さんも、お父さんも、そこで葬ったから、

とう「ああ、雨が降りそーやるむんなー、雨ぬ降いるむん、ちゃーすがやーなー、私達親あくぬ水にけー流さりーねーちゃーすがやー」

んち、あんしガークーガークーしあびーんでいさんちる、
話あたる。

「ああ、雨が降りそうだねえ、雨が降るのにどうしようかねえ、私達の親は川の水で流されてしまったら、どうしようかねえ」

って、それでいつもガークーガークーして鳴くという話があつたよ。

平成二年八月二〇日 平良真也・新田尚子聴取 照屋京子翻字 T120 B3

15 アマガクー（ガーククー）

中央 湧田トミ（大正五年一二月二五日生）嘉良川

親の言うことを聞かない人のことをガージュー（意地っ張り）と言うわけさ。ガージューな者だから、聞かないでね、何時も、親の言うことに反対していたって。だから親が死ぬときに、「私は川端に埋めてねえって言ったらね、これ反対に上上げるはずだから」と思ってね、アマガクー（あまのじゃく）だから。言うことを聞かないからね。

「川端に埋めてねえ」

と反対に言った。そうしたら、

「今まで言うことを聞いてないから、元気なときにはお母さんの言うこと聞かなかつたから、今度は言うこと聞く」

と言って、川端に埋めたって。だから、雨が降ったらこのアマガクは、埋めた親を心配してガークーガークーして鳴くって。

平成二年八月一九日 謝敷勝美・平安名邦裕聴取 石川小百合翻字 T116 B1

16 (カライッココー)

室川 新城安平(大正二年二月二日生) 今帰仁村

「浜辺に葬式しなさい」言うたら、川の側にやる〔葬る〕。「親が言うことに」反対だからね、浜言ゆたら海、海言ゆたら川という子だから、だから「海の側に葬式しなさい」と、これの親が言ゆたら反対だから、川の側でやった〔葬った〕わけ。そしたら、今でも蛙はね、雨降りそうになったら、「自分の親は流されはしないか」言ゆて、いつもカライッココー、カライッココーと鳴くそうや。

平成二年八月二日 通事美香・仲里香聴取 宮城昭美翻字 T 143 A 3

17 雨蛙

胡屋 島 千代(大正四年二月一日生) 胡屋

雨蛙は親が右といったたら左、左といったたら右、上と言ったら下ってね、反対者だったって。それでね、最後になったら、親が死にそうになったらね、これは私とずっと反対しているから、「川端に埋めなさいねえ、葬ってちようだいねえ」と言ったら、反対に上の方のいい所に葬ってくれるはずだかと思つて、最後に〔親が〕こう言つたからさ、「子どもは」、「最後に親の言うことを聞かないといけない」

というので、お互いに親も子もこうなつたわけであるつて。これ聞いた覚えがあるわけさあねえ。それで、親のいうことを聞かないといけないという意味で川端に葬つたから、大雨の時は鳴くでしょう、あれは。だから、「私の親はもう、雨が持ち流らすん筈どーやー〔雨が流してしまふだろうねえ〕」と思つて鳴くつて。あんな話聞いた覚えがあるんだけどね。本当か嘘か分からないけど私は。

平成二年八月一九日 照屋京子・岸本かおり・田本かおり聴取 宮城昭美翻字 T 102 A 7

18 蛙（親父）

胡屋 知念真章（明治四二年三月二〇日生）嘉手納町

蛙の子どもがとても親不孝者でよ、「水汲んで来い」と言ったら潮汲んで来るし、「潮汲んで来い」と言ったら水汲んで来るし、もう、親父がよ、

「自分が死んだら、川の縁に埋めなさい」

と言った。（そしたら、蛙の子どもは）もう自分は親不孝したから、死んでからは親孝行せんといかんて、その川の縁に葬ったら、大水が出てきて流されてよ、それで泣いたというような話。本当か嘘か私にも分からん。

平成二年八月一九日 諸喜田綾子・嘉陽田尚行聴取 宮城昭美翻字 T101 B13

19 アマガク（ガークーガークー・親父）

中の町 山城清輝（大正一二年五月二七日生）嘉手納町

蛙、蛙だと思う。あれにアマガクと言ったがね。雨降りの時にガークーガークーして鳴くんだよ。それでそのアマガク〔雨蛙〕の話をされたんだがね。

昔、ある放蕩息子がね、親の言うことはちつとも聞かない息子がおつたらしいんだなあ。それで、もうとにかく親が言うこと反対のことをするわけだ。東に行けと言ったら西に行くと。砂糖買って来いと言ったら、塩を買って来るといふうな、そういうたぐいの反対のことばかりしないへーへー者（いい加減な奴）がおつたそうだよ。それでねえ、もうこの親父は死ぬ間際に大変心配してね、これはもう将来どういふことになるか、私が死んだ後ね、どんなことするかなあと、いって大変心配しながら、そして、

「私が死んだらね、死んだら川の側にね、川の側に墓を造ってあそこに葬りなさい」

と。そう言えば、川は溢れてあれは大雨のとき大変でしょう。だからね陸に、いわゆるそのう陸地の方に造りなさいと言

つたら、これはもう、また、反対のことするかといつてき。逆のことを、

「川の側んかい、私墓あ造とうばや〔川の側に私の墓を造ってくれ〕」
と言つたそうだ。

そうしたら、この息子は、生ちちよーる間ちやー親んかい反対ぬくとうばつかししてきたから、今からんちよん、親ぬ死じからんちよん、親ぬ言し遺言のー聞かねーならのーあらにつち〔生きている間親には反対なことばかりしてきたので、今からでも、親が死んだあとからでも、親の言うことを、遺言は聞かないといけないのではないかと思つて〕、わざとその川の側んかい墓造つてね葬つたつて。うん。それで、雨降りそうになると、また、あまーめーや〔あそこら辺は〕、溢れて、うちの親父は流されなかなあと、もう心配で、雨降りそうになると、蛙鳴くでしょ、ガクガクし。そういうことで鳴いておる。親ぬ言うことをね、生きている間聞かないというと、死んで後もそういうふうにかえつて親不孝になるふうなこと。これ、戒めの話を小さい時ね、そういう話を・・・。

墓を造つてほしいと言つたのは、お父さんです。息子がね

「墓あまーんかい造くいびーがやー〔墓はどこに造りますか〕」

と言つたそうだよ。あんされー、とーうりがーいー所んかいでいーねー、また、やな所んかい造いるはじ。〔そうすると、こいつがは、いい所にと言うと、また、悪い所に造るはず〕。いつも親の言うことを反対のことばかりするからそれで、

「あ、川の側んかい造くれー〔川の側に造れ〕」

と。川の側んかい私墓あ造くるように。あんしゅんしえー〔そうすれば〕川の側じゃなくて、水の浸からないようない所に作るだろうという考えさあね。あんされー〔そうしたら〕この息子は、

「あんしえーあんさびーさ〔そういうのならそういたしましょう〕」

ということ、亡くなつてから、さちえーあのー墓を造ろうとしたら、今からでもけー亡ち後ん、親ぬ言しえー聞かねーならんむんと〔今からでも、亡くなつた後からでも親の言うことは聞かないといけない〕ということで、川の側に墓を造

つたら、大雨のときは、これ流される心配があるでしょう。それで、心配してね、いつも雨降りそうになると、蛙はガクガクして、一生懸命鳴くでしょ。そういうふうなことで、死んでから、親の孝行をしようとしたと。が、しかし結局は、生きてる間不孝なことばかりしたのは、死んだ後も不孝な結果になったと。いうふうなことでそういうふうな話だったね。聞かされたのはね。

平成二年八月二三日 照屋京子・諸喜田綾子聴取 大川清子翻字 T 159 A 1

㊦ アマガク（ガーク、ガーク）

アマガクんてい言ち、沖繩口さーに、アタビーぬ鳴ちーねーアマガクんち。ぐすーよー、アマガクの話色々あいびーしが、くぬアマガクの話いつペーうむさいびん。

昔くぬアマガクんちやる者お、いつペー親不孝者なてい、親ぬ言しえーむる聞かん。親ぬ、

「水汲りくー」

んでいーねー、潮汲りち、

「今日や豆腐すくとう、潮汲りくーよー」

でい言ねー、水汲りち、むる親ぬ意思んかい逆らてい、親不孝者なてい。いつペーやなんじやり者やてーるふーじー。

中の町 比嘉貞信（昭和二年四月二九日生）上地

アマガクと言ってね、沖繩の言葉では蛙が鳴くとアマガクと言う。皆さん、アマガクの話は色々ありますが、このアマガクの話は大変おもしろいです。

昔、このアマガクという者は、たいそう親不孝者で、親の言うことは全く聞かない。親が、

「水を汲んで来なさい」

と言うと、潮を汲んで来るし、

「今日は豆腐を作るから潮を汲んで来なさい」

と言うと、水を汲んで来るし、すべて親の意思に逆らう親不孝者で、大変いやな乱暴者であつたらしい。

そのアマガクの親が年をとり病気になる時、親は、「このアマガクに自分の気持ちを素直に言うとは絶対に聞

うぬアマガクが、自分ぬ親ぬ、な、年いみそーち、病氣し、年いがたーなつていきるばーに、くぬ親ぬ、「くぬアマガクが、やる通い言ねーじよーい聞かんくとう、な、くりんけーやる通い頼みーねー一大事なくとう、反対がんちかやーに、さんあいねーならんむん」。あんさーにアマガクあびやーに、

「とーなー私にんなー病氣ん強くなつてい、な、くぬうちやるはじ。私が亡しーねー、川ぬ側んかい埋みていとうらしよー」

ち頼でーるふーじ。川ぬ側んかいでい言ねー、反対がんちかてい、上びんかい、山んかい埋みーるはじやくとう。

「川ぬ側んかい埋みていとうらしよー」

ち頼でい。あんされー、くぬアマガクやまた、な、親が元氣やる間全部親ぬ言しんかい反対がんちかてい、右んでいねー左、左でい言ねー右。潮んでいれー水、水んでい言ねー潮でい、むる反対がんちかてーくとう、な、一番終いぬくとうんりかーじんちよん、親ぬ言る通い守らんとーならのーあらにんでい。

「親ぬ亡しーねーでいち、川ぬ側んかい埋みりよー」んでいやぎーるむんぬ、親孝行今度びかーじんち

いてはくれないだろから、もう、これにはやって欲しいことをそのまま頼むと大変なことになるので、反対のことを言わないといけない」と思い、そうして、アマガクを呼んで、

「もう私の病氣も重くなつて、もう、近いうちに死んでしまふであろう。私が死んだら川の側に葬つてちょうだいね」

と頼んだようだ。川の側と言えば、反対のことを言っているの、上の方に、山に葬るはずだから、

「川の側に葬つてちょうだいね」

と頼んだ。そうすると、このアマガクはまた、もう親が元氣でいるうちはみんな親の言われることには反対のこゝとばかりして、右といえ左、左といえ右、潮と言えば水、水と言うと潮という具合にすべて反対のことばかりしてきたので、もう、臨終の時だけでも親の言われる通りのことを守らないといけないのでないかと、

「親が『死んだら川の側に葬りなさい』と言われるので、親孝行と思つて今度ばかりでも親の言うことを聞いてあげよう」

と。それで親が亡くなると、親が言われた通りに川の側に葬つたようだ。アマガクはそうしたら、雨が降るたび

よん親ぬ言しちかな」

んでいち、あんさーに、親ぬ亡ちやくとう、親ぬ言う
通い川ぬ側んかい埋みてーるふーじうりや。あんさ
れー雨降いぬかーじ、川ぬ水ぬいっばいちるがつてい、
あんさ、うぬ墓んかいむる水ちるがつてい。さくとう、
くぬアマガクんでいる者お始めてい分かつてい、

「あいえーなー、私親ーなーまた水びたしなとーさ
やー」

ち、雨降いぬかーじ、ガークー、ガークーんでいち、哀
りそーんでい。あんさくとう、アマガクなてーならん
どー、子ぬ達、そーいりよー。

㉒ (ガークーガークー)

いつも自分勝手に遊んでおるので、親の死に目になっても、行くこともできないという意味だね。が、親がもう亡くな
ってしもうたら、もう、いつも雨ばかりなつてね、それで、雨が降りそうになつたらガークーガークーやつたらしいん
ですが。

に川の水がいつぱいになり、墓まで水びたしになつた。
そうしたらこのアマガクはその時になつて始めて分か
つて、

「ああどうしよう。私の親はもう、また水びたしにな
つているんだねえ」

と、雨が降るたびにガク、ガクと鳴いてつらい思いをし
ているそうだ。だから、あまのじゃくになつてはいけな
いよ、子どもたちよいい子になりなさいね。

平成二年八月二三日 宜保勝・宮平聴取 大川清子翻字 T 165 A 5

山里 伊佐安弘(明治四一年六月八日生) 白川

平成二年八月二一日 平識美恵子・津嘉山朝昭聴取 石川小百合翻字 T 137 A 8

22 (ガークーガークー)

山里 伊佐安弘(明治四一年六月八日生) 白川

これはねえ、親不孝者の話だよ。

親がいくら病気なつても来てくれない。この、蛙だけはね。その時に親が死んでもうたから、そのときは、また心入れ替えて、親の言うことを信じてやったら、

「お前は、親不孝しておるから、お前はもう水の所で育ちなさい」

という神様からの命令を受けて。それから、雨の降るときはガークーガークーして鳴くという。

平成二年二月一六日 平識美恵子・與那嶺昭郎・仲尾由美聴取 石川小百合翻字 T 182 A 4

12 犬の足

①

必じ、あれー前かにてい、足上げてい小便するばー
てーな。片足上げてい、小便すしえー。ちゃーしん、
足あ三本あてーるばーよ。あんさーに、とー、くぬ今
香炉、仏壇ぬ前ぬ香炉、

「いやーや、何処ん歩かん、ちゃー居どうそーくとう、
いやー物から一本えー取やーに、犬んかい付きらやー。
いやーや何処ん歩かんくとう」
うにーから、犬お足四本なたんでいぬ伝え話聞ちや
るばー。うぬ小那覇先生から。

昭和五五年五月一八日

喜納弘子・岡田浩・新城悦子・島袋美奈子聴取

山城綾子翻字 T3A5

池原 又吉松八（明治三八年四月八日生）池原

必ず、犬は前もつて、足を上げて小便するわけさあね
え。片足を上げて小便するさあ。たぶん、足は三本しか
なかったはずよ。それで、もう、今の香炉ね、仏壇の前
の香炉に「神様が」、

「お前は、どこも歩かない、ずっと座っているから、お
前の物から一本取って犬にくつつけようね。お前はどこ
にも行かないから」

そのときから、犬は足が四本になったという伝え話を
聞いたわけ。この小那覇先生から。

②

ウコールんでいしえー、線香立ていーるウコールぬあ
しえー。あれー、昔えー、始まいや、足あ四ちあたん
でいよ。あんしが、片足あ取やーに犬小んかい、うり

登川 平田盛永（明治四一年六月六日生）登川

ウコールというの、線香を立てる香炉のことだよ。
あれは、昔は、始めは足が四本あったそうだよ。だけど、
片足は取って犬にあげたので、犬は足が四本になったわ

しえーくとう、犬いんぐわい四し足あしなとーるばーて。あんさくとう、ウコールからうんちえーむんしえーる足あしやくとうんでいやーに、うり、汚かたしーねー罰ばつ当たあいくとう、汚かたちえーならんでいやー、片足かたあしあ上げていしつこすんでい。うぬ話はなしや冗談話じやうだんばなしや、あたるばーてー。

③

① 五德ごとくからね、五德ごとくからよ、一いっちえー取とりやーに、四しちあたんでい、五德ごとくは、足あしが四しちあたんでい。犬いぬおー三さんちどうあたんでいよー。あんさーに、あんしえー歩あつち苦くさんむんでい言いやーに、五德ごとくから、神様かみさまがてー、五德ごとくから取とりやーに、犬いぬかい呉くたんでい。五德ごとくお動かんしえーやー。動かかんぐとう、なー三さんちしえーしむんでいやーに、あんさーい犬いぬかい呉くたんでい。あんさぐとう、犬いぬお、「御神みかみから、神様かみさまからうたびみそーちえーる足あしあ、上あぎりわるやる」
んでいやーに、あんさーに小使ししーくわーちえーならんでいやーに上あぎとーるばーて。

けさ。それで、ウコールからお借りした足だから、それを汚したら罰が当たるから、汚したらいけないといって、片足を上げてしっこをするんだって。この話は冗談話ね、あつたわけさ。

昭和六〇年八月二六日 辺土名初美聴取 宜保勝翻字 T 15 A 12

知花 宮里秀栄（明治四一年九月一〇日生）知花

五德ごとく（の足は四本あつた）からね、五德ごとくから足一つを取つたつて。犬は三本しかなかつたつてよ。それで、そんなでは歩きにくいからといって、神様がね、五德ごとくから足を取つて、犬に呉れたつて。五德ごとくは動かないでしょう。動かないから、もう三つでいいといって、そうして犬に呉れたつて。そうしたから、犬は、

「御神みかみから、神様かみさまからいただいた足は（小便するとき濡らさないように）、上げんといけない」
と言つて、そうやつて、小便かけてはいけないといつて〔片足を〕上あげているわけ。

注 ①五徳・・・火鉢の中に置く、鉄またはせとものの3本か4本の足のある輪型のもの。

昭和六〇年一〇月一三日 照屋寛信・山本啓子聴取 宮城昭美翻字 T 23 A 10

④

泡瀬第一 普久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

犬は、しっこするときは、片足^{かたひき}上げてするさあね。これは小さい時にただ聞いただけであってね、犬^{いん}ぬ足^{ひき}あ最初^{さいしょ}おー三^みちるやたんでいしがやー、くぬ五徳^{ごとく}ぬ足^{ひき}あ四^よちあたくとう、「犬の足は最初は三つだったそうだがね、この五徳の足が四つあったから」あれから一つ付けて、この犬^{いん}に付けたから、この犬は、今しっこするときはまた、片足^{かたひき}上げて、この足は汚^{よご}したらいけないということで、やっているらしいよということ、ただ聞いたわけ。

だから、こんなのはね、私^{わたし}たちが小さいときに、ただ集^あまって、こんなやったよと聞いたよ。これは短い話。このぐらしいかできないわけ。これは、夜、友達^{ともだち}同志^{どうし}でやった。

「とー、私^{わたし}ねーうつき「はい、私の話はこれだけ」

と言って、また、次は、

「いやーや何^{なに}すが「あんたは、何を話すか」

と言って、やるでしょう。いい話^{はなし}小^せせー「楽しい話会」というがね。

平成二年三月一二日 豊岡早苗聴取 宮城昭美翻字 T 56 A 3

⑤

泡瀬第一 普久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

五徳はね、五徳の足は四本あつても、三本にしても別にかまわないけど犬は、ちょっと三本ではかわいそうだからといって、一つ五徳からくれた。あんさーにいんせいばい犬いんせいばい小便いんせいばいしーねーや、貫てーみしるやぐとんち、上あぎやーいんせいばいに小便いんせいばいすんでいどーやーんち（それで犬は小便するときには、貫った足だからと、足を上げて小便するそうだよと）、これも例え話でないかな。本当の話かどうか知らんけど。これ貫ったものだから、おしっこかけちゃいけないと。

昔は火鉢があつて、その火鉢に五徳というのがあつて、それに薬や罐かんかけてやりよつたのよ。だから、あれは三本〔足〕でもできるでしょう、こんなしてね。あれは足が四本あつて、あれの足から神様が、犬にくれたつて。だから、片足上げてしっこするといふんですが、あれもねえ、〔これもこんなつてよう〕といふが、これは嘘かも分からん。

平成二年七月六日 山城綾子・崎山用彰・栗国実・通事美香聴取 宮城昭美翻字 T 83 A 6

⑥

住吉 浜比嘉ナへ（大正七年七月五日生）森根

自分どぬお祖母いさんたーからーあらん（自分のお祖母さんからではない）。小那覇ブーテン（舞天）先生ていう、歯医者がいらっしゃつたつて。あの人がこつちの公民館で講演があつたときに聞いた話だけど。

犬は何で足三本しかなかつたのかね。三本しえー不自由でしょう、歩けないわけさ。だから、この仏壇に、神様に、もう一本はお願いしてあるわけさ。それから、神様は考えてからに、この香こ炉ろの足は、昔は四本あつたつて。だからこれはもう、いつもこつちに座まつているだけだから、三本で大丈夫だから、

「一本はじゃあ、犬に上げよう」

つて。で、犬に上げたからさ、この犬は、もう足を貫つて四本なつたといつてね。そしたら、しっこするときにはこんな

してやるでしょう、片足を上げてこんなして。この足は神様から貰った、授かったもんだからね、濡らしてはもうたいへんって、いつもこんなして足上げて、濡らさないようにしているって。私もこれ、小那覇先生からの話、ただ覚えているだけです。

平成二年二月一六日 平良真也・加島三史・香村夏子聴取 大川清子翻字 T187A4

7

嘉間良 普久原ウシ（大正二年一月二五日生） 嘉間良

あのう、御香炉は四本あるけれど、犬の足は三本だったね。してから、もう、片足ゲットウー〔びっこをひく〕するさーね。だからこんなしていけないからというて、火の神の御香炉は足が四本あるから、あっちから取って、で、犬にあげたっていう話はあったね。これは神様が取ってあげたかねえ。あれから譲られたという話はあるけれど。そして、犬が小便するとき、片足上げてやるのは、あれは、神様から貰った足を濡らしてはいけないって。御香炉からもらった足だから。この話は誰からも聞かない、もういろいろ、何かのときに集まるさーね、四、五名も、五、六名も。そのときに話出たはずよ。冗談話からそれは出たはず。友達同志が集まったときにね。

注 ①火の神・・・沖繩に仏壇が普及する前から、家庭を守る大切な神様として台所に祀られてきた。石三個を鼎型に並べたもの。何か願うことがある場合は「仏壇」より「火の神」を先に拝む。

平成二年二月一四日 豊岡早苗・諸喜田綾子・稲嶺悦子聴取 照屋京子翻字 T178A7

⑧

中央 金城初子（大正五年二月二四日生）石川市

本当はあのう、御竈加那志^①、火の神加那志^②の足は四つあったって。今、三本になっているでしょう。犬の足が三本あったから、この御竈加那志^①が見てからに、

「あんたはよく歩くのにね、三本でよくこんな歩きの、私はもう一本、多いからね、私はあんまり歩かんから、私のものから一本分けてあげるから、四本^{えんげん}になしなさい」

と言って、御竈加那志^①から一本は貰ったから、「犬は」おしっこするときにも、

「恩、恩があるから」

と言ってね、濡らさないようにして、片足は上に上げてしっこするって。この話は聞いた。これもお父さんから聞いた。

注 ①御竈加那志……ここでは香炉のこと。加那志は、敬意を表す接尾辞。

②火の神加那志……火の神。沖繩に仏壇が普及する前から家庭を守る大切な神様として台所に三個の石をよりましたとして祀られてきた神。加那志は、敬意を表わす接尾辞。

平成三年五月二三日 宮城昭美・香村夏子・謝敷勝美・石川小百合・大川清子・照屋京子聴取 石川小百合翻字 T 189 B 7

⑨

胡屋 當真アキ（明治四三年七月一〇日生）泡瀬

貰った足だからね、大事にしよう言うて、片足上げておしっこするそうです。そういう話。神様からいただいたねえ、あのう、いいことでもしたんだらう。で、四本になった。

「あんた歩きにくいだろう」

と言うて、神様が四本足にしたからね、

「これは神様からいただいた足だから大事にしよう。濡らしたらいけない」
 て、こうして片足は上げておしっこするだろう、今でもさあ。そういうまあ、おとぎ話、おもしろいお話があるんだけど。
 この足は、お釜からんてい言たんや、んちゃ（うん、そうだ）。お釜はね、三本足よう。ね、あれは三本でも立つからね。
 あれから取って付けたとか何とか。それは、はつきり覚えてないけどね。何か、はつきり分らないよ。気にしないけど。
 何からか取って付けたそうだよ。

平成二年八月一九日 山城綾子・安次嶺寿・崎山須麻子聴取 香村夏子翻字 T 103 A 5

10

胡屋 當真アキ（明治四三年七月一〇日生）泡瀬

犬は三本足であつたてな。これは昔話、みんな知っているよ。三本足であつたいゆてね。犬は、昔、三本足であつたそうだからね。このウカマガナシー（お竈様）は四つあるだろう。この火の神の神様（香炉の足）は四つこう、立っているだろう。それ三つにしてね。犬は、

「三本では不便だから、もう一本足を出して下さい」と言つて、神様に頼んだら、

「そんなら、火の神のあの（足）四つあるのは取つて、火の神は三つにして、あれ動かんから、あんたの足につけようねえ」
 言ゆてね、神様が（犬の足を）四つ足にしたそうだよ。それでね、今でも電柱の前でおしっこする時には片足上げるだろう。今でも、おしっこする時には犬は片足上げるよねえ。あれは、神様からね、譲ってくれた（足に）おしっこでもかけたら、失礼になる言うて、それで。理屈でそういうているかも知らんけど。そういう話が、犬が片足を上げてしっこするのは、神様から貰つた足、しっこちよつとでもたらしたら、失礼になるいうてね、そうしているんだあといつてね。そんなこともあるかなあ。

11

中の町 比嘉貞信（昭和二年四月二九日生）上地

くぬ話ん、私が聞ちゃしえー、^①小那覇ブーテン（舞天）先生ぬ話。話の受け売り。

この話も、私が聞いたのは、小那覇ブーテン先生の話。話の受け売りです。

まーぬ家んけーん仏壇にあてい、仏壇ぬ前んかいやー必じ御香立ていーる御香炉ぬあいびーしが。くぬ御香炉ぬ足や三ちやがやーんでいる話やし。いつペー炉ぬ足や三ちやがやーんでいる話やし。いつペー面白いびーん。本当や御香炉ぬ足あ四ちあいびーたんでい。あんしが、神様んかい 頼まりやーなかい、くれー三ちなてい、ずーつと、なー、御香炉ぬ足三ちんち決まとーしが、くれー実えー、本当や、くぬ足や犬ぬ持ちよーびーん。

昔、御香炉ぬ足あ四ち、また、鳥や二ち、百足や百、字ん百んち書かつとーん、百足。^②ハブお足ねーん。うんぐとうし、神様ぬ決みてーしが、犬お足あ三ちあたんてい。あんさでー、くぬ犬ぬ足あ三ちさーなけー歩ち苦さぬ、ゲットウイ、ゲットウイし、なーいっペーなーす

昔、御香炉の足は四つ、また、鳥は二つ、百足は百、字も百と書かれている、百足は。ハブは足はない。こんなふうには、神様が決めてあるが、犬の足は三つだったつて。そうしたから、この犬の足は三つでは歩きづらくて、ゲットウイ、ゲットウイしてもうとつても不便で、もう、何をして、走っても、もう三つしか足がないから、みんなもう、歩きづらくて不便で、こんなではいけないと

くえーっち、なー、何しーわん、走えーしーわん、なー
三ちる足ああくとう、むるなー、歩ち苦さぬすくえー
さーに、かんしえーならんむんでいやーに神様ぬ前んか
い行ちやーに、

「えーさい神様、なー、私ねー犬るやいびーしがなー、
物ん自分くるしがりてい食みわるやい、なー、あまはい、
くまはい、歩きんしわるやしがなー、だー、うぬ足ん三
ちるやいびーくとう歩ち苦さぬ、かんしえーないびらん
くとう、ちやーがら足一ちえー多くなちきみそーらん
がやー」

神様んかい御願えしえーるふーじ。あんされー、神様ん、
「あい、やつさーやー。だー、いやー物おぼつべーてい
足三ちる作てーしが、んちや、いやーが仕様見じーね、
いへーどうーぐるさつさーやー。あんしえーうれー、ん
ちや、考えていとうらしえーやるむんなー。待つち
よーきよー」

でいやーに、あんさーに一番足ぬ多さる、くぬ百足、此
れ③大和口しえー百足んでい言やびーしが、くり百足呼
びやーに、

「えつ、百足よー、いやーや、うさきーなーなー足持ち
よーくとうや、一ちえー分きらんなー」

思つて神様の所に行つて、

「もしもし、神様、私は犬であります、食べ物も自分
で工面して食べないといけないし、あつち行つたり、こ
つち行つたり歩かないといけないが、ほら、この足も三
つですから歩きにくくて、不便で仕方ありませんので、
どうにか足を一つ多くしてくれませんかねえ」

神様にお願ひしたようです。そうしたら、神様も、

「ああ、そうだねえ。もう、あんたのは、間違えて足を
三つしか作つてないが、そういえば、あんたの歩き方を
見たら、少し歩きにくそうだねえ。そんならこれは、う
ん、考えてあげないといけないねえ。待つていなさい
よ」

と言つて、そうして、一番足の多い、この百足に、これ
は大和口では百足と言いますが、この百足を呼んで、

「おい、百足よ、あんたは、こんなにたくさん足を持つ
ているからね、一つは分けてくれなにかねえ」

つて、神様が頼んだから、この百足はまた、

「いや、違いますよ。私はこれだけあつて保つて歩ける
んですから、その一つと言えども譲れませんよう」

と、断られてしまつて。それで、あれにもこれにも、神
様は熱心に頼んだようだが、もうみんな、

んでい、神様が頼だくとう、うぬ百足えーまた、

「あつ、あいびらんどー、私ねーくつきーありわる、保ちやいびーくとう、うぬ一ちやらんでーまん譲ららんどーさい」

ち、けー断らつてい。あんさーに、ありんけー、くりんけー、いっぺー神様や頼でーるふーじやしが、なー皆、

「あつ、うれーなー別事お聞ちん、くり聞からんどーさい」

んち、誰ん合点さん。あんされー、神様ん困てい、

「ちやーさるむんがやー」

んち、とうるばてい考えとーたんてい。自分ぬ目ぬ前んかい居る御香炉ぬ立つちしよーし、けー見ちやくとう、
「くれー足あ四ちあしが、くぬ、御香炉んちやるむのー、ぬーただ、私前んかい立つちやるまでいるやる。まーんかい歩ちんしゃん。とーひやー、くりやさ」

んでいやーに、

「えー、御香炉よー、いやーや、歩ちんさんあい、用事でいちんねーらん、うまんかい立つちやる、うまちやー立ちどうやくとうやー。いやー足や、別に四ちならんとー、ならん筈やくとう、三ちしんしむる筈やくとう、

「ああ、これはもう別のことは聞けても、これはできませんよう」

と言つて、誰も合点しない。そうしたから、神様も困つて、

「どうしたものかねえ」

と、ぼんやりと考えていたつて。自分の目の前に居る御香炉が立っているのが、目にとまったので、

「これは足が四つあるが、この御香炉というのは、もうただ、私の前に立っているだけだ。どこにも歩かない。よし、これだ」

と言つて、

「おい、御香炉よ、あんたは歩くこともないし、用事といてもない、ここに立つたまま、ここにずっと立っているだけだからね、あんたの足は別に四つなくてもいいはずだから、三つでもいいはずだから、一つは譲らなねえ」

つて、神様が言ったから、御香炉は、

「はい、私はもう何処にも行きません。ただ、そこにもう、立っているだけですから、よろしいですよ」

と言つて、そうして、心安く合点したので、

「ああ、御香炉よ、ありがとうね」

「一ちえー譲らんない」

んでい、神様ぬ言ちやくとう、御香炉おー、

「うーん、私ねーなー何ん、何処んかい行ちやびらん。

よーん、其処んかいなー立つちゆる、立ちるやいびーく

とう、ゆたさいびんどー」

んち、あんさーに、なだやしく合点さる為なかい、

「とー御香炉よー、ありがとうやさ」

んち、くぬ御香炉ぬ足取やーに犬んかい呉てーるふーじ。

あんさー、御香炉お三ちさーなかい濟まち、くぬ犬お、

うぬ御香炉ぬ御陰に足一ちえー多くなやーに、うんに

んから、じこー歩ち易くなてい、いー塩梅し。やしが、

「神様から貰てーる大切な足やるむん」

ち、おしっこ、小便する度に片足上げてい小便し、あん

さーにちやー、神様ぬ恩義表ちよーるふーじーやんで

い。うんにんから、犬おー小便するかーじ足あ上ぎー

んち、決まとーるふーじーやいびん。

注 ①小那覇ブーテン・・小那覇舞天。小那覇全孝。

②ハブ・・・沖繩に分布する陸生毒蛇のうち、ハブ・ヒメハブ・サキシマハブの三種の総称。

③大和語・・・大和は、沖繩から日本本土をさすことば。大和語とは、日本本土で使われている言葉をさす。

と言つて、この御香炉の足を取つて、犬に呉れたようだ。

そうして、御香炉の足は三つで充分で、犬は、この御香

炉のおかげで足が一つ多くなつて、そのときから、とつ

ても歩き易くなつて、いい具合になつた。だけど、

「神様からもらった大切な足だもの」

と言つて、おしっこ、小便するたびに片足を上げて小便

して、そうしていつも、神様の恩に感謝を表しているよ

うだ。そのときから、犬は小便するたびに足を上げるよ

うにと、決まっているようであります。

あぬ犬ぬ話やよー。昔えー、あんすくとう、ある人ぬ話、昔人おー、うれー、全くあねーあらんたる筈やし、犬ぬ足あ三ちるあたると。あんし、そーたくとう、今度お、あぬ仏壇ぬ御香炉は四ちあたんと言っておりますねえ。あんさくとう、うぬ犬小ぬ、そーいり犬小なたくとう、

「あーな、うれー、私ねー三ちしん立たたりーしが、犬お歩きわるやくとう、四ちあるえーかる、一ちえーうりんかい呉れー」
んち、呉たしが、四本なつたという話やたるばーてー。

平成二年二月一日

平藏美恵子・仲宗根広恵・大川清子聴取 大川清子翻字 T 169 A 7

中の町 比嘉良信（大正五年一月一日生）大工廻

犬の話はね、昔、ある人から聞いた話。昔の人の話では、これは全くそうではなかったはずだが、犬の足は三本だったということだけ。それでも、そのようにしていたらしいが、今度は、あの仏壇の香炉は足四本あったと言っておりませぬえ。そうしたから、その小犬は利口な犬だったんで、「香炉」が

「これはもう、私は三本足でも立てるが、犬は歩かないといけないから、四本ないといけないから、一つはこれにあげなさい」
と言って、「犬に足を一本」呉れたので、四本なつたという話だったわけ。

中の町 山城清輝（大正一三年五月二七日生）嘉手納町

笑い話みたいになるんだが、犬小やしっこする場合に、片足上げてやるでしょう。なぜ、「ぬーんち、あんぐとうーし小便すが、いやーや分かいかみ（どうして、あんなふうにしっこするか、あんな分かるか）」と言われてね。これはね、犬はね、昔は足が三本しかなかったって。それで、神様にね、

「私はもう歩くのが大変好きなんだけど、足が三本しかないからね、大変不便だと。だから何とか、他の動物みたいに、牛や馬みたいに四つの足が欲しいんですけど」

と、いつもお祈りしたわけさ。

そしたら、神様が降りて来てね、

「四つの足、あと一本欲しいと言ったが、なかった」

と言ったんだけども、

「なー一ちえー是非欲さいびっさー（もう一つは是非欲しいですね）」

と言ったら、

「うん、じゃあ、あんしえー相談さーなかい、なー一ちえー、いやー足植ていとうらさやー（そんなら相談して、もう一つ、あなたの足を植えてあげようね）」

と、いうことで、ウコール（御香炉）よ、仏壇の前にあるウコール、あのウコールを呼んでね、

「ウコールよ、いやーや、年から年中トートーメーぬ前んかい居ちるうるむんや、足あ四ちなー入り用あらのーあらに

（御香炉よ、あなたは年から年中、仏壇の前に座って居っているから、足は四つは必要ないんじやないか）」
 と言ったらね、

「ぬーがさい（どうしてですか）」

ちゅつたらね、

「うん、実え、あぬ犬が歩くのに不便起こっているから、あと一本足が欲しいと言った」

「あんしー、ちゃーさびーがてー（そんなら、どうしますか）」

「いやーむん足一ちえー、うりんかい譲らんや（あなたの足を一つは、これに譲らないか）」

んちやくとう（と言ったから）、

「うんじゆがあん言みしえーるむんぬ、私ねー、なー、どーしえ歩かん、トートーメーんかいちゃー居ちるうるむんぬ、

足あ三ちしゆたさいびーるんしえー、一ちえー犬んかいうさぎれー「あなたがそうおつしやるなら、私はどうせ歩かないで、仏壇にいつも座っているんだから、足は三つで十分ですから、一つは犬に差し上げて下さい」
 いうことで、ほんで、ウコールから一本足を引っこ抜いてね、犬にあげたって。それで、犬は今もって、神様からいたたいたね、ウコールからいたたいた清らかな大事な足だから、ということでおしっこする時に濡らさないように、片足を上げておしっこをするというふうなことになる。それで、ウコールは今、足が三本しかないんだよ。ウコールは足は三本しかない。が、犬は四本なっている。それで、その足を大事にするために、おしっこする時は足を上げるって。

平成二年八月三日 照屋京子・諸喜田綾子聴取 宮城昭美翻字 T159 A2

14

諸見里

宮島真良（大正四年一月九日生） 諸見里

今の御香炉は、「足は」三本しかないでしょう。あれは元は四本あったらしいね。だがよ、この犬は三本しかなかったでしょうね。不便利だからという意味で、御香炉の御神かねー、それが一本あげて、犬は、これにしっこかけちゃーいかなんという意味で、こう「片足を」上げるといふ話は、ときどき耳にしたことあるねえ。「犬の足は」御香炉から貰ったというて。

平成二年八月一九日 平識美恵子・津嘉山朝昭・平良美夏・新城真恵聴取 香村夏子翻字 T105 A6

15

山里

伊佐安弘（明治四一年六月八日生） 白川

「犬の足は」まあ、三本では、歩くのも不自由だからと思って、線香を立てる御香炉ね、御香炉「の足」を一本貰った

ら、四本の足になったと。それで、その線香立てから貰った足を、もう、濡らしたらいかないかって片方かたうばう（の足）を上げて、おしっこはやると。ただ、それだけしか分からない。御香炉ごこうろに線香立てるでしょ。あれから、これは取ったらしい。

平成二年八月二一日 平識美恵子・津嘉山朝昭聴取 石川小百合翻字 T 137 A 7

13 年に何回

①

あぬよー、昔御神んかいや、

「牛え、幾月。馬あ一年」

でい言ち、うぬ吟味言い渡しぬあてーぎさんてー。あんさくとう、馬ぬ一年なたくとうよー、なーくさみち、

「一年、一年にる、私ねーしみーるい」

でい言やーに、あんさーにくさみちやーに、暴りてーるふーじてー。あんさくとう、丁度、ばんじ暴りやーに、逃んぎーによ、

「人間のーさい、人間のーさい」

ち追てい行じえーるふーじ。あんさくとう、

「人間のーなー、いちやていんしむさ、いちやていんしむさ」

でい言やーに、あんさー、いちやていんしむんでい。

年に何回やしえーやー。うりが、馬あ一年なとーるばーてー。一年にる一回ないるばーやつきみやー。あんさくとう、なー馬ぬ暴りてーるばーてー、くさみちやーに、あんさくとう、

知花 宮里秀栄（明治四二年九月二〇日生）知花

あのね昔、神様がね、

「牛は幾月、馬は一年」

と言って吟味、言い渡しがあつたらしいさあ。そうしたから、馬は一年に「一回」なつたから、もう怒って、

「一年、一年に一回私はさせるのか」

と言って怒ってね、暴れたみたい。そうしたから、ちょうど、馬が暴れている最中、「神様が」逃げまわっている時によ、

「人間はどうしますか、人間は」

と言って、神様のあとを追いかけて行つたみたい。そうすると、神様は、

「人間はもう、いつでもいい、いつでもいいさ」

と言って、それから人間はいつでもいいって。

年に何回でしょう。これが、馬は一年なっているわけさ。一年で一回だけできるわけさあね。そうしたら、馬が怒って暴れているわけさあねえ。ちょうど、その時に、
「人間はいつやるか、人間は」

「人間のーさい、人間のーさい」

し、追てい、御神ん追てい行じやくとう、

「いちやていんしむさなー、いちやていんしむさ」

んち。あんさーに、いちやていんしむんでい。

と言つて、「人間が」神様を追いかけて行くと、

「いつでもいいよ。もう、いつでもいいよ」

と言われたので、いつでもよいことになった。

昭和六〇年十月一三日 照屋寛信・山本啓子聴取 上門博之翻字 T 23 A 18

②

南桃原 山内盛福（大正二年九月二五日生）南桃原

神様が、年に何回かを決めていた時、最後に馬が行ったらね、一年に一回と回数減らされてね、

「それじゃあ」

と言つて怒つて、それで神様蹴つてね。その後に、人間が行ったら、

「もう、勝手にしなさい」

と言つたつて。それで人間は自分勝手に自分らで〔やっている〕。

平成二年二月一六日 上門千賀子・森章吏・諸喜田綾子聴取 照屋京子翻字 T 185 B 3

14 猿の赤尻由来

エーキン人ぬやー、稲え植たくとうや、貧乏者ぬやー、
「うぬ稲えちやーし植たが、いったーむんゆかとーるむ
ん」

でいちやぐとうやー、

「うぬ米種え、炒りちからや、炒りちからや植りよー」

でい、貧乏者んかい、エーキン人ぬ、りくさし言ちきた
ぐとうや、さくとう、

「やーんー」

うぬ、米種え、炒りちえーぐとう、みーらんしえー。憎
さしや、あんし、うぬ貧乏者ぬや、恨み持っち、うぬ

門ぬやマイイサー、マイイサー焼ちやーいや、うぬ貧
乏がどー、恨みしマイイサー焼ちやーいや、

「いやーや、うぬ石、石んかい登りよー」
でちやぐとうやー、あんさーに赤まい猿なとーんでい。

注 ①米種え・・・稲の粳種。

②マイイサー・・・黒い固い石で形の丸いもの。(和名：微粒砂岩?)

高原 長峯シズ (明治四五年三月二〇日生) 高原

金持が稲を植えたらね、貧乏者が、

「その稲はどのようにして植えたのですか、あなたたちの稲がよく実っているようだが」

と尋ねると

「米種は炒ってから、炒ってから植えなさいね」

と貧乏者に金持ちの人がずる賢しく教えたから、

「そうねえ」

と。だがその米種は炒ったので、芽がでないさあ。それで、貧乏者は金持ちを憎んで、恨みを持って、門の前にある真石、真石を焼いてね、(金持ちに)
「お前はその石に座りなさい」

と言ったから、それから金持ちは赤尻猿になったという。

平成二年三月一日 平識美恵子聴取 宜保勝翻字 T 43 A 10

15 蛙由来

①

高原 島袋シズ（明治四四年八月一〇日生）高原

蛙が、

「もらわしてちょうだい」

と言って神様に願ったから、真珠の玉をもらった。

真珠の玉を取ったら、また神様に、

「私はね、人間のように歩かせてちょうだい」

と言ったらね、

「はい」

と言って歩かしたら、目が後ろなってしまうて見えない。そして、またも願って

「私は目が後ろになつて見えないから、元の通りにさせて下さい」

と言ってね、この持っていた（真珠の玉を）飲んでしまったというおとぎ話。これだけ。

平成五年六月二一日 宮城昭美聴取 宮城昭美翻字 T 84 B 1

②

蛙が真珠の玉を持って、こんなにして歩くでしょう。

「神様、私は立って歩くようにして下さい」

と言ったらね、これ持って歩いたらね、後ろしか目が見えないから、また、願って、

「元のように返してちょうだい」

と言ってね、こんなにしたという話。おとぎ話だけどね。

高原 島袋シズ（明治四四年八月一〇日生）高原

平成二年三月一日 山城綾子聴取 宮城昭美翻字 T44A9

16 猫の名の由来

高原 長峯シズ（明治四五年三月二〇日生）高原

くりんかい、うぬ子丑寅んかい入らんしえーやー。

猫はガチマヤーなやーにや、

「いやー、猫や入りらん」

でいちよ、

「入りらん」

でい言ち、子丑寅んかい入らんでい。ガチマヤーな

やー、猫付きらとーるばーよ。

十二支に、「猫は」入ってないでしょう。猫は食い意地が張っているので、

「お前のような奴は入れない」

と言ってね、入れないということと十二支の中には入ってないんだって。ガチマヤー「食いしん坊」なので、マヤー「猫」と名前が付けられているわけ。

平成二年三月一日 平議美恵子聴取 宜保勝翻字 T 43 A 12

17 もの言う蛙

泡瀬第一 普久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

夫婦やし、妻え、いっぺー、がちまやーなやーによ、夫ぬ仕事行じていからー、物煮ち食でいさくとうやー、夫ぬ来んとぅー、ちゃーんねーらんあたいなーさくとう、うぬアタビーがうりが仕事する所うとーて

いや、
「いやー妻えー、物、物ぬかーじどう喰いんどー」

ちや、言ちやくとう、

「ぬー何処うてい言がーやーち、さくとうなー、何処にん何ん居らんひるまさつさー」

んち、そーたんでいしが。あんさー、うぬ蛙がよー、

「私や、いったー家んかい連れてい行き」

言ちやくとう、あんさー連れてい行じやんでい。あんさくとう、んちや、うれー物煮ちえー食み食みそーさやー、夫ぬ来んとぅー、な、全部無んなてーういさーんち、そーたんでいるうりが話。

蛙が喋るわけ。夫んかい言ちよーるばーてー。

「いやー妻えうんぐとうし、ふつちー、ふつちー物ど

夫婦がいてね、妻はとっても食いしん坊で、夫が仕事に出てから、物を煮て食べていたらしくてね、夫が帰ってくる時にはいつもなくなるぐらい食べるものだから、蛙が、夫が仕事している所に来てね、

「お前の妻は、食べ物のあるだけ食べているよ」
つて言うと、

「なに、何処で言っているかねえ。どこにも何も無いが、不思議だなあ」

とそのまま過ごしていたらしいが。そうしたら、その蛙がね、

「私をお前の家に連れて行きなさい」

と言うので、蛙を家に連れて行つたつて。そうしたら、ほら、これは、物を煮ては食べ食べしているから、夫が帰つて来るまでには、全部なくなつていたりしてたんだった。そんなことがあったという話。

蛙が喋るわけ、夫に言っているわけさ。

「お前の妻はこんなして、いつも、しょつちゅう、しょ

う煮ち食いんどー。いやーが来んとぅねー、無んしが、あれー、あり一人さーに食どーんどー」

んでい言ちさくとう、あんさーに、うれーやー、

「私すぐ、いったー家んかい連れてい行けー」

雨だいうとーてい、ちゃー喋たんてい、あんさーに。

うぬあんさーい女おうり煮ち食みーにん、うりが喋ぐ

とうや、人ぬ喋とーんてい、人お居らんだあくとう、

喋とーんちえー分からんしえーや。あんししやたさ。あ

んさーうぬ夫ぬあとーみーあきたんでいさんていち。

二、三カ月前の農協からくる本に載っていたよ。

つちゅう物を煮て食べるんだよ。お前が来るまでになくなるのは、あれ一人で食べているんだよ」

つて言つた。そうして蛙はね、

「私を、お前たちの家に連れて行きなさい」

「とこので、連れていくと」いつも軒下ですつと喋つ

ていたんだつて。そうしたら、女が食べ物煮て食べる

時もその蛙が喋るのでね、人が喋つていと思つたら、

人はいないので、喋つていのが何か分からないさあね

え、そんなだつたつて。それで、しまいには、その夫が

見破つていたんだつてさ。

平成二年七月六日

山城綾子・栗国実・通事美香・崎山用彰聴取

上門博之翻字

T 83 A 13

18 おろかなロバ

馬こ小こんかい塩しほ乗ましやーに、海渡うみわたてい行いちゆたんでい。
したくとう、うぬ、馬こ小こや、りくちさーにや、

「なー、あんし重おもさるむん」

んでい、ちちんちやくとうや、うぬ塩しほお全お部ぶ溶ときたく
とうや、軽かろくなとーしえーやー。

次つぎに乗ましてーしえー、草鞋わらじやたんでい。草鞋わらじいっばい
乗ましやーに歩あかちやくとうや、くぬ間ま海うんかい浸ひかた
くとうや、浸ひかたくとう軽かろくなとーてーるむんでいやー、
うぬ馬こ小こやまた、つい居いやーにさくとう、重おもくなてい。
草鞋わらじえやすんくわい、水みづ吸すうしえー、あんさーにや。う
んぐとう、こんなのはね、幾いくらでもあれがあるはずよ。

平成二年七月六日

山城綾子・粟国実・通事美香・崎山用彰聴取

上門博之翻字

T 83 A 15

泡瀬第一 普久原 幸（大正五年三月五日生）泡瀬

馬うまに塩しほを乗ませて、この海うみを渡わたって行きよつたつて。す
ると、この馬うまはずるがしこくてね、

「もうこんなに重いのに」

と、座まり込んでしまつたらね、この塩しほが全お部ぶとけたので、
軽かろくなつてゐるさあね。

次つぎに乗ませたのは、草鞋わらじだつたんだつて。草鞋わらじをいっば
い乗ませて歩あかせたからね、この前は、海うみに浸ひかつたら軽
くなつたからと思おもい、その馬うまはまた、つい、「同じよう
に海うみの中で」座まり込んだので重おもくなつた。草鞋わらじは潮うしほを吸
うし、水みづを吸すうでしょう、こんなふうにな。それでね、
こんな話はなしはたくさんあるはずよ。

19 酒の始まり

山内 内田清栄（大正一〇年四月二五日生）

木の根っ子の株ですよねえ、まあ古ぼけた木の根っ子の穴みたいになった所です。そこに、木の実を持って来て蓄える習性の猿がおったと。ところが、その猿が蓄えたその実が、日にちが経つに従って醗酵はっこうするんですね。そして、甘味が醗酵して、お酒に変化したと。それを嘗めているのを見て、人間が近づいてみると、芳かほしい臭においもするし、嘗めたら、いわゆる酒の、果実酒の味だったと。それから、

「あはー（ふーん）、果物使ってこういうふうに作れるんだなあ」

と言って、お酒を発明するようになったと。その話は聞いたことある。戦前、戦中、戦前の話だけであるいは、当時の先生方の話だったのか、先輩の話だったかね。まあ、そこまでは覚えませんがとにかく、猿だと。猿から教わったという話は聞いたすね。

平成三年八月一七日 池原健・宮城昭美・宜保勝聴取 照屋京子翻字 T 191 A 19

20 牛に化けた古い竈

牛^①マジムンと言ってね、牛が出てね、その牛マジムン見る人は、みんな、マブヤーという物を落として、病気になる。して、その、イチヌスー^②というのがね、

「これは、いけない」

と言って、出てみたら、うんと来たらしいんですよ。

「また、来るな、本当に」

ちて。来たらね、それも、化け物だから、それ、うんと頑張つて、重いもんだから頑張つて引つ張つて来て、自分の屋敷に木にくびつておいたらね、古竈^③、塗りも、塗りにけー剥ぎとーる竈^④うりやたんでい。昔え全部んな物化きーたんでい。

あんさーに、いったーが分からんはじやしやがや、昔人^⑤お鍋ぬ蓋よあれ必じ、屋敷に置ちゆたんよ、や。化き物入ねーならんでい。グシチし、かんし編まつとーる鍋ぬ蓋んちあしえー、シンメーナービぬむん。ありが古。化け物といふのは門から入つてきない。裏から入つてくる。グシチと言ってね、長く見えるウーガンジ

古謝 金城眞良（明治四〇年七月一四日生）美里

牛が化けて、牛マジムンというのがいたがね。その牛マジムン見る人は、みんな、マブヤーという物を落として、病気になる。イチヌスーというのがね、

「これはではいけない」

と言って、外に出てみたら牛マジムンが来たらしいんですよ。

「本当に来るなあ」

と言っていたら来た。それは、化け物だから、重いので頑張つて引つ張つて来て、自分の屋敷の木にくびつておいたらね、塗りも剥けてしまった古い竈であったんでい。昔はみんな、そういうものは化けたんでい。

それに、あなたたちには分からないだろうが、昔の人は、鍋の蓋を必ず屋敷に置いていたんだよね。化け物が入つたらいけないといって、すすきで、このように編まれている鍋の蓋があるでしょう、シンメーナービ〔四枚鍋〕の蓋の古いもの。化け物は門からは入つてこない。裏から入つてくる。グシチと言ってね、長く見えるウー

ヤー、ありが葉っぱで、竹でこうして巻いて作りよつたんだ。そんなもんだ。

ガンジャーの葉っぱで、竹でこうして巻いて作っていたんだ。そんなもんだ。

注

①マジムン・・・マジムンは妖怪や幽霊などのたぐい。得体の知れない恐ろしいもの、不思議なもの、あるものが外觀を変えたものをいう。ときに、危害を加える。牛マジムンとは牛の化け物のこと。

②イチヌスー・・・首里に住んでいた人で、化け物を退治することができた。

③籠・・・遺体を納めた棺箱を墓まで運ぶ朱塗りの輿。

④シンメーナービ（四枚鍋）・・・芋炊きなどに用いた丸底で円錐状の鍋。家庭用鍋の最大のものである。メーは鍋の大きさをあらわす単位。1枚2枚とは、一定の鉄の塊を表し、その3枚あるいは4枚分の鉄で作った鍋と
いうことであるらしい。因みに四メーは約28リットルの水が入る大きさ。

⑤すすきでこのように編まれている鍋の蓋・・・方言ではカマンタという。藁や茅を編んで造った鍋の蓋で、四メー鍋の蓋として用いられた。話者のところでは、ウーガンジャー（和名：ヨシスキ？登川では唐ウージともいう）でも造られたと思われる。

平成二年三月一二日 奥座範秋聴取 宜保勝翻字 T 64 A 13

調査日誌と調査協力者

昭和五五年度調査（五月一八日）

沖繩国際大学口承文芸学術調査団による沖繩市字池原・登川二字の調査。

【調査団長】

沖繩国際大学文学部教授 遠藤庄治

【口承文芸研究会】

〔池原〕池村弘子・玉城弘美・仲宗根フキエ・喜納弘

子・岡田浩・新城悦子・島袋美奈子・花城洋

子・小橋川生枝・大熊亨・西銘千恵美・渡慶

次勲・仲宗根悦子・与那原早苗・佐渡山美智

子・仲松庸尚・安里和子・川上

〔登川〕比嘉和男・崎原有美恵・禰晴一郎・富村朝

夫・仲原敦子・山岸信浩・大本敬子・西江美

智・湧川紀子・辺土名美智代・大城直樹

【美里中学校】

金城あつ子・緑間直美・安田啓子・上江洲り

カ・幸喜愛

昭和六〇年度

沖繩市池原・登川・知花調査

〔池原〕七月／一日・八日・一八日・二三日・二九日

八月／九日

〔登川〕八月／二日・一九日・二六日

九月／二七日・三〇日・

一〇月／一日

【沖繩民話の会】

仲松庸尚

【編集事務局】

辺土名初美・宮城利旭・宮城昭美・金城茂

雄・川崎義隆・仲松庸尚

【アルム経営】

真栄城栄子

〔知花〕九月／九日

一〇月／三日・一三日

【沖繩民話の会】

辺土名初美・仲松庸尚・安里和子・下田博

美・照屋寛信・辺土名朝三・比嘉久・崎原由

美子

【編集事務局】

島袋芳敬・辺土名初美・宮城昭美

【市民】

山本康八・山本啓子

昭和六一年度

沖繩市知花調査

〔知花〕七月／八日・九日・一〇日・一一日・一二日

八月／六日・七日

【編集事務局】

高江洲裕美・宮里信勇・宮城昭美

昭和六二年度

沖繩市知花・松本・美里調査

〔松本〕五月／二七日・二八日

〔美里寿〕六月／二二日

〔松本〕六月／二六日・二九日

七月／一日・七日・八日

〔知花〕七月／一四日

九月／一〇日

一〇月／二六日

【編集事務局】

桑江良秀・高江洲裕美・宮里純子・宮城昭美

平成元年

〔宮里〕一二月／五日

【編集事務局】

比嘉ゆり子・宮城昭美

平成二年度

第一次民話調査（沖繩市旧美里地区調査）

(1) 調査団 沖繩市口承文芸調査団

(2) 調査団編成

① 団長 沖繩国際大学文学部教授 遠藤庄治

② 幹事 沖繩市立郷土博物館

宮城昭美・比嘉ゆり子

沖繩国際大学

上門博之・宜保勝・山城綾子

③ 調査団員

ア 沖繩民話の会

宮城昭美・比嘉ゆり子・渡慶次勲・喜久山

政信・知花春美・村山友江・喜納弘子・仲

松庸尚・大城直樹・伊良皆八重子・比嘉

久・山岸信浩・赤嶺明美・島本要・与那嶺

礼子

イ 遠藤研究室

平敷美恵子・上門千賀子・豊岡早苗・謝敷

勝美

ウ 沖繩国際大学 遠藤ゼミナール受講生

上門博之・宜保勝・山城綾子・崎山用彰・

諸喜田綾子・平良真也・與座範秋

エ 沖繩国際大学 国文学科学生

三年次 古堅利江子・山城直美・瀬底正

祥・當山政子

二年次 香村夏子・仲宗根広恵

一年次 飯田泰彦・石原由佳里・犬養憲

子・桃原笑美子

(3) 調査団日程及び内容

平成二年三月一〇日 調査団結団式

(沖繩市立郷土博物館 文化センター三階)

司 会 沖繩市立郷土博物館

館長 山田義夫

団長挨拶 沖繩市口承文芸学術調査団団長

遠藤庄治

激励の挨拶

ア 沖繩市教育委員会

教育部長 稲嶺盛隆

イ 沖繩市老人クラブ連合会

副会長 川上盛友

ウ 沖繩市美里地区概況説明

郷土史研究者 池原秀光

(4) 調査期間 二月一日～一四日

平成二年三月一日 高原・大里・宮里・

美里寿

平成二年三月二日 泡瀬・泡瀬若松(第

一)・泡瀬睦(第

三)・古謝

平成二年三月三日 与儀・比屋根・東桃

原・吉原

平成二年三月四日 東区暁・美里旭・明

道

第二次民話調査(沖繩市旧美里地区補足調査)

(1) 調査団 沖繩市口承文芸調査団

(2) 調査団編成

① 団 長 沖繩国際大学文学部教授 遠藤庄治

② 幹 事 沖繩市立郷土博物館 宮城昭美

沖繩国際大学 宮里英樹・諸喜田綾子

ア 遠藤研究室

武嶋昭子・平敷美恵子・上門千賀子・豊岡

早苗・謝敷勝美

イ 沖繩国際大学 遠藤ゼミナール受講生

上門博之・宜保勝・山城綾子・崎山用彰・

諸喜田綾子・平良真也・與座範秋・宮里英

樹・照屋京子・仲宗根広恵・稲嶺悦子・新

垣孝幸・森章吏・大川清子・与那嶺昭郎・

加島三史・香村夏子・粟国実・通事美香・

富平恵智子・石川小百合

ウ 沖繩市立郷土博物館

宮里信勇・宮城昭美

(3) 調査期間 平成二年七月六日

宮里・泡瀬・泡瀬第一・泡瀬第三・桃原・

高原・古謝・比屋根

昭和六〇年度

沖繩市旧コザ地区民話調査

〔園田〕十一月／一九日・二七日

〔編集事務局〕

金城茂雄・宮城利旭・辺土名初美・宮城昭美

昭和六二年度

沖繩市旧コザ地区民話調査

〔園田〕七月／一七日・二一日・二八日

〔編集事務局〕

比嘉寛勝・上間和夫・宮里純子・宮城昭美

平成二年度

第一次民話調査（沖繩市旧コザ地区調査）

(1) 調査団 沖繩市口承文芸調査団

(2) 調査団編成

① 団 長 沖繩国際大学文学部教授 遠藤庄治

② 幹 事 沖繩市立郷土博物館 宮城昭美

沖繩国際大学 上門博之・宜保勝・

山城綾子

③ 調査団員

ア 沖繩民話の会

宮城昭美・島本要・喜久山くに子・比嘉和男・伊良皆八重子・上田和子・新城真恵

イ 遠藤研究室

武嶋昭子・平敷美恵子・上門千賀子・豊岡早苗・富平恵智子・仲尾由美

ウ 沖縄国際大学 遠藤ゼミナール受講生

上門博之・宜保勝・山城綾子・崎山用彰・諸喜田綾子・平良真也・與座範秋・宮里英樹・照屋京子・仲宗根広恵・稲嶺悦子・新垣孝幸・森章吏・大川清子・与那嶺昭郎・加島三史・香村夏子・粟国実・通事美香・謝敷勝美・石川小百合

エ 沖縄国際大学 国文学科学生

二年次 池原健

日本語表現法演習受講者

新垣登季子・新田尚子・有銘和江・泉克也・稲嶺道子・伊野波智美・伊波つばな・運天雪江・大城博充・大田判・荻堂剛・翁長利江・嘉陽田尚行・川満裕子・岸本かおり・儀間薫・金城奈緒子・久保田聡子・座嘉比卷・崎原さおり・崎山須麻子・瑞慶覧

(3) 調査団日程及び内容

平成二年八月一八日 調査団結団式

(沖縄市立郷土博物館 文化センター四階)

司 会 沖縄市立郷土博物館

館長 山田義夫

団長挨拶 沖縄市口承文芸学術調査団団長

遠藤庄治

激励の挨拶

ア 沖縄市教育委員会

教育部長 當眞哲雄

イ 沖縄市老人クラブ連合会

副会長 嘉味田朝興

ウ 沖縄市美里地区概況説明

郷土史研究者 比嘉貞信

(4) 調査期間 八月一八日～二三日

平成二年八月一九日 胡屋・諸見里・園田・

南桃原・センター

平成二年八月二〇日 安慶田・久保田・照

屋・山内

平成二年八月二一日 越来・山里・室川

平成二年八月二二日

本調査 嘉間良・城前・住吉

補足調査 嘉間良・城前・安慶

田・諸見里・久保田

平成二年八月二三日

本調査 中の町

補足調査 越来・久保田・南桃

原・センター・園田

① 団長 沖縄国際大学文学部教授 遠藤庄治

② 幹事 沖縄市立郷土博物館

宮城昭美

沖縄国際大学

石川小百合・大川清子・香村夏子・

照屋京子

③ 調査員

遠藤研究室

武嶋昭子・平敷恵美子・上門千賀子・豊岡

早苗

遠藤ゼミナル受講生

上門博之・宜保勝・加島三史・崎山用彰・

諸喜田綾子・山城綾子・與座範秋・宮里英

樹・平良真也・森章吏・粟国実・新垣孝

幸・石川小百合・稲嶺悦子・大川清子・香

村夏子・照屋京子・通事美香・仲宗根広

恵・与那嶺昭郎・謝敷勝美

第二次民話調査（沖縄市旧コザ地区補足調査）

(1) 調査団 沖縄市口承文芸調査団

(2) 調査団編成

(3) 調査年期間

平成二年一月一四日 中の町・室川・園田・

久保田・胡屋・嘉間良

平成二年二月一五日 安慶田

平成二年二月一六日 城前・山里・越來・南

桃原・住吉

平成二年二月二一日 久保田

平成三年五月二三日 センター

第三次民話調査（沖繩市旧コザ地区補足調査）

(1) 調査団 沖繩市口承文芸調査団

(2) 調査団編成

① 団長 沖繩国際大学文学部教授 遠藤庄治

② 幹事 沖繩市立郷土博物館

宮城昭美

沖繩国際大学

石川小百合・大川清子・香村夏子・

照屋京子

③ 調査員

遠藤研究室

武嶋昭子・仲尾由美

遠藤ゼミナール受講生

与那嶺昭郎・通事美香・加島三史・新垣孝

幸・石川小百合・大川清子・謝敷勝美・照

(3) 調査期間 平成三年八月一七日

山内・山里・住吉・照屋

美子

屋京子・新垣良子・池原健・稲嶺留美子・
犬養憲子・小橋川一・友利幸子・仲地香
織・新垣純子・山城綾子・宜保勝・桃原笑

参考文献

- 『沖繩語辞典』 国立国語研究所編 大蔵省印刷局発行 昭和五八年四月三〇日
- 『角川日本地名大辞典 47 沖繩県』 竹内理三編 角川書店発行 昭和六一年七月八日
- 『沖繩古語大辞典』 沖繩古語大辞典編集委員会編 平成七年七月一〇日初版発行 株式会社角川書店
- 『図説 日本鳥名由来辞典』 菅原浩 柿澤亮三著 柏書房株式会社発行 一九九三年三月二五日
- 『仲里村史第四卷 資料編3 仲里の民話』 仲里村役場 平成七年八月一日発行
- 『よなぐすくの民話』 与那城村教育委員会発行 平成元年三月三一日
- 『北中城の民話』 北中城村教育委員会発行 平成五年三月二〇日

おわりに

「昔ばなしをお聞かせ願えませんか」と市内の古老に呼びかけて、方言による語りの記録作業に着手してから二十年の歳月が経ちました。その間、昔ばなしを聞かせてくれる古老がめっきり少なくなり、聞き取り調査も困難をきわめてきております。かつては、どこでも聞くことのできた「雀孝行」の話でさえ、今では、とんと耳にすることがありません。

沖縄市教育委員会では、このような含蓄のある古老の語り口を後世に残すため、音声による記録はもちろん、これを文字化して広く市民のみなさまに読み継がれる本として発刊することになりました。

本書に収録された昔ばなしの語り手には、すでに物故された方もおられますが、テープに遺録された在りし日の声調は、時間を超越して聞くものを魅了してやまないものがあります。

このように、音声でなければ伝えることが難しい昔ばなしの領分を、あえて文字化し更に共通語対訳という形で本にすることは、多くの市民にそのおもしろさの一端でも読み取っていただけたらと考えたからです。本書が昔の先祖たちをしのぶよすがとなり、沖縄市の未来を創造するこころの架け橋になってくれることを祈念するものであります。

最後に、編集に際し貴重なご意見と援助を下さいました皆様に、厚くお礼を申し上げます。

むかしばなし(動物昔話)

沖縄市文化財調査報告書第23集

平成12年3月21日 印刷

平成12年3月31日 発行

発行	沖縄市教育委員会
編集	沖縄市立郷土博物館
	〒904-0031 沖縄県沖縄市字上地235-3
	☎ (098) 932-6882
印刷	株式会社 沖産業
	沖縄市中央3丁目5番46号
	☎ (098) 934-0987